

一般国道9号江津道路建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書 I

(鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡)

3月

島根県教育委員会
事務所

一般国道9号江津道路建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書 I

(鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡)

1995年3月

建設省浜田工事事務所
島根県教育委員会



久本奥窯跡



半田浜西遺跡出土遺物

序

建設省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地方を目指して、くらしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形成にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

江津地区においても一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして江津道路の事業を進めています。この道路は当面、山陰自動車道の機能も併せ持つ道路として活用を図ることとしており、国土の骨格を担う重要な道路でもあります。更に、過疎化が進み、若者の流出に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分配慮しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や江津市教育委員会の御協力のもとに平成3年度から発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成4年度に実施した「半田浜西遺跡」、「鹿伏山遺跡」及び平成5年度に実施した「久本奥窯跡」、「二宮C遺跡」の調査結果をまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術および教育のために広く利用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められていることへの御理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表するものであります。

平成7年3月

建設省中国地方建設局浜田工事事務所

所長 伊藤 仁

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受け、一般国道9号江津道路建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施いたしました。

平成4年度に半田浜西遺跡、鹿伏山遺跡、平成5年度に久本奥窯跡、二宮C遺跡の調査をしました。その結果、弥生時代から中世に及ぶ遺構、遺物の検出や窯跡という生産遺跡の様子が明らかになりました。

特に半田浜西遺跡での奈良三彩の破片、久本奥窯跡からの鶴尾の出土は江津市近辺での古代の役所、寺院の存在を窺わせるなど、今まであまり知られることのなかった石見地方の古代の歴史を解明する貴重な資料となりました。

本書がこの地域の歴史や文化財に対する理解と関心を多少なりとも高めることができれば幸いに存じます。

なお、調査にあたりご協力いただきました建設省浜田工事事務所、江津市をはじめとする地元の方々、関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

島根県教育委員会教育長

今岡義治

例　　言

- 1 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成4年度、5年に実施した一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 下記の遺跡を発掘調査した。

平成4年度

鹿伏山遺跡　島根県江津市都野津町2185

半田浜西遺跡　島根県江津市二宮町神主960他

平成5年度

久本奥窯跡　島根県江津市嘉久志町2125

二宮C遺跡　島根県江津市二宮町神主イ429

古八幡付近遺跡の一部　　〃　敬川町400-7

- 3 調査は次の組織で行った。

1992（平成4）年度

〔事務局〕　日次理雄（文化課長）、山根成二（課長補佐）、勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係）有田實（島根県教育文化財団嘱託）

〔調査員〕　西尾克己（埋蔵文化財調査センター調査第3係長）、広江耕史（同主事）、太田浩司（同教諭兼主事）

1993（平成5）年度

〔事務局〕　広沢卓嗣（文化課長）、山根成二（課長補佐）、勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係）有田實（島根県教育文化財団嘱託）

〔調査員〕　西尾克己（埋蔵文化財調査センター調査第3係長）、広江耕史（同主事）、太田浩司（同教諭兼主事）

〔遺物整理〕　今井静子、河野八重子、石川真由美、内海紀子、金津まり子、陶山佳代、金森千恵子

- 4 調査協力　宮本徳昭（江津市教育委員会）、久保谷浩二（金城町教育委員会）、石井完厚（山口

大学学生)、増野晋次、久米基、家塙英詞(島根大学学生)、林健亮(埋蔵文化財調査センター主事)

- 5 発掘調査にあたっては次の方々に従事して頂いた。

中西美子 山下幸子 佐々尾ヨリ子 大平正弘 横峰芳香 山藤積

吉村為春 中田義美 柏村保雄 加戸利夫 和田幸進 岩本一男

小駅龍男 植田歳雄 中村忠男 永見義隆 山藤力 島田みや子

美又フサ子 浜松鉄徳

- 6 発掘調査及び遺物整理にあたり次の方々に御指導、御協力を賜った。

田中義昭(島根大学法文学部教授)、村上勇(広島県立美術館主任学芸員)、矢部良明(東京国立博物館陶磁室長)、伊藤晴明(島根職業能力開発短期大学校長)、時枝克安(島根大学理学部教授)、三辻利一(奈良教育大学教授)、銚柄俊夫、中村淳穏(大阪文化財センター技師)、服部郁:山下峰司(瀬戸市埋蔵文化財センター主事)、玉田芳英(奈良国立文化財研究所文部技官)、穴沢義功(たたら研究会委員)

- 7 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

SD—溝、SI—竪穴住居跡、SB—掘立柱建物跡、SK—土壤、P—ピット

- 8 本書で使用した方位は真北を示す。

- 9 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は建設省浜田T.T.事務所作成のものを淨写して使用した。

- 10 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。

- 11 本書の執筆は広江、太田、林健亮(久本奥窯跡・瓦)が行い、編集は西尾、広江が行った。

目 次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯	3
III 調査の経過	3
IV 調査の概要	
1. カワラケ免遺跡	4
2. 半田浜西遺跡	6
3. 二宮C遺跡	33
4. 久本奥窯跡	44
V 理化学的分析	
1. 久本奥窯跡の地磁気年代 (伊東晴明、時枝克安)	97
2. 久本奥窯跡出土須恵器の蛍光X線分析 (三辻利一)	103



I 位 置 と 環 境

鹿伏山遺跡は江津市都野津町地内にあり、和木川流域の海岸線より南へ1.3km上った標高80mの丘陵上に所在する。このあたりは中国山地から派生する山並みと海岸部の堆積平野とのほぼ接点にあたっている。

半田浜西遺跡は、江津市二宮町神主に所在する遺跡で、海岸線より南へ1kmの標高20mの丘陵斜面上にあり、水尻川により形成された沖積平野の北東縁辺部に位置している。丘陵部から海岸線にかけて砂が堆積しており、この遺跡では約5mの厚さがあり、砂の下から遺構面を検出した。

久本奥窓跡は江津市嘉久志町地内にあり、海岸線から南へ1kmの標高60mの丘陵斜面上に位置している。南に中国山地に連なる山並みが続き、北には日本海を望む。

二宮C遺跡は江津市二宮町神主にあり、海岸線より南へ1kmの標高13～17mの丘陵縁辺部に位置している。この丘陵上には神主城跡があり、水尻川の形成した沖積平野の南西縁辺の東に宮倉遺跡、北東に半田浜西遺跡を望む場所である。

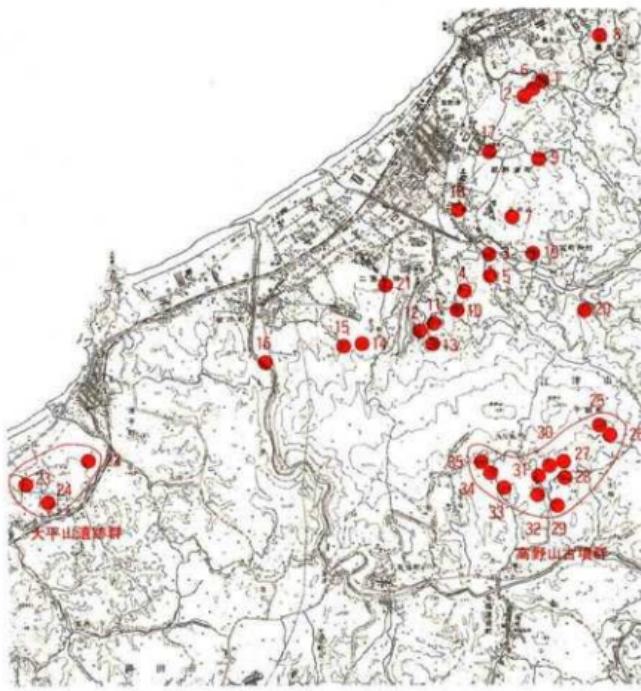
江津市では、今のところ先土器時代の遺跡、遺物は見つかっていない。次の縄文時代になると中期から晩期にかけての波子町大平山遺跡群など数箇所の遺跡が発見されている。特に波子遺跡は山陰地方における有数の縄文時代遺跡であり、縄文中期の地域的な土器形式として「波子式」が設定されている。

弥生時代の遺跡は都野津町の稻荷山遺跡、同町の半田浜遺跡、後地町の波米浜遺跡などがあげられる。稻荷山遺跡、半田浜遺跡では弥生時代中期の土器片が発見されている。また、二宮町神主には兩ヶ峰1号墓があり、弥生時代の墳墓として特徴的な四隅突出型方形墓の類型に属する可能性があるものと考えられている。

古墳時代では、集落として敬川町古八幡付近遺跡、都野津町半田浜遺跡、二宮町宮倉遺跡がある。古墳では7世紀の古墳時代終末期に作られた都野津町二又平古墳、千田町ツヅラヤブ古墳がある。これらの古墳は横穴式石室を備えている。和木川流域では、須恵器の生産が始まられ、前述の久本奥窓跡や櫛橋押込窓跡がある。

律令時代には、二宮町に石見二宮（多鳩神社）があることなどから山陰道が通っていたという説がある。宮倉遺跡では石見国分寺と同系統の軒平瓦が出土し、半田浜西遺跡において奈良三彩など多くの遺物が出土している。

中世では、江津を中心に勢力をもち、中世海運で栄えた都野氏と深く関わっていたとされる二宮町神主城跡があり、その南側対面の丘陵尾根上に高神遺跡がある。



第1図 調査対象遺跡と周辺の主要な遺跡

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 久本奥窓跡 | 2. 鹿伏山遺跡 | 3. 半田浜西遺跡 | 4. 二宮C遺跡 |
| 5. 宮原遺跡 | 6. カワラケ遺跡 | 7. 半田浜遺跡 | 8. 嘉久志遺跡 |
| 9. 棚橋押込窓跡 | 10. 神主城跡 | 11. 恵良遺跡 | 12. 飯田C遺跡 |
| 13. 高神遺跡 | 14. 船田A遺跡 | 15. 室崎商店遺跡 | 16. 古八幡付近遺跡 |
| 17. 二又平古墳 | 18. 稲荷山遺跡 | 19. 雨が唄古墳 | 20. 神村城跡 |
| 21. 青山遺跡 | 22. 波子遺跡 | 23. 大平浜遺跡 | 24. 越岬遺跡 |
| 25. 八幡社古墳群 | 26. ツヅラヤブ古墳 | 27. 寺床古墳群 | 28. 岩田氏宅裏古墳群 |
| 29. 白石古墳 | 30. 金クソ古墳 | 31. 峰田野地古墳群 | 32. ダイ古墳群 |
| 33. 大溢古墳 | 34. 恵後古墳群 | 35. 岩本古墳群 | |

II 調査に至る経緯

一般国道9号江津道路は建設省により自動車専用道路として4車線道路の建設が計画された。起点は江津市渡津町、終点は浜田自動車道浜田インターチェンジである。この計画は江津市内の交通渋滞の緩和及び、石見地域の高速交通網の整備を目的とする。

江津道路建設の計画を受け、島根県教育委員会文化課（以下「文化課」という）は平成元年に江津市嘉久志町から敬川町までの分布調査を行い、13箇所の遺跡を確認した。

平成3年1月に4者協議（建設省浜田工事事務所、県土木部、文化課、江津市教育委員会）を行い、発掘調査について具体的な検討がなされた。その結果、平成3年度は江津市教育委員会が建設省の委託を受け、発掘調査を行うこととなり、平成3年7月に半田浜西遺跡、平成4年1月にカワラケ免遺跡、鹿伏山遺跡のトレンチ調査を行った。これらの遺跡の調査の後、建設省、江津市教育委員会、文化課の3者協議を行い、平成4年度から文化課が本調査に入ることになった。

平成4年度は鹿伏山遺跡、半田浜西遺跡の本調査と二宮C遺跡、室崎商店裏遺跡のトレンチ調査を行った。平成5年度は久本奥窓跡、二宮C遺跡、カワラケ免遺跡の本調査と古八幡付近遺跡の一部の本調査を行い、二宮B遺跡、古八幡付近遺跡、飯田C遺跡のトレンチ調査を行った。

III 調査の経過

〔平成4年度〕

鹿伏山遺跡は、5月18日から前年度調査で土壤を検出した部分の周辺に調査区を設定した。同月29日に土壤状の落ち込みを検出し、6月4日に実測を行い終了した。

半田浜西遺跡は、5月27日から表土の砂を除去し調査に入った。7月2日に前年度調査で検出していた石積みの続きを検出し、実測を行う。7月27日に半田浜西遺跡の調査現場において田中・村上両先生より調査指導を受ける。9月10日にSB-01の写真を撮影し、実測を行う。10月6日から調査区東側において出土した甕の実測と写真を撮影し、取り上げる。甕を取上げその下の部分を振り下げたところ、古墳時代前期の遺物包含層を確認する。12月2日に調査区の全体写真を撮影するために清掃したところ、溝とそれに並行するように位置する柱穴を検出し、出土した土器より弥生時代後期末の住居跡であることが判明した。同月3日に住居跡の実測を行い、半田浜西遺跡の調査を全て終了する。

二宮C遺跡は、7月15日に雑木伐採の立会を行い、同月27日よりトレンチ調査を行う。総数22本

のトレンチを掘上げ、第17トレンチより土師器が出土した。11月13日にトレンチの埋め戻しを行い調査を終了する。

京崎商店裏遺跡は、11月16日からトレンチを設定し調査を開始する。遺跡の北側に瓦工場があり、表面に石見瓦が散布していた。総数10本のトレンチを掘り下げるが、遺構、遺物は検出していない。

[平成5年度]

久本奥窯跡は、4月27日に調査区を設定し、本調査を開始する。5月7日には、窯本体の上部が重機により削平をうけており、奥側の天井部が破壊されているのを確認した。その後、窯の周囲を掘り下げたところ、窯の南側にテラスを検出し作業場と思われる建物の柱穴を検出した。同月20日に灰原から焚口にかけての部分を検出し、多量の瓦が出土し実測しながら掘り進む。6月23日、雨天の中、島大・田中先生の調査指導を受ける。焼成室に天井部が残ったところがあり、その部分を残し奥側から床面を検出する。9月9日、ラジコンヘリにより空撮を行う。10月12日に伊藤、時枝両先生により熱残留磁気のサンプリングを行ってもらう。一次床面を精査したところ溝状の落ち込みを検出する。11月16日全体の地形測量を行い調査を終了する。

古八幡付近遺跡は丘陵西側斜面と水田部にトレンチを8本設定し、7月28日より調査を開始する。その内、水田部のトレンチ1、2より遺構を検出し、同じく水田部のトレンチ3、4から須恵器片、土師器片が出土した。8月31日より丘陵斜面下の水田部の本調査を開始し、柱穴と遺物（弥生土器片、須恵器、土師器、陶磁器）を検出した。

二宮B遺跡は7月5日よりトレンチ調査を開始する。水尻川が形成した沖積平野の水田部に6本のトレンチを設定した。表土下60~80cmに灰色粘質土が堆積し、その下は砂礫層が続いている。遺構、遺物は検出せず、埋め戻しをした後、7月23日に調査を終了した。

飯田C遺跡は、11月24日より、丘陵東側斜面及び平坦部にトレンチを16本設定して調査を開始する。その内7本のトレンチから、遺構、遺物（須恵器、土師器）を検出した。

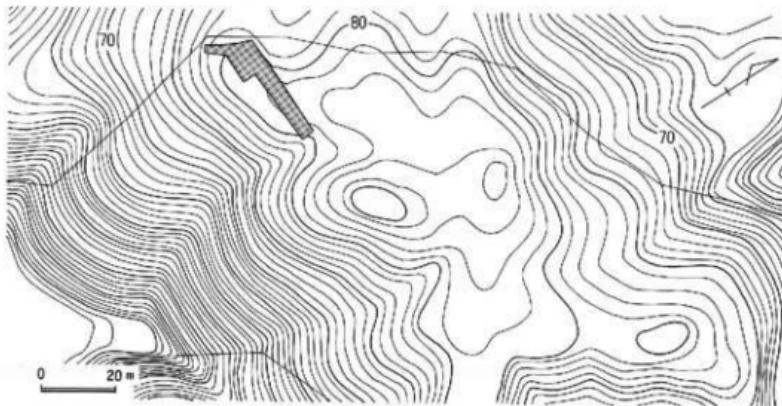
IV 調 査 の 概 要

1. 鹿伏山遺跡

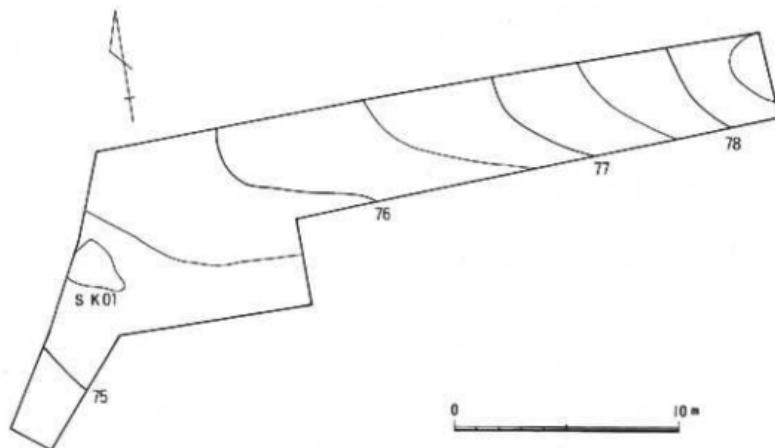
今回の調査では、平成3年度の江津市教育委員会の試掘調査の結果から土壌を検出した部分について8×30mの調査区を設定した。調査区は標高80mの丘陵となっている。調査の結果、地山の上に黄褐色土が厚さ20cmで堆積していた。この上の中には若干の炭化物を含むが、土器等の遺物は出土しなかった。地山は東から西に向けて緩やかに傾斜している。

土壤(SK-01)は調査区の西端にあり、前年度検出した地点の西側を拡張したところ、その続きを

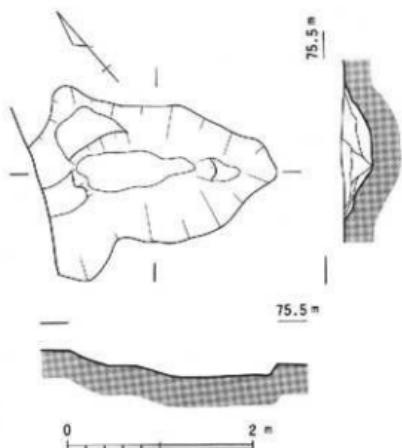
検出した。長軸2.6m、短軸5.2m、深さ0.4mを測る。壁面の傾斜は比較的緩やかで一部二段になっている。覆土は下から黄赤褐色土、暗褐色土、黄褐色土、赤褐色土の順に堆積している。覆土中には、焼土、炭化物を多く含んでおり、火の使用が認められ、土壤の東側の床面より縄文土器の破片1点が出土している。土壤は一基のみの検出であり、性格は不明である。



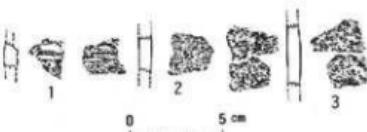
第2図 鹿伏山遺跡調査区位置図



第3図 鹿伏山遺跡調査区全体図



第4図 鹿伏山遺跡SK-01実測図



第5図 鹿伏山遺跡SK-01周辺出土遺物

2. 半田浜西遺跡

遺跡は、江津市二宮町神主の標高20mの南向きの丘陵上に位置している。この場所は、日本海の海岸線から1km南に入ったところであり、水尻川により形成された沖積平野の東端に位置している。遺跡の南側丘陵上には、神主城跡が位置している。

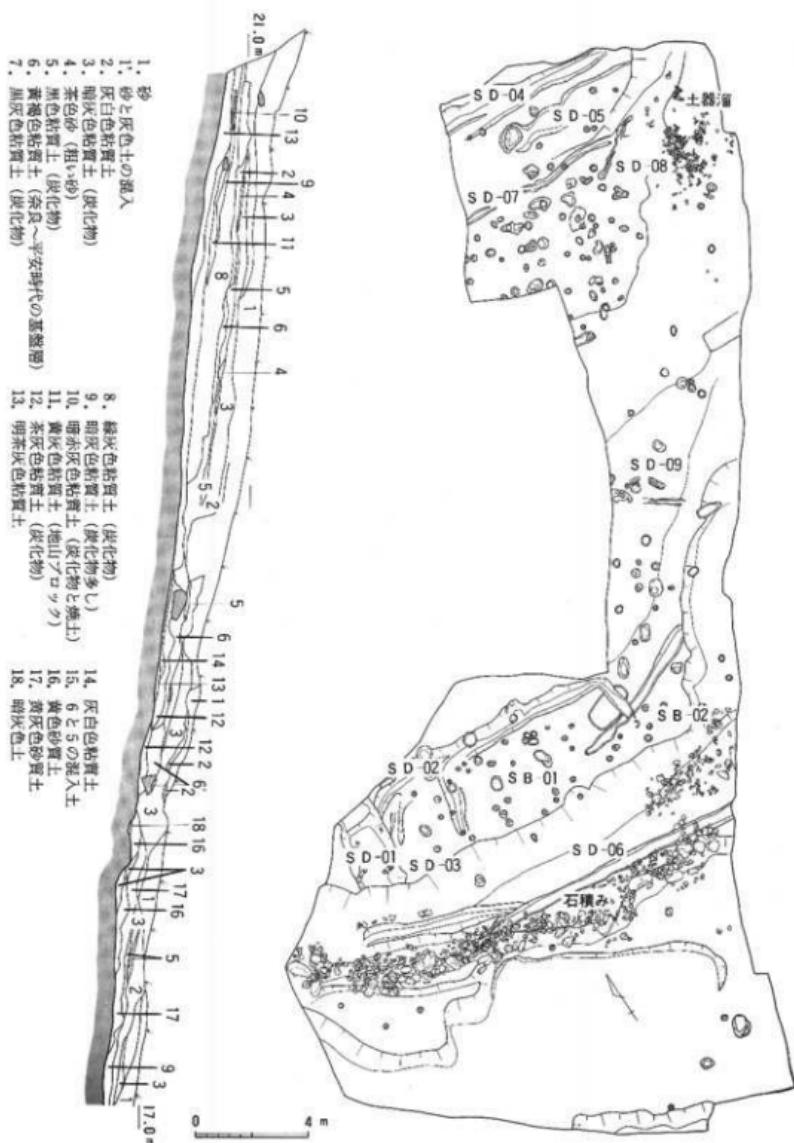
調査は、平成3年度の江津市教育委員会の調査結果により調査区を設定した。検出した遺構は、掘建柱建物跡2、溝10、土壙1、ピット多数、石積みである。

SD-01 (第8図)

調査区の中央西側において検出している。現存する長さ1.7m、0.87m、深さ0.2mを測り、南北方



第6図 半田浜西遺跡調査区位置図



第7図 半田浜西遺跡遺構全体図

に向う。北側が一段高く、高低差0.12mを測り南端へ向け緩やかに傾斜している。覆土は、黒褐色土で炭化物を多く含んでいる。溝内からは、須恵器、土製分銅が出土している。須恵器、高環(第10図-8)は、ほぼ完形品で溝底よりやや浮いた状態で壺部を上にして出土している。

(1～3)は、須恵器、壺・蓋で、1は頂部に扁平なつまみが付く、2、3は輪状つまみが付く。4～7は、壺でいずれも高台が付くもので、4、5は大形のものである。8は、高環で器高に対し壺部の口径が大きなもので25.8cmを測る。壺部の内底は、同心円叩きの後になで消している。11は、分銅型土製品の頂部が欠けたもので、紐を通し吊すための孔が見られる。重量は、48.6gでこの遺跡から出土したものでは中型である。

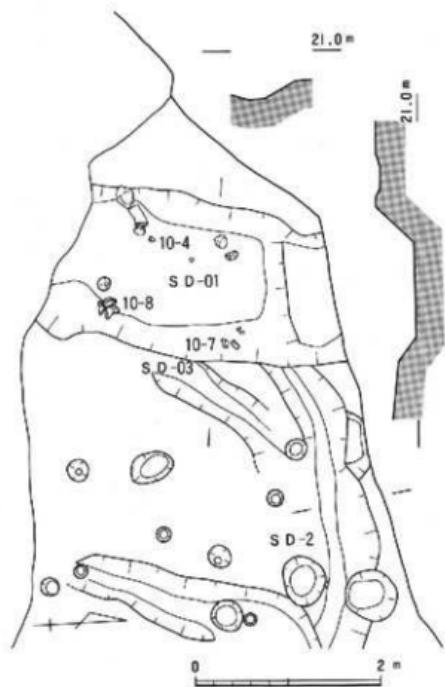
SD-02、03 (第8図)

SD-01の南側に一部を切り合って位置している。SD-02は東側をSB-01とも切り合っており、SB-01の溝を延長するように丘陵側を掘り込んでいる。溝の幅0.5m、深さ0.2mを測る。SD-03は、残

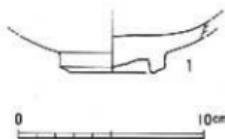
存長1.7m、幅0.4m、深さ7cmを測る。溝の覆土中から青磁・碗の底部の破片が出土している。碗は、底径5.6cmを測り、見込みに印文花があるが、釉のため形は不明である。

SD-04 (第11図)

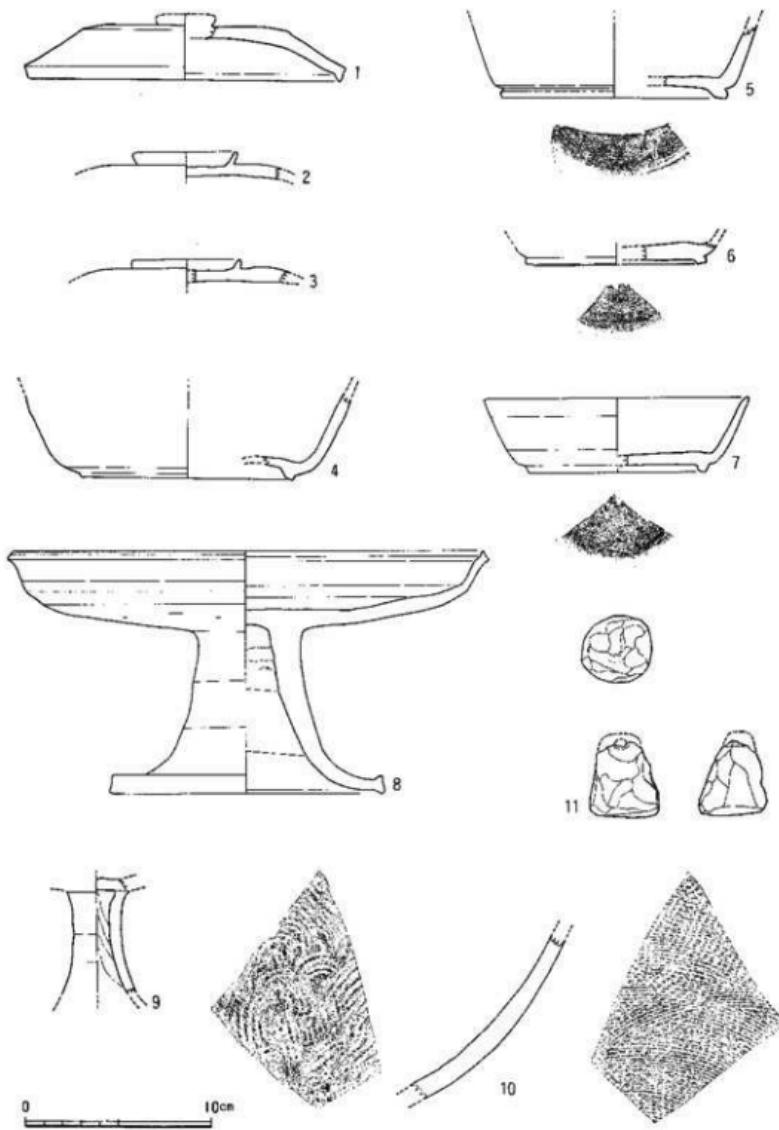
調査区の北側に位置する。溝の幅0.56～1.45m、深さ64cm、西側が東側より6cm高くなっている。溝内からは、第12図2、3が、溝の肩部から1、溝の周囲を覆う黑色土中から4～8が出土している。1、2は、須恵器の壺でいずれも焼成が悪く軟質の製品である。高台は外傾



第8図 SD-01.02.03実測図



第9図 SD-03出土遺物実測図



第10図 SD-01出土遺物実測図

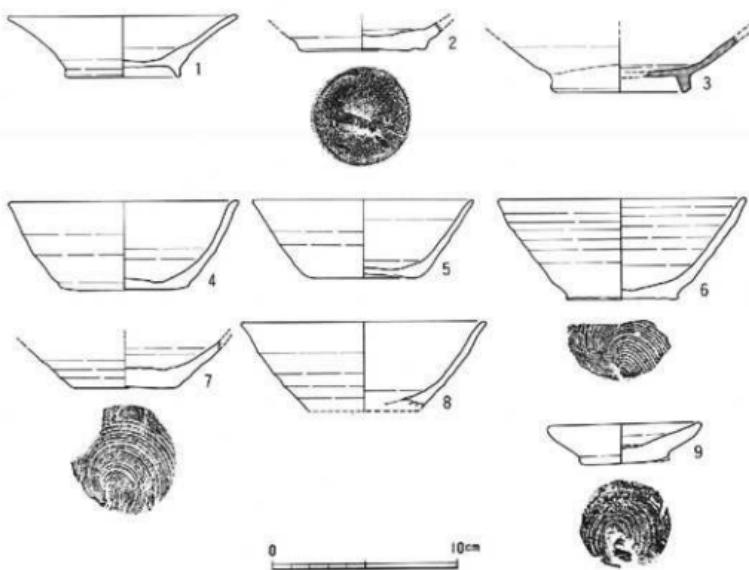


第11図 SD-04.05.07.08実測図

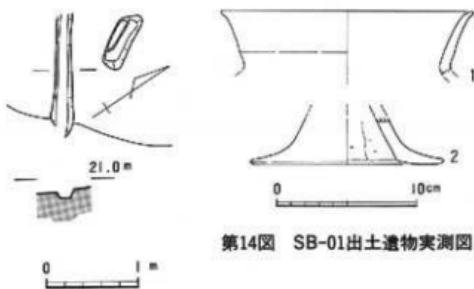
SD-07 (第11図)

SD-05の南側に並行して位置し、東西方向に走るものである。残存長5.45m、幅0.28m、深さ10cmを測る。西側のほうが東側に比べ14cm高くなっている。

SD-08 (第11図)



第12図 SD-04と周辺出土遺物実測図



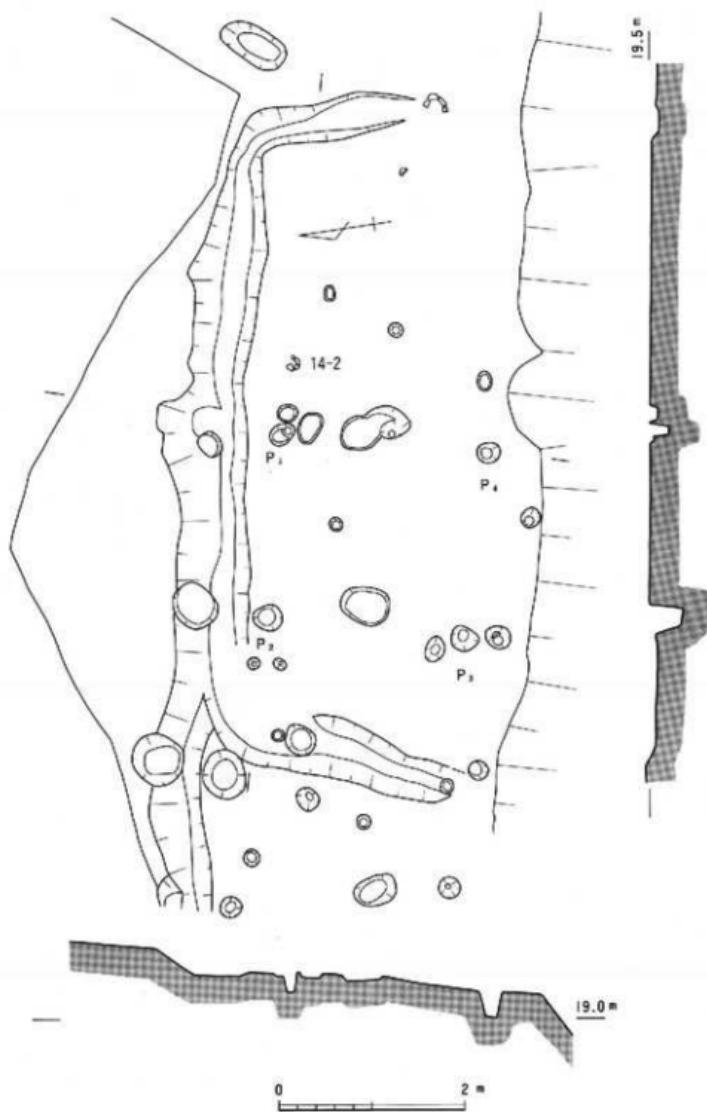
第14図 SB-01出土遺物実測図

第13図 SD-09実測図

SD-07の東端に接するように位置している。長さ2.5m、幅0.1~0.28mを測る。溝内からは、土師器の高杯が出土しており、時期は古墳時代・前期である。

SD-09 (第13図)

調査区の中央部に位置しており、長さ1.3m、幅0.16~0.26mを測る。溝内からは遺物は出土してい

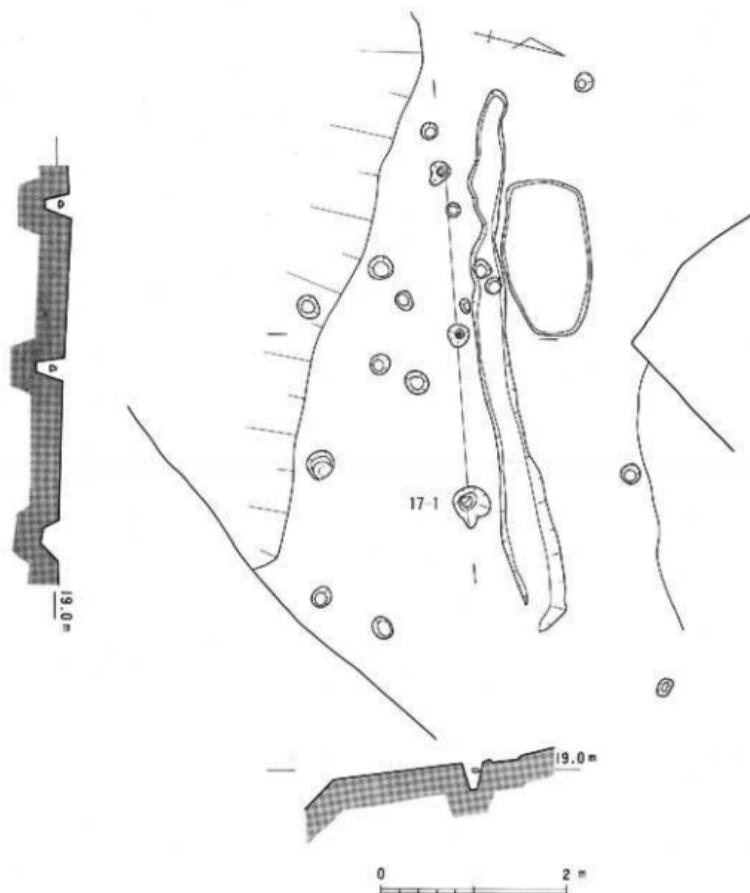


第15図 SB-01実測図

ない。

SB-01 (第15図)

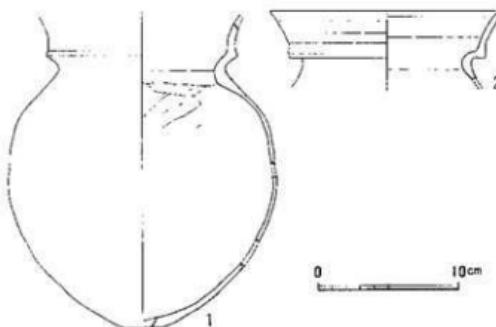
調査区の中央部から西侧にかけて位置している。溝が「コ」の字状に巡り東西7.2m、南北4mを測る。建物は、1間×1間で、柱間距離は2.1mを測る。主柱穴は4個で、いずれも径が30cm、深さ30~38cmを測る。床面上から土師器・甕(14-1)、高坏(2)が出土している。甕は、口縁部



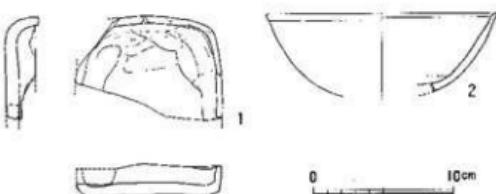
第16図 SB-02実測図

が外傾し立上り、端部が外反する。2は、筒部から脚端部へ向け緩やかに広がるものである。これらの土器は、古墳時代中期と思われる。

SB-02 (第16図)



第17図 SB-02, SD-10出土物実測図



第18図 遺構外出土物実測図

調査区の中央部でSB-01の東側と一部分重複しているが、SB-02が埋まつた後にSB-01が堀り込まれている。柱穴は、長さ5.8mの溝に沿っており、柱間距離は1.8mである。いずれの柱穴にも石が入れられており、P-3では甕(17-1)の中に石を入れていた。2は、溝の中から出土している。柱穴は、地山面において検出しており、貼り床は確認できなかった。

甕1は、口縁部がやや外反気味に立上がり先端を欠いており、稜の突出はわずかである。底部は平底状を呈している。調整は風化が激しく不明な部分が多いが、体部外面に刷毛目、内面にヘラケツリを行う。2は、口縁部の破片で外反しており、稜は斜め下方へ突出している。

上面出土遺物 (第18図)

調査区の東側において出土している。1は、風字瓶で墨堂の部分が使用によりかなり磨滅している。2は、壺で体部に丸味を持ち、口縁部をかすかに外方に屈曲させる。

石積み (第19図)

SB-01の南側が90cm程低くなつておき、緩い傾斜の斜面から大小の河原石が多量に検出された。北東部のやや小さな石の部分を除いて、いずれも地山からやや浮いた状態であり、本来はSB-01の南側斜面に積まれていたものと思われ、斜面に沿つた場所に位置している。石を積むことで、斜面を保護していたものと思われる。石の大きさは、拳大のものから1mを越えるものまである。石の間と地山上から遺物が出土している。遺物の時期は、弥生時代、奈良時代～室町時代であるが、石の



第19図 石積み実測図

下からは室町時代の遺物が出土することから石積みの時期も室町時代と思われる。

SD-06

石積みに沿うように位置している。長さ9.3m、幅0.3~0.55mを測る。この溝の中からは石は出土せず、溝が埋まった後に石が積まれたものと思われる。溝の中からは土製支脚(24-3)が出土している。

SD-11

石積みの北側に位置し、東端をSD-06と切り合っている。長さ5.5m、幅0.4~0.7mを測る。溝内からは遺物を検出していない。

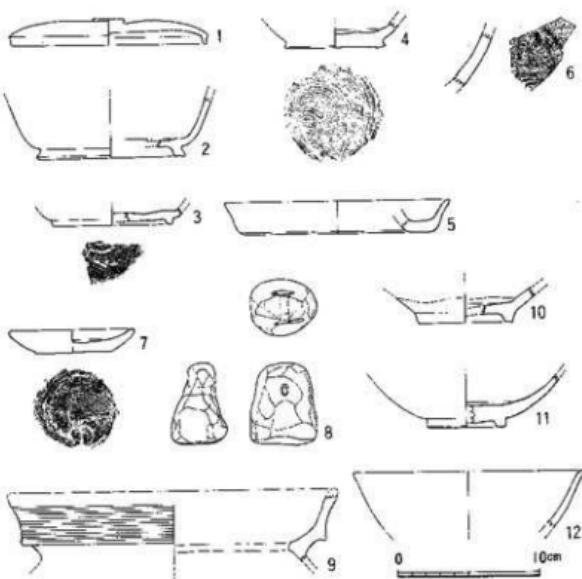
石積み出土遺物(第20図)

1~6は、須恵器である。1は、壺・蓋で天井部が低く、つまみの形が擬宝珠様のものである。口径14.8cm、器高1.9cmを測る。2は、高台の付く壺である。高台は外底の端に付くもので、先端に幅を持つ。3も高台の付く壺であり、高台はやや細いものである。4の壺は、底部外面に回転糸切りを施している。5は、円面鏡で墨堂の部分を欠く、口径16.0cmを測る。6は、壺の体部下半の破

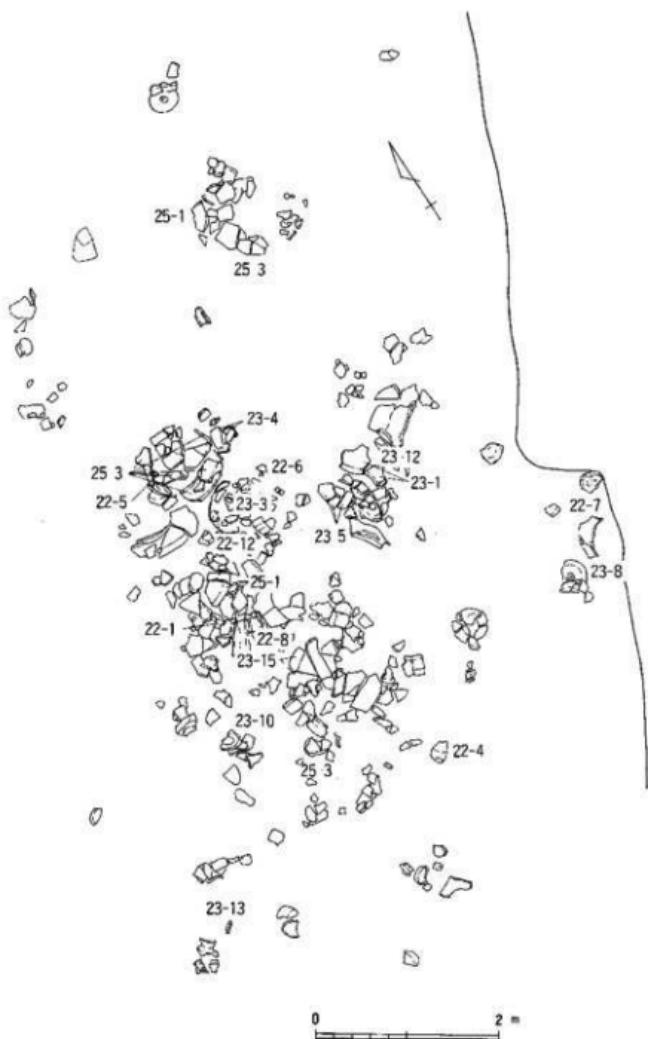
片で外面にヘラ描の沈線により文様を表現している。慣円形のなかに格子文を入れている。

7は、土師器の小皿で底部外面に回転糸切り痕が残る。口径9.0cm、器高1.7cmを測る。8は

分銅形土製品で、手捏ね成形により作られ、上部に紐を吊るすための孔が開けられている。片側の側面が多少欠損する。形態は台形状を呈し、底部は平坦になっている。幅4.7cm、高さ5.8cm、厚さ4.0cm、重量90gを測る。9は



第20図 石積み出土遺物



第21図 東測土器溜り実測図

弥生土器の壺で、口縁外面に貝殻腹縁によるクシ状工具で12条の平行線を施している。10は中国製白磁、碗である。見込みに輪条に釉の搔き取りがみられる。この碗は、太宰府分類⁽⁸⁾VIII類である。11は越州窯青磁の碗で、薄茶色がかった緑色である。12は龍泉窯青磁の碗である。

東側土器溜り（第21図）

調査区の東側において上層遺構面の下の包含層中より、土師器・甕、壺、高坏、竈、土製支脚、須恵器・坏、高坏、壺が出土している。土器の分布は、竈3固体を中心として、その周辺から土師器の甕、壺、須恵器の坏、壺、竈が出土しており、この場所で竈を使用したと思われる。

東側土器溜り出土遺物（第22、23、24、25図）

須恵器の1～6は坏・甕である。1は口縁部が直立気味に立ち上り、天井部と口縁部の境は不明瞭である。天井部外面にわずかに回転ヘラ削りがみられる。2は天井部に丸味を有し、外面に回転ヘラ削りを行っている。3も天井部に丸味を有し口縁部が開き気味に立ち上がる、外面に回転ヘラ削りを行っている。4は天井部が平坦で口縁部がやや開き気味に立ち上がる、天井部の内面は同心円叩きの後にナデている。5は天井部に丸みを有し口縁部との境は不明瞭である。天井部の外面はヘラ切りにより切り離す。6は天井部と口縁部の境に丸みを有し、天井部の外面はヘラ切りを行っている。7～9は坏・身である。7は、立上りが内傾して伸び、底部外面にヘラ削りを施している。8は立上りが低く、受け部は短く横方向に伸びる。9は口径がやや大きく、立上りは短く伸びる。受け部は短く横方向に伸びる。底部は平坦で、ヘラ削りを施す。10は短頸壺で、口縁部が外傾し立ち上がる。全体的に器壁が薄く、胴下半部外面にヘラ削りを施す。11は竈の胴部の破片で、焼成が悪く胎土は白色である。肩部に一条の沈線があり、下半部にヘラ削りを施す。12は高坏で坏部に丸みを有し、内外面にヨコナデを施す。13は坏部下半から脚部にかけての破片である。坏部の中程に段を有し、脚部は裾が大きく開く。14は高坏の脚部の破片である。

土師器（第23図）の1～3は甕である。1は口縁部が外反し、内外面にヨコナデを施す。外面の頸部以下に縦方向の細かいハケメを施す。3は口縁部に高さがあり、外反し立ち上がる。胴部の外面に縦方向のハケメを施す。2は口縁部が外傾し立ち上がる。胴部の外面には縦方向の粗いハケメが入る。4、5は底部の丸い鉢である。口径17.8cm、器高8.2cmを測る。5は口径24cmとやや大形で底部も多少平底気味である。4、5とも内外面にナデを行っている。6は高坏の脚部の欠けたものと思われる。坏部はやや外反して立上り、外面に粗いハケメを施す。7は高坏の脚部で高さの低いものである。筒部に粘土が詰まり途中で屈曲し脚端部に至る。外面にハケメを施す。9も大形の脚部の破片で筒部が中空に成らず粘土が詰まっている。8は坏部の途中で屈曲し口縁部が外反する。12も坏部の破片で、内外面にヘラ磨きを丁寧に行っている。10は全形の判る高坏で、坏部が内湾気味に立ち上がり、内外面に横方向のヘラ磨きを行う。脚部の上半は粘土が詰まっており、裾部の器

壁も厚い。脚部の外面に縱方向のヘラ磨きを行う。11も10の形態と同様のものであり坏部は外方に開きながら立ち上がる。脚部の上半に粘土が詰まっている。坏部の器壁は厚く、内外面にヘラ磨きを行う。13は低脚の高坏である。坏部に丸みを有し内外面に横ナデを行う。内底には指頭压痕が残る。脚部は低く、器壁は厚い。外面に縱方向のヘラ磨きを施す。14は瓶の上半部で把手を欠いている。口縁部の内外面横ナデ、体部外面にハケメ、内面にヘラ削りを行っている。15は瓶の底部の破片であり、内湾しながら端部に至る。器壁は、かなり厚めである。

土製支脚（第24図）

1は突出が二又となっており、脚部は斜めに立上り突出へとつながる、脚部と突起部の境は不明瞭である。脚部は端部が大きく開き、底部は上げ底状となっている。脚部の背の部分には鱗状に突起が付けられており、つまみとしての役目があると思われる。支脚の上部側は、ヘラ削りの後にナデしており、その他は指頭によりナデている。2は1と同様の形態をしているが、やや大きい。突起の片側と背中の鱗が欠けている。脚部の底は上げ底状となっている。4は片方の突起であり、かなり太いものである。背中の中央部に円形の孔が開けられており、脚部の中程まで達している。5は二本の突起共に欠いており、全体的に背の部分のみが残ったものである。背の部分に孔が開けられており、脚部の途中まで達している。孔の径2.3cm、深さ3.3cmを測る。突起の上部と側面はヘラ削りの後にナデしており、その他は指頭によりナデしている。脚部の底は、上げ底状となっている。

轆（第25図）

1はほぼ全形が判るものである。軒庇は焚口の上部にのみ付いている。高さは、前側32.0cm、奥側想定で35.0cm、復元した口径31.5cmを測る。3もほぼ1と同様の形態である。2は焚口の上の軒庇がやや広く付いている。

遺構出土物

奈良三彩（第26図）調査区の東側において包含層中より出土している。1、2ともに薬壺の破片である。胎土は土師質で、外面にうす緑色、白色、濃い緑色（一部褐色）の釉が、内面に透明釉がかかる。

石製有孔円盤（第26図3）

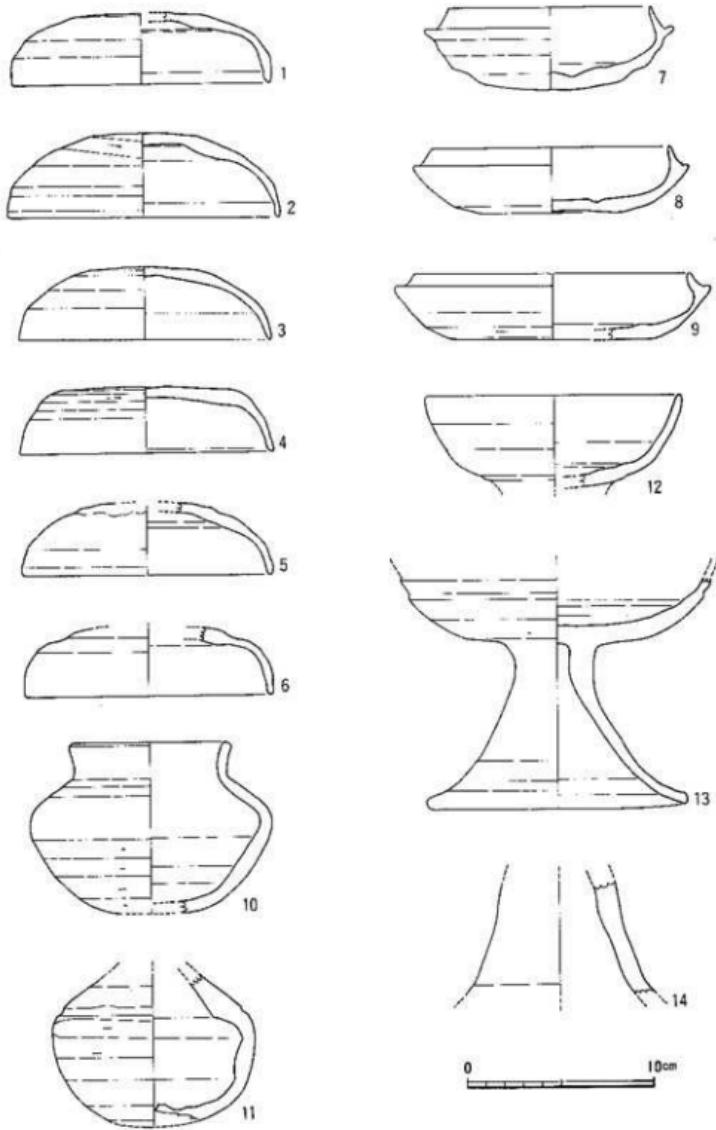
滑石製で、穿孔は両方から行われている。径3.1cm、重量9.74gである。

土製分銅（4～7）

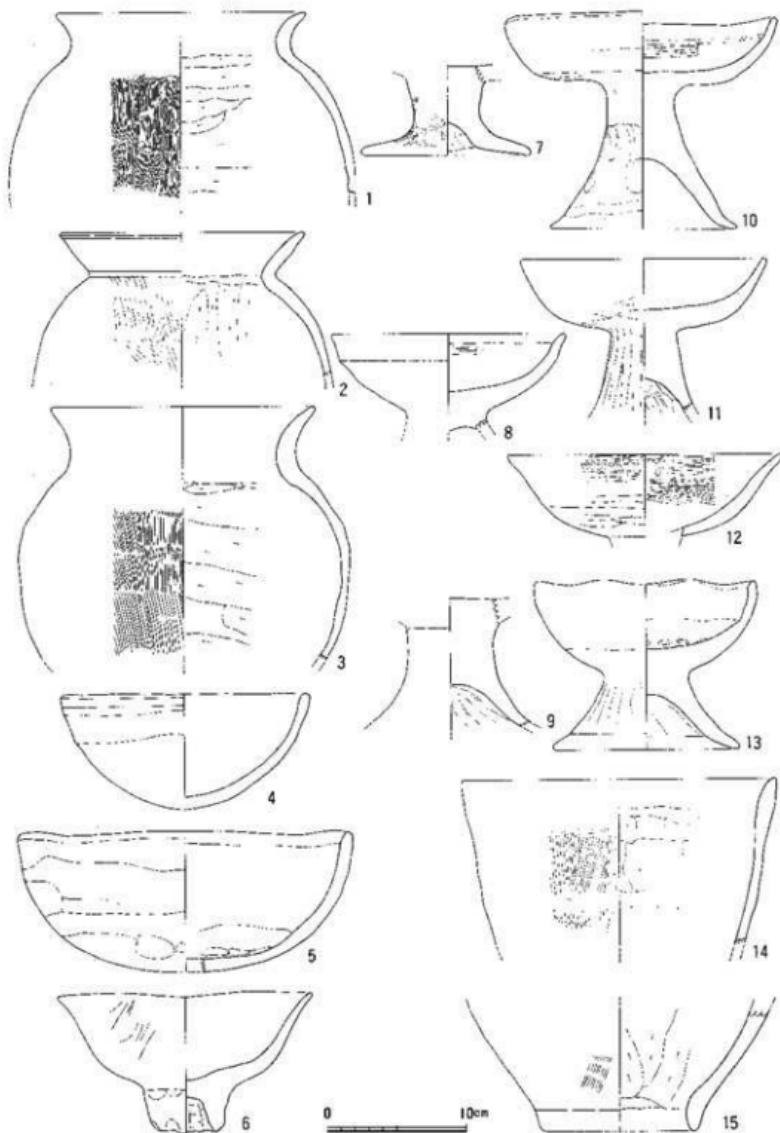
いずれも紐を吊るすための孔がみられる。重量は、7が46g、4が88g、5が100g、6が193gと3段階の重量があり、小型から約2倍、約3倍となっている。

石帶（8）

石帶の丸柄の一部と思われる。



第22図 土器窯出土遺物(1)

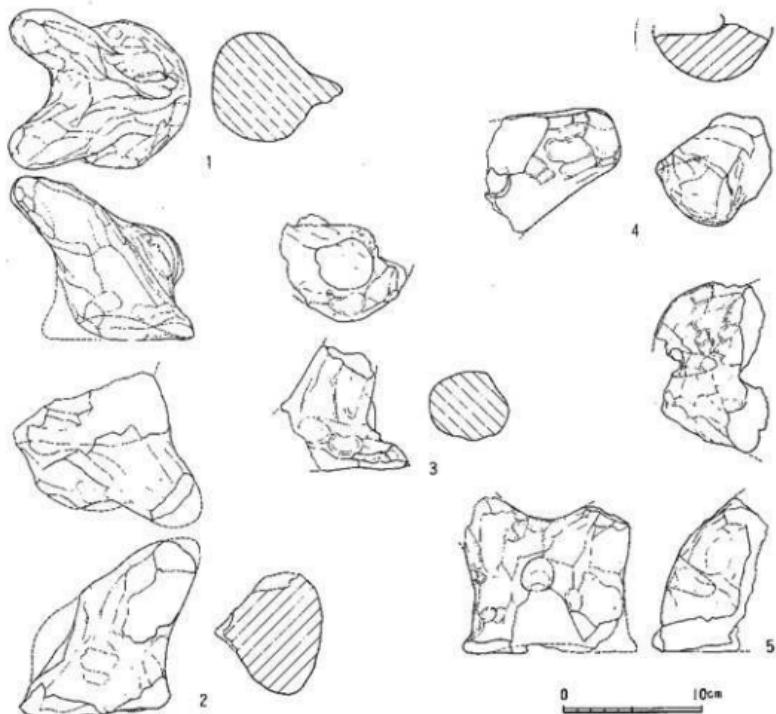


第23図 土器通り出土遺物(2)

弥生土器（第27図）1は甕で口縁部の外面に4条の凹線を入れ、頸部に刺突文を施している。2は複合口縁の甕で、口縁部が外反し、先端へ向け細くなる。3は注口の部分である。

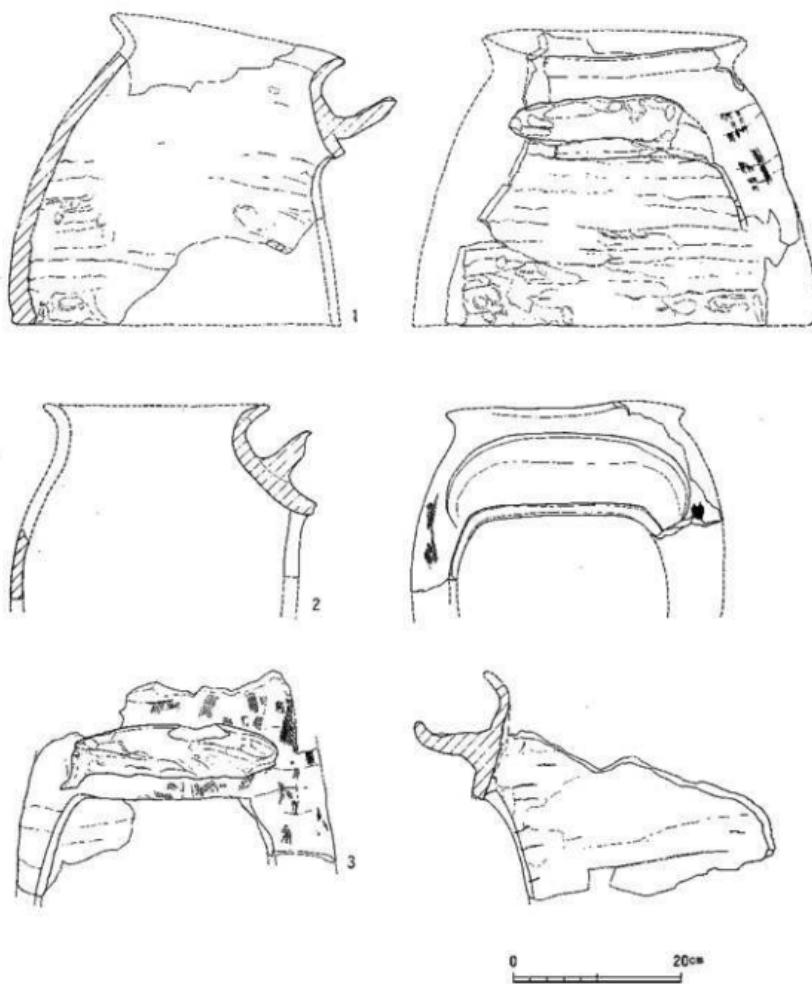
土師器

4は複合口縁の甕で上端に平坦面を持つ。5、6は小型丸底甕である。5は口縁部の高さが体部の高さより高くなっている。5は口縁部が短く体部の外面にハケメを施す。7は鼓形器台の下台部であり、筒部との境が外方に突出する。8～10は高坏である。8は外面にヘラミガキを施している。9は、坏の中程に稜が付き、そこから下にハケメを入れる。10は脚部の破片で、外面に縱方向のヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。11は甕で口縁部が「く」の字状になり、端部に丸味を持つ。頸部から肩部の外面にヘラ描の沈線により絵が描かれており、鹿を表現したものと思われる。12は



第24図 土器溜り出土遺物

口縁部の上端に平坦面を有し、沈線が入る。13、14は、土製支脚である。13は高さ12.2cmと小形のもので、二又突起の片側の破片である。外面に指頭圧痕が残る。14は高さ16.4cmと大形のものである。背面に径2.7cm、深さ4.3cmの孔が開けられる。底部はやや上底状となっている。



第25図 調査区東側土器類

須恵器 (第28図)

1～3、5～8は壺・蓋である。1は口縁が下方に尖って伸びており、つまみを欠いている。2は口縁部が直立気味に立上り、天井部が平坦である。3は口縁部の立上りが短く、天井部は平坦である。5は天井部に丸みが有り、口縁部との境が不明瞭で断面が三角形に終わる。6は口縁部が屈曲し、天井部が平坦である。つまみは扁平なものが付くと思われる。7は輪状つまみの付くもので、口縁部が屈曲し直立している。8は輪状のつまみが天井部の端に付くもので、天井部と口縁部の境に丸みを持っている。4は壺で口縁部が外反し、底部は平底である。9は高台が直立し立上り、体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラ切りにより切り離す。10は体部に丸みを持ち、端



第26図 遺構出土遺物実測図

部が平坦になっている。11は低脚の高杯の脚部である。12も高杯の脚部である。13は壺の底部で外面に平行タタキの後ナデている。14は平底の壺で外面に平行タタキノのちにヘラ削りを行っている。15、16は壺である。(第29図) 1、2は壺の口縁部である。1は外面に上下二段に二条の突線を巡らし、その間に波状紋を入れている。2の外面には、二条の波状紋がある。紋様の幅が広く整っていない。3は鉢の底部で、底部に断面方形の高台を持つ。4~6は壺の体部の破片である。4は内面の同心円タタキが粗いものである。6は器壁の厚いもので、内面は同心円タタキの後にナデ消している。

中世の遺物(第30図)

1、2は東播系須恵器の鉢の口縁部である。1は、口縁部が丸くなっている。2は口縁部の外間に稜を持ち、肥厚する。3は常滑の壺と思われ、口縁部が折り返すだけのものである。4は備前焼の壺鉢で口縁部が上下に肥厚する。内面に7条の櫛目状の沈線をいれる。5は口縁部が上方に長く伸びており、内面に7条の櫛目状の沈線が入る。6、8は土師器の小皿で底部に回転糸切り痕が残る。7は壺で体部に丸みを持ち、口縁部が外反する。9~11、13が白磁・碗で12は青磁・碗である。9は太宰府分類II類^(註2)、10、13がIV類、11がV類である。12は連弁の付く碗である。

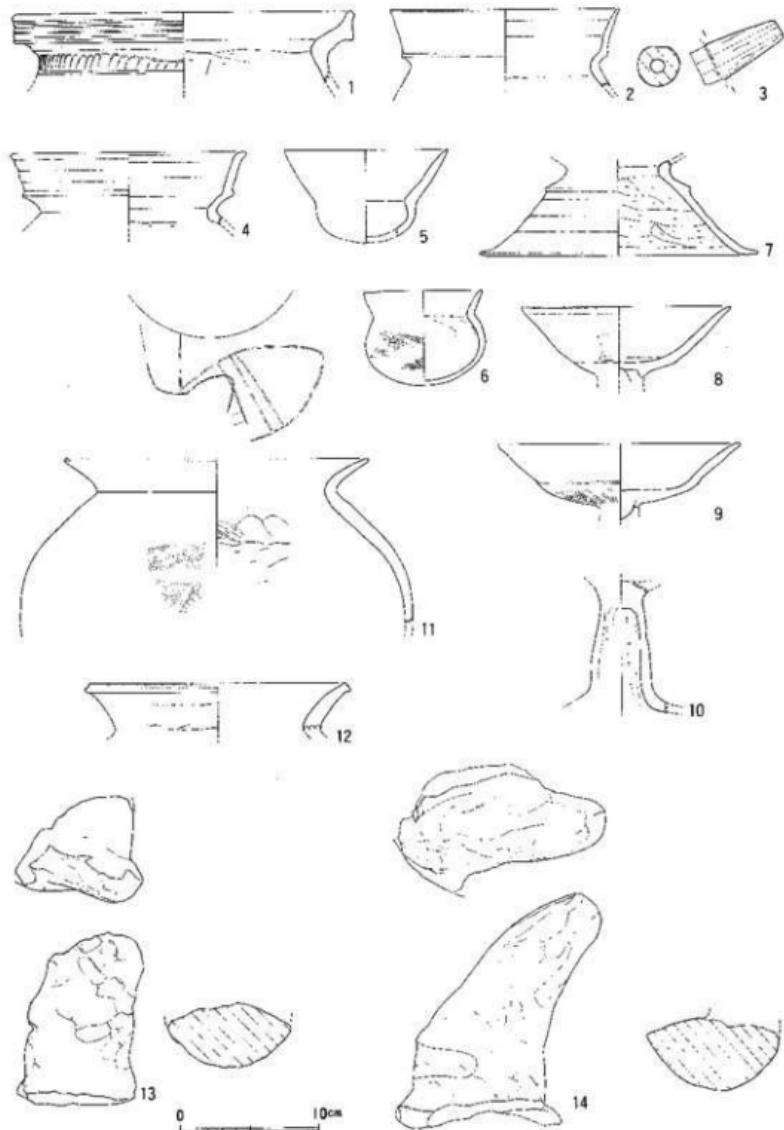
小 結

今回検出した遺構は、弥生時代から中世までのものである。

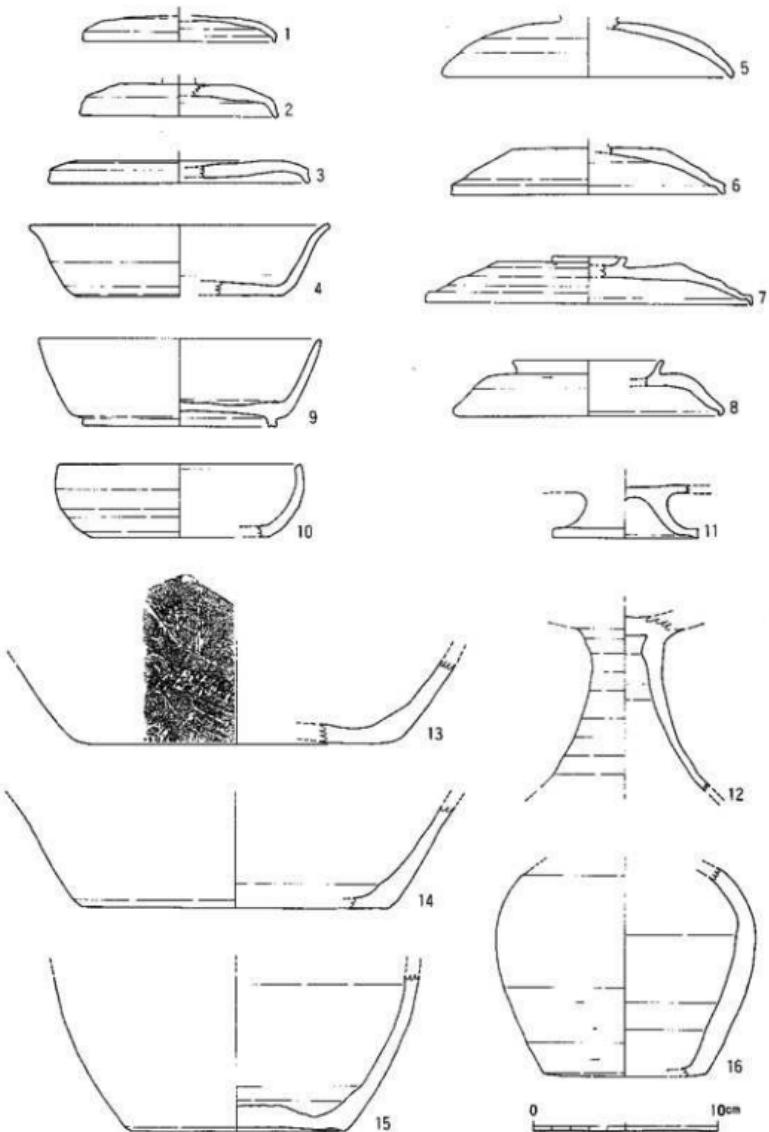
掘建柱建物跡跡	弥生時代後期	SB-02
	古墳時代中期	SB-01
溝	古墳時代前期	SD-08
	古墳時代後期	SD-06
	奈良時代	SD-01
	平安時代	SD-04
	中世	SD-05、07
土器埋り	古墳時代後期	カマド、土師器、高杯、土製支脚といった煮炊きのセット が出土

石積み 中世

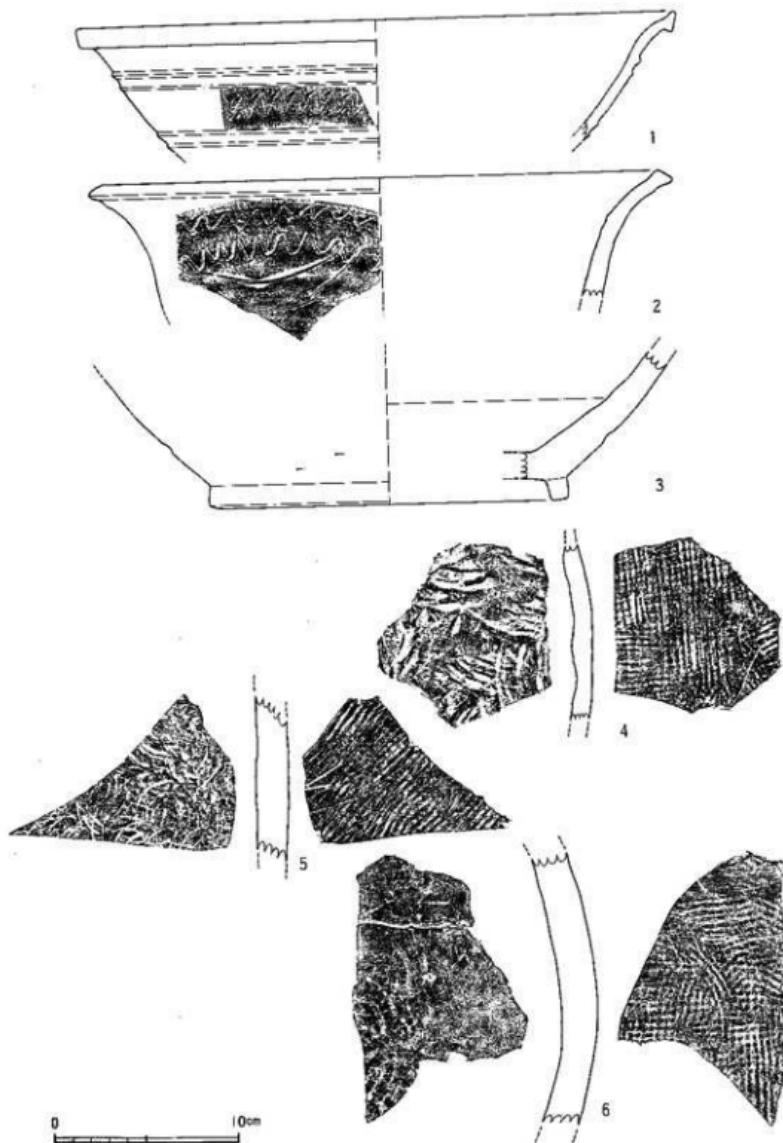
弥生時代の建物は、山側の溝と柱穴3穴を検出しておらず、建物としての規模は不明である。この建物の柱穴P-3内からは、弥生土器の壺の中に拳大の石が入れられ、残りの2穴からも石が出土している。P-3は、柱穴の検出面から土器を確認しており、この土器と石は建物を廃棄し柱を抜き取った後に入れられたものと考えられる。



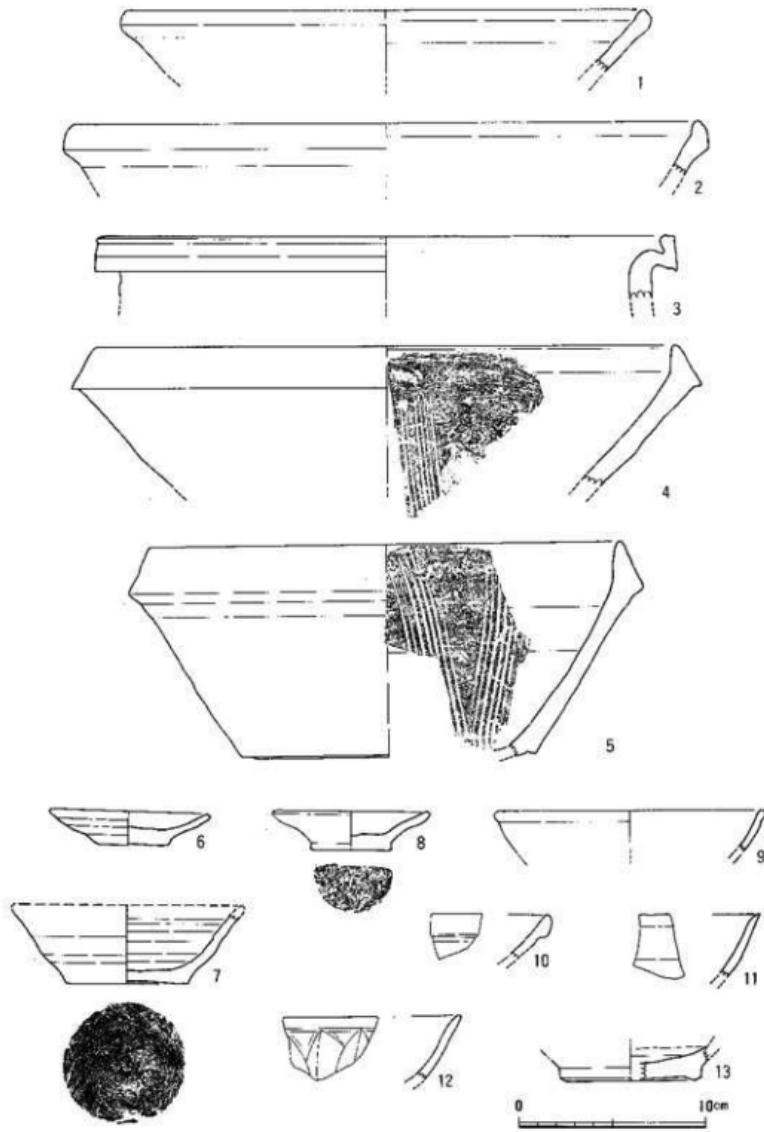
第27図 遺構外出土遺物実測図



第28図 造構出土遺物



第29図 遺構外出土遺物



第30図 遺構外出土遺物

古墳時代後期は、斜面の下段テラスにおいて、溝(SD-06)を検出しており、同時期の土器溜りが調査区東側において確認された。土器溜りからは、土師器、壺、甕、甌、土製支脚といった煮沸具のセットが出土し、甌は3個体であった。これらの土器は斜面を埋め立てた土の上から出土しており、調査区域内では建物等の遺構は検出していない。甌3個体とその他の土器も集中した場所から炭化物と共に出土しており、この付近で煮炊き等で火を使用した後に廃棄されたものと思われる。

奈良時代から平安時代にかけては、溝状遺構のみ検出しており、住居跡等は検出していない。遺物としては、奈良三彩、越州窯青磁等が出土することから、調査区域外には何らかの建物等の施設があったと思われる。

中世の遺構としては、石積みがある。本来斜面に張られていたものが崩れ落ちて、テラス状の平坦面に重なったものと考えられるものである。調査区の南端において、水尻川に続くと思われる落ち込みを検出していることから、川の流れに対しての護岸の役割があったものと思われる。

出土遺物

土器溜りから出土した遺物は、須恵器が山陰III期のもので共伴する土師器も同時期と考えられる。土師器は、壺、高坏、甕、鉢の器種があり、高坏は坏部の上部が中空とならず粘土が詰まっているという特徴を持っている。第23図4、5は、鉢形のもので、松江市才ノ岬遺跡からこの大型と思われるものが出土している。土製支脚は、突起は二本で、背の部分に錐状の突起が付くものと、背に円形の孔が開くものの二種類がみられる。甌は底が、焚口の上部にのみ付くものである。

奈良三彩は、県内で初めての出土例である。唐三彩は、松江市乃木福富町福富I遺跡から出土している。

土製分銅は、大、中、小の三種類の重量が有り、小さなもののが二倍、三倍となっている。時期は、奈良時代と考えられる。県内では、松江市才ノ岬遺跡より石製のものが、出雲国府^(出)からは銅製のものが出土している。

越州窯青磁は石積みのテラス状の平坦面から出土している底部の破片である。県内において越州窯青磁が出土しているのは、松江市石台遺跡^(出)、天満谷遺跡^(出)、国造館跡^(出)、浜田市古市遺跡^(出)であり、いずれも役所関連の遺跡である。

半田浜西遺跡は、弥生時代から中世にかけて継続的に集落が営まれている。14世紀以降に砂丘の形成により一時に集落が途絶えたものであり、砂丘上^(出)からは16世紀の陶磁器が出土している。奈良時代から平安時代にかけては、江津市において二宮地区が中心的な役割を果たしていたと思われ、この遺跡から半田浜遺跡にかけて遺物が多く出土している。また、中世には都野氏が都野津を中世水運の拠点としており、未調査ではあるが神主城、多鳩神社との関連も今後検討すべきと思われる。

砂丘の下に埋もれた遺跡もあることから実態は不明であるが、水尻川により形成された沖積平野

の周辺部、丘陵地との境に未発見の遺跡が点在しているものと思われる。

- 註 1、2 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4集 九州歴史資料館 1978年
- 3 山本 清「山陰の須恵器」「山陰古墳文化の研究」所収 1971年
- 4 島根県教育委員会「一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VIII」「布田遺跡」1991年
- 5 島根県教育委員会「石台遺跡」1986年
- 6 島根県教育委員会「北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」「天満谷遺跡」1986年
- 7 松江市教育委員会「出雲国造館発掘調査報告」1980年
- 8 津田市教育委員会 原 裕司・榎原博英氏のご教示による

3. 二宮C遺跡

遺跡は水尻川により形成された沖積平野の南側の丘陵縁辺に位置している。この丘陵の南側には神主城跡が位置している。

今回の調査は、平成3年度の調査結果から調査区を設定した。検出した遺構は、掘建柱建物跡2、竪穴住居跡1、溝1、ピット多数である。東側の谷側には遺物包含層が入り込み、深さ3.0mを測る。

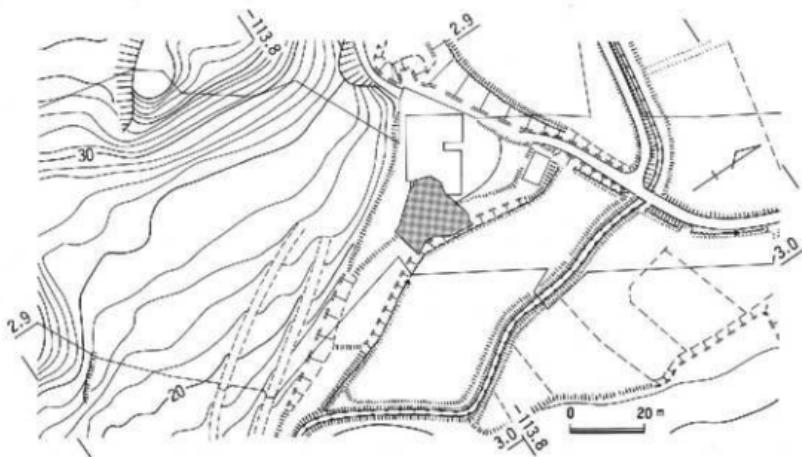
SI-01 (第34図)

調査区の中央部、東向きの斜面に上部側のみ残っていた。黄褐色の地山に掘り込まれた隅丸方形の住居跡である。覆土は、上から灰色土、暗灰色土が入っている。床面の谷側には地山上に黄色土の貼り床がなされていた。住居跡は、南北長4.6m、東西の残存長2.4m、東側の壁の高さ50cmを測る。

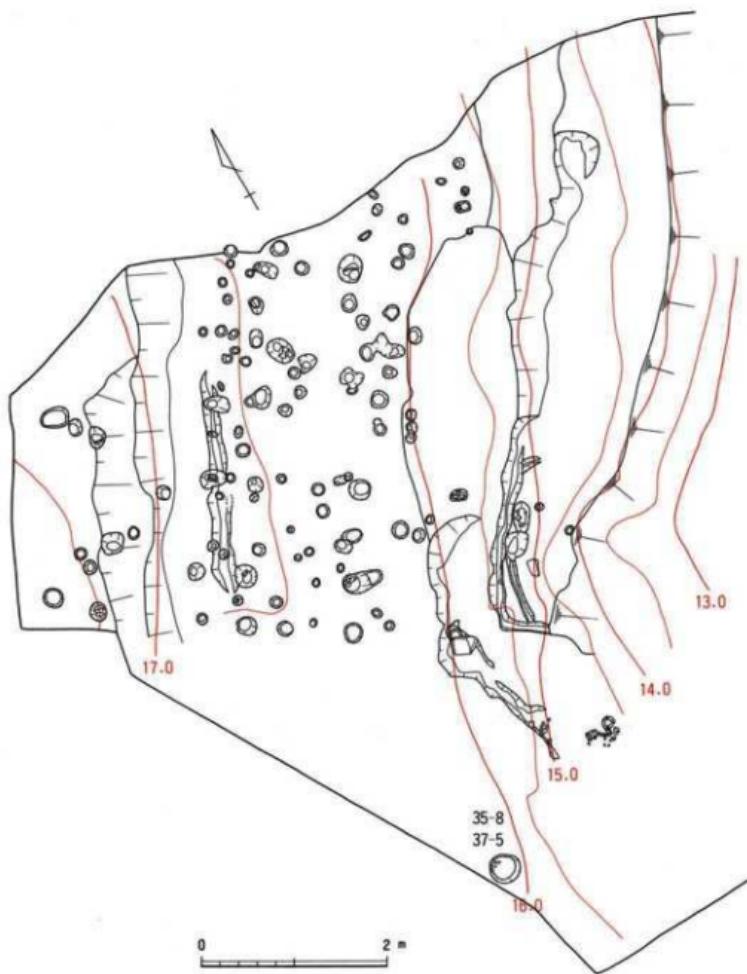
柱穴と思われるピットはP 1、P 2である。P 1は、径0.18m、深さ0.12mを測る。P 2は、径0.2m、深さ0.2mを測る。西壁中央には、ピット3、4が掘り込まれている。P 3は、方形で一辺0.5mを測る。P 4は梢円形を呈し、大きさ 0.36×0.64 mを測る。壁際には周溝が巡る。また、溝と切り合うように溝がもう一本あり、2時期の住居が重なっている可能性もある。

遺物は、甕(第37-1、2)がピットと溝から出土している。

SI-01出土遺物 (第34図1~5)

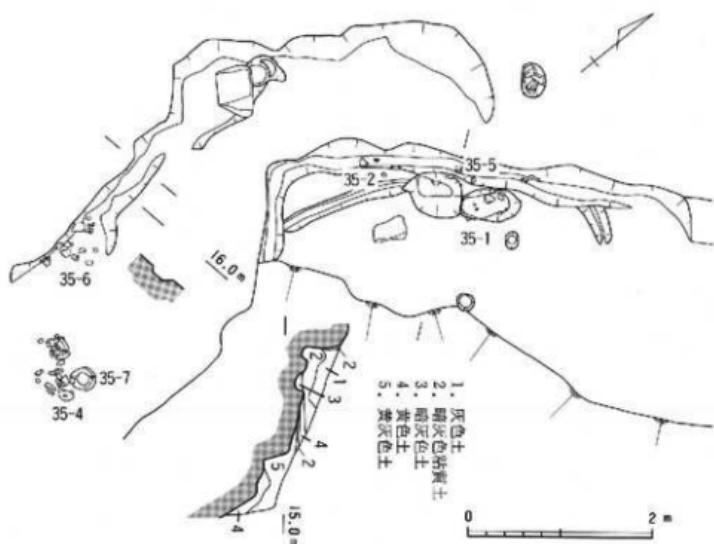


第31図 二宮C遺跡調査区位置図

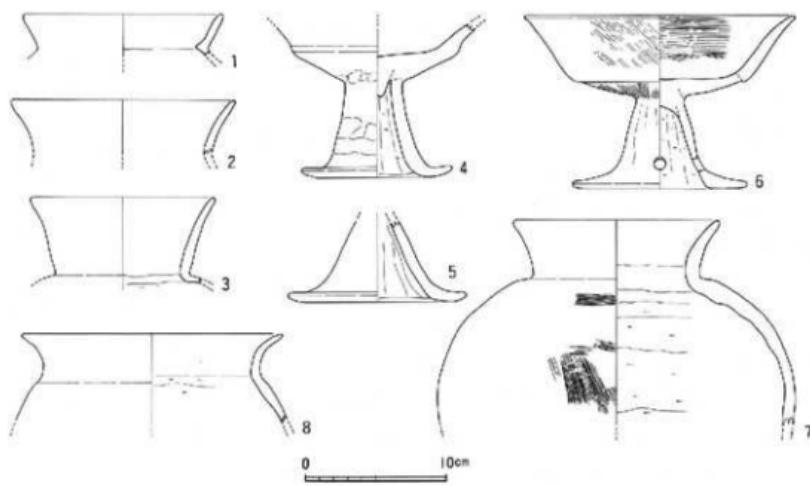


第32図 二宮C造構全体図

1は口縁部が外傾し、端部に丸みを有している。2は口縁部がやや外反するものである。3は直口壺の口縁部である。4は高环で、坏部の外面に段を持つもので、口縁部は外反する。脚据部は屈



第33図 SI-01、SD-01実測図



第34図 SI-01 (1~5)、SD-01 (6、7) ピット出土遺物実測図

曲している。5は脚部の破片で裾へ向け大きく開く。

SD-01（第33図）

SI-01の西側に位置し、SI-01の山側を削る様になっている。溝の幅0.26～0.5mを測る。

遺物は、溝内から高坏（34図-6）が、溝の南側延長から高坏（4）、甕（7）が出土している。

SD-01出土遺物（第34図）

6はほとんど完形の高坏である。坏底部は平坦なもので、外面に段を有し口縁先端を外反させる。脚筒部はやや短く、脚端部に向け屈曲し大きく開く。坏部は口縁部と坏部で接合し、その接合部分が段となっている。坏底部の外面にはハケメ、口縁部の内外面はハケメの後にナデを行っている。脚筒部外面に縦方向のヘラミガキを行い、脚部の下半に円形の透しを入れる。7は単純口縁の甕で、口縁部が逆八の字状に開き体部の肩が張出している。体部外面の上半は横方向のハケメ、下半は縦方向のハケメの後に一部ナデしている。体部の内面には、横方向のヘラ削りを施す。

SB-01（第35図）

調査区の西側斜面を高さ1m程削り、東西の幅4.2m、南北長11m以上の平坦面を作りだしている。南北5間、東西3間の掘建柱建物跡で西側の一面に庇が付く。柱穴は、黄褐色土の地山面において検出しており、柱間距離は梁行北側で東から1.15m、0.8m、0.7m、南側で1.4m、0.9m、0.9mを測る。桁行で東側が北から0.7、1.6、2.1、2.2、1.0m、西側が北から0.8、2.0、1.8、2.0、1.0mと不規則である。柱穴の径は、20～60cm、深さが15～85cmとなっている。柱穴内にはP9、P5に根固の石があり、他の柱穴からも石は出土しているがやや浮いた状態である。遺物は土師器・甕の底部（37-7）がP17から出土している。建物の北側からは、瓦質の鉢（37-4）が出土している。

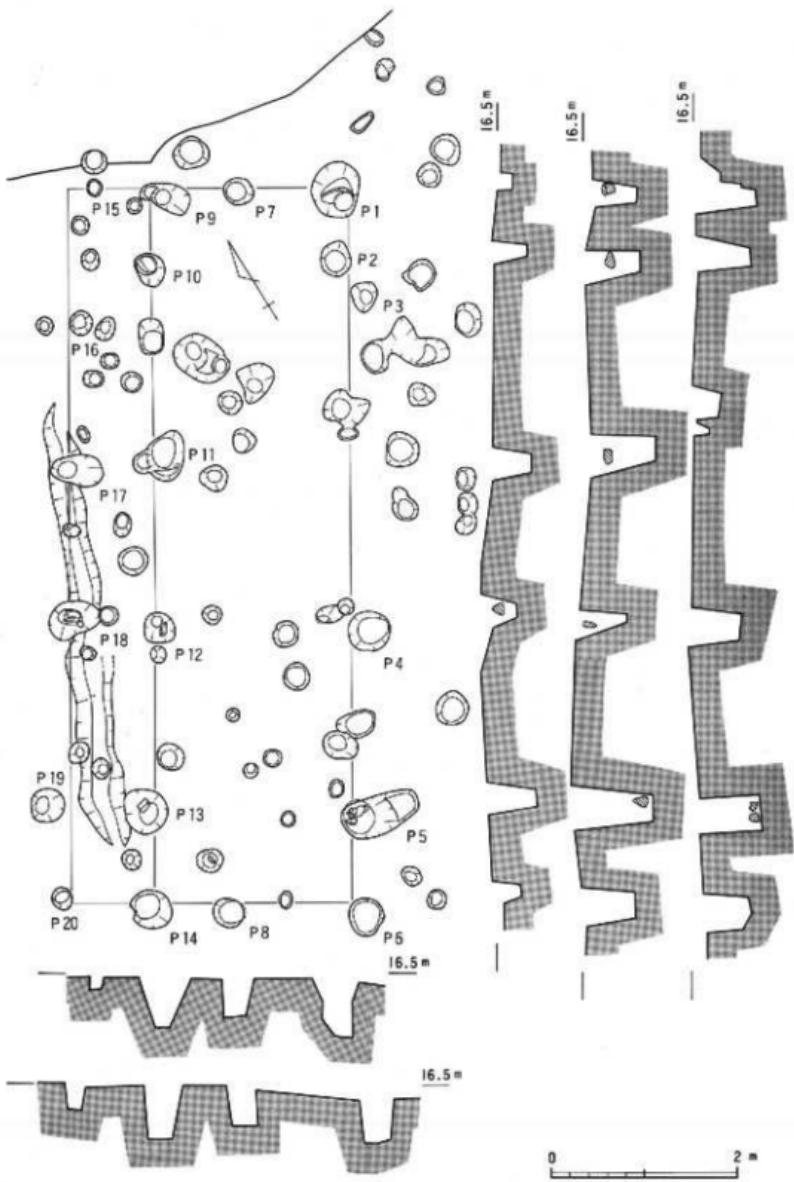
SB-01出土遺物（第37図）

7は土師器・甕の底部で、外面に回転糸切り痕が残る。4は防長系の瓦質、鉢の底部である。平底の底部に短い三足がつき、外面はヘラ状工具によりナデ、内面はハケメを行っている。色調は灰色で、焼成は瓦質ながら硬いものである。

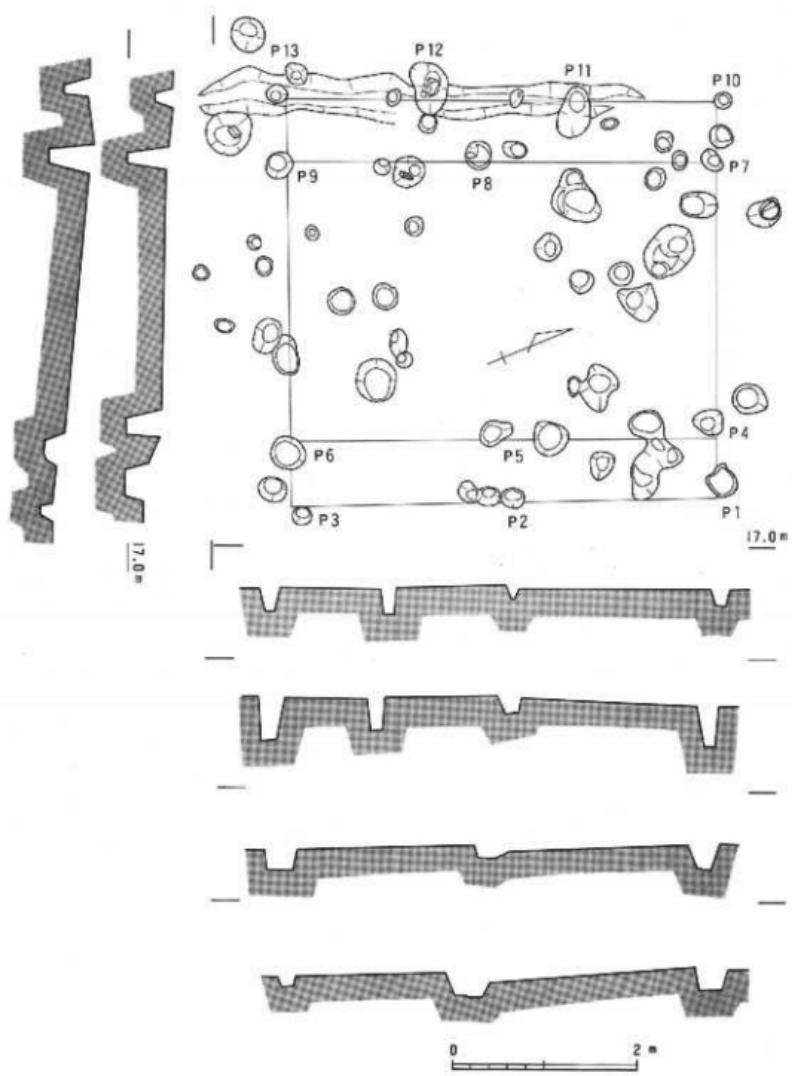
SB-02（第36図）

SB-01と重なる位置にあり、棟はSB-01より北に寄っている。南北の西側3間、東側2間、東西3間の掘建柱建物跡で東西2面に庇を持つ。西側の庇の柱穴は溝に沿うように位置している。柱間距離は梁行北側で東から0.7、2.8、0.7m、南側で東から0.6、3.1、0.7mを測る。桁行は、東側の列で北から2.3、2.3m、東側2列目で北から2.3、2.2m、西側から2列目で北から2.1、1.5、1.1m、西端の列で北から2.2、1.3、1.3mである。柱穴の径は15～35cmとSB-01に比べ小さなものである。遺物は、P-2から瓦質の擂鉢の破片（37-6）が出土している。

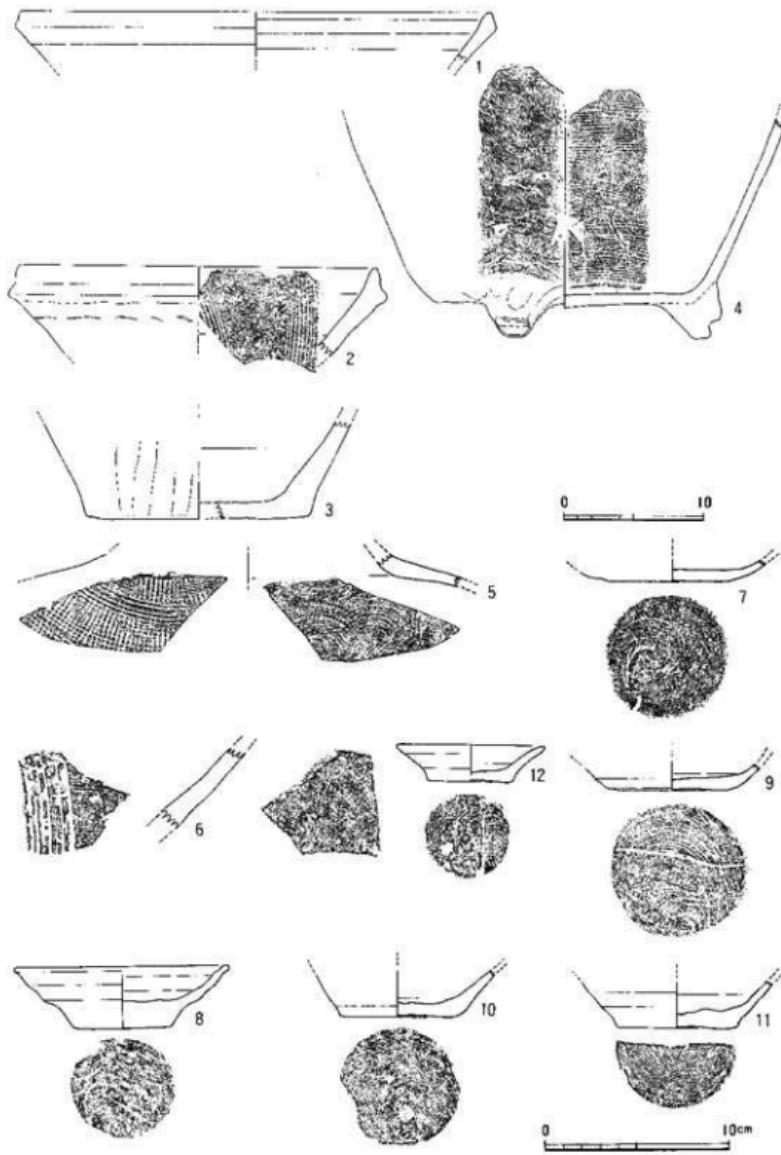
SB-02出土遺物（第37図）



第35図 SB-01実測図



第36図 SB-02実測図

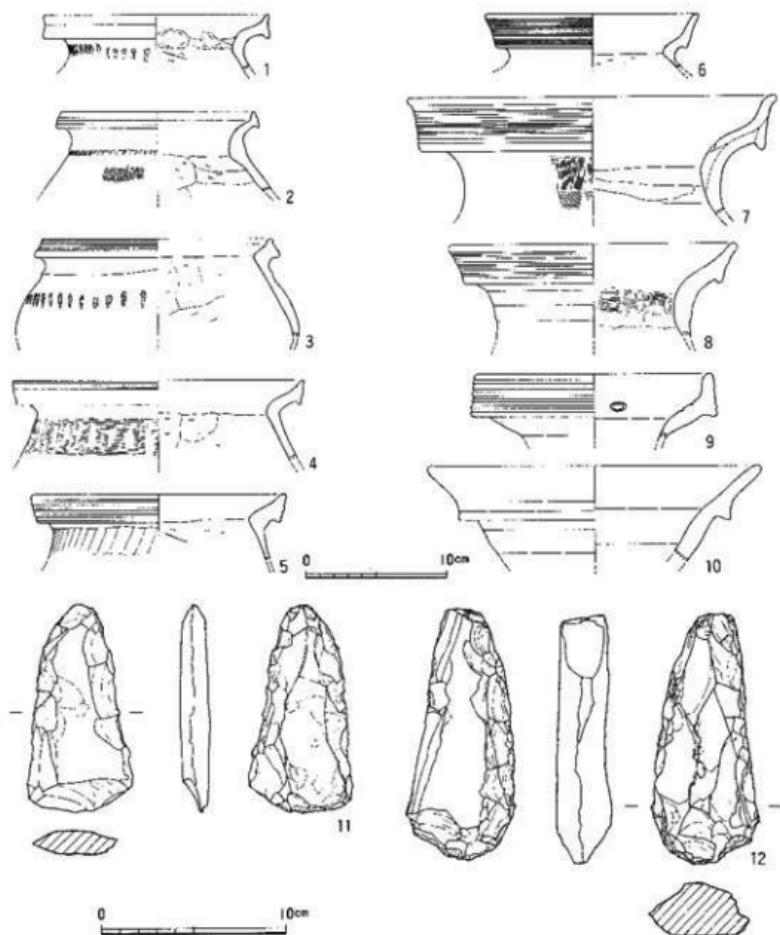


第37図 SB-01と周辺出土遺物実測図

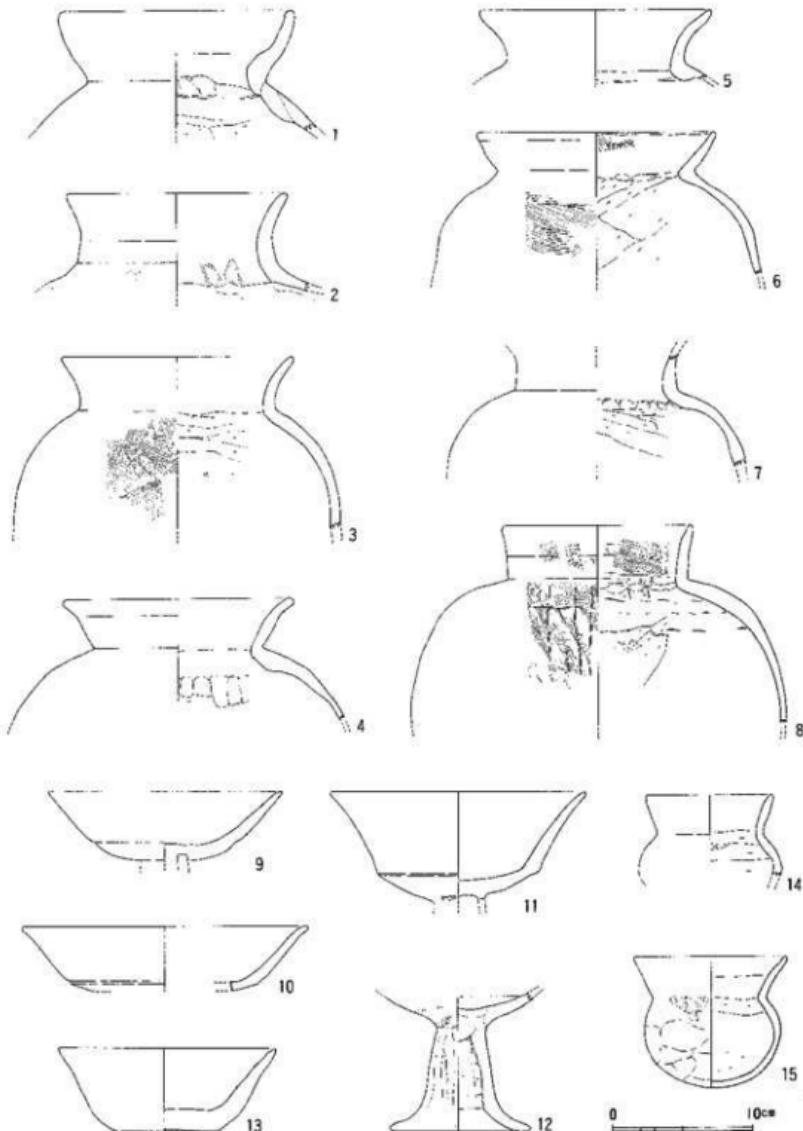
6は瓦質の擂鉢で内面に7条の櫛描のスリ目が残る。

SB-01、02周辺出土遺物（第37図—1～3、8～12）

1は東播系擂鉢の口縁部である。2は備前系の擂鉢で、口縁端部が上方に伸び内面に8条のスリ目が残る。3は壺の底部で底径16cmを測り、外面に継方向のナデを施している。8～11は土師器の



第38図 遺構外出土遺物実測図



第39図 遺構外出土遺物実測図

椀で、底部を回転糸切りにより切り離す。12は土師器の皿で口縁部がやや外反気味に立ち上がる。
遺構出土遺物（第38、39図）

38図1～10は弥生土器で1～8が甕、9、10が器台である。甕は口縁端部が肥厚、拡張する。1は口縁外面が無文で、頸部外面に刺突文が残る。2は口縁部が内傾し、外面に二条の凹線を入れ頸部から体部上半にかけてハケメ原体により押し引き状の波状文を入れる。3は内傾する口縁部を持ち、体部上半に連続刺突文が入る。4はやや外傾する口縁部に二条の凹線入れ、外面頸部下にハケメ原体による押し引き文を入れる。5は外傾する口縁部の外面に4条の凹線を入れ、頸部の下半にヘラ状工具により押し引き文を施す。6は、外傾する口縁部の外面に21条の細かい沈線を入れている。7は大形の甕で、口縁部は外反し上下に肥厚し外面に7条の凹線を入れる。8は口縁が外反し下側に肥厚する。甕は、内面頸部以下にヘラケズリを行っている。器台9は、上台外面に6条の凹線を入れる。内面に竹管による刺突文が入る。10の器台は上台部で下端部を肥厚させ、内外面ナデを施している。

11、12は、打製石斧で調査区の西側において表探したものである。周辺部を敲打しているが片面の調整は稚なものである。長さ11.4、幅5.7、厚さ1.5cmである。12は片面に自然面を残しており扁平で、もう一面の断面は尖っている。長さ13.6、幅6.0、厚さ2.9cmを測る。

39図1～8は、土師器・甕である。1は口縁部が内湾し、器壁がかなり厚くなっている。2は口縁部が外反気味に直立して立ち上がる。4、5は口縁部が外反し、先端部で屈曲している。6は口縁内側が少しだけ肥厚し丸みを持つ。体部の外面にやや粗いハケメが入る。7、8は口縁部が直立気味に立ち上がるもので、8は口縁部の内外面にハケメの後に一部をナデしている。9～12は高坏である。9、10は坏部の外面に段を有している。11は坏部の外面に段があり、口縁部が高く外反している。12は脚部で筒部の外面にヘラミガキを施す。13は椀で、底部が平底となり体部は直線的に外傾して立ち上がる。内外面にナデを施している。14、15は小形丸底甕である。15は口径11.0cm、器高9.3cmを測る。口縁部はヨコナデ、頸部にハケメ、体部は指頭によるナデを施している。

小 結

二宮C遺跡において検出した遺構は、古墳時代中期の堅穴住居跡1と中世の掘建柱建物跡2である。SI-01は、隅丸方形プランを呈しており、北西壁際に貯蔵穴状の土壙がある。SD-01は住居の西側に位置し、排水溝的な用途があったものと思われる。出土した土器は、高坏の坏部に稜があり、内面にハケメを残していることから、古墳時代中期中頃のものと思われる。須恵器・甕（37-5）は、内面の叩きをナデ消していることなどから中期後半と思われる。

SB-01、02は、同じ場所に重複して位置しているが両者はやや主軸方向にずれが見られ、時期的な差があると思われる。この建物の検出面からは、備前系壺鉢が出土しており口縁部の形態から15世紀^(注1)と思われる。また、(37-4)は、防長系の瓦質土器の鉢で室町時代とされるものである。青磁・碗は外面の蓮弁が片彫りで表現されており、時期は室町時代と思われる。

弥生土器(38-1~3)は、弥生時代後期前葉、4、5は後期中葉と思われる。2、4、5は外側の頸部下側に櫛状工具により押し引き状の平行線文、波状文が施されている。この施文方法は石見地方山間部、瑞穂町順庵原遺跡^(注2)等に共通する施文方法である。6~10は、口縁部が上下に発達し、円線文が多条化するなどの特徴から弥生時代後期末と思われる。

土師器(第39図)は、壺の口縁部が単純口縁化しており、体部の器壁も厚くなっている。高壺は体部外側に稜線を有していることなどから中期中頃と考えられる。6の壺は、口縁端部の内側を肥厚させており、布留臺の特徴を有している。

この遺跡は弥生時代後期、古墳時代中期、中世と大きく3時期に渡って遺跡が継続している。掘建柱建物は、室町時代と考えられることから、この丘陵上に位置する神主城、谷奥に位置する石見二宮との関連を考える必要がある。また、この場所が二宮の平野の南端に位置していることより、中世の都野氏との関連も考えなくてはならない。

註 1 間賀忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』60 1991年

2 山口県教育委員会「今宿東遺跡」1986 第II地区 P-52出土の鉢と同形態のものである。

3 島根県立風土記の丘資料館『八雲立つ風土記の丘研究紀要』I 1977年

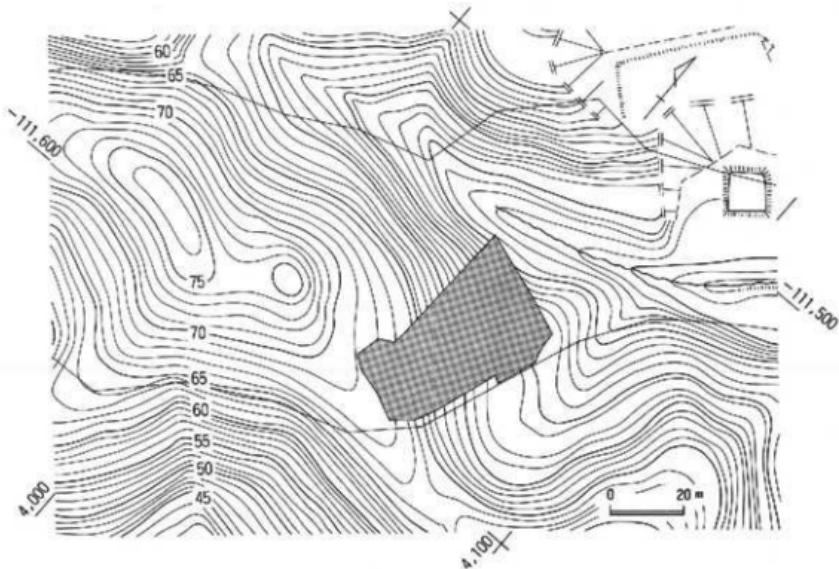
4. 久本奥窯跡

位置

窯跡は江津市嘉久志町地内にあり、海岸線から南へ1km入った標高60mの丘陵斜面に位置している。窯跡の周囲は石州瓦粘土採取のために削られており、灰原のほとんどが破壊を受け斜面一体に遺物が散乱していた。窯跡は花崗岩に掘り込まれているが、丘陵が削られた法面には粘土層が部分的にみられる。この窯跡の周囲は、現在でも石州瓦に使用する粘土が採掘されている。調査で確認した窯跡は1基であるが、調査区域外にも窯跡が存在する可能性がある。

周辺の遺跡としては、窯跡の南を流れる和木川上流の棚橋押込窯跡において古墳時代後期の窯跡が確認されている。

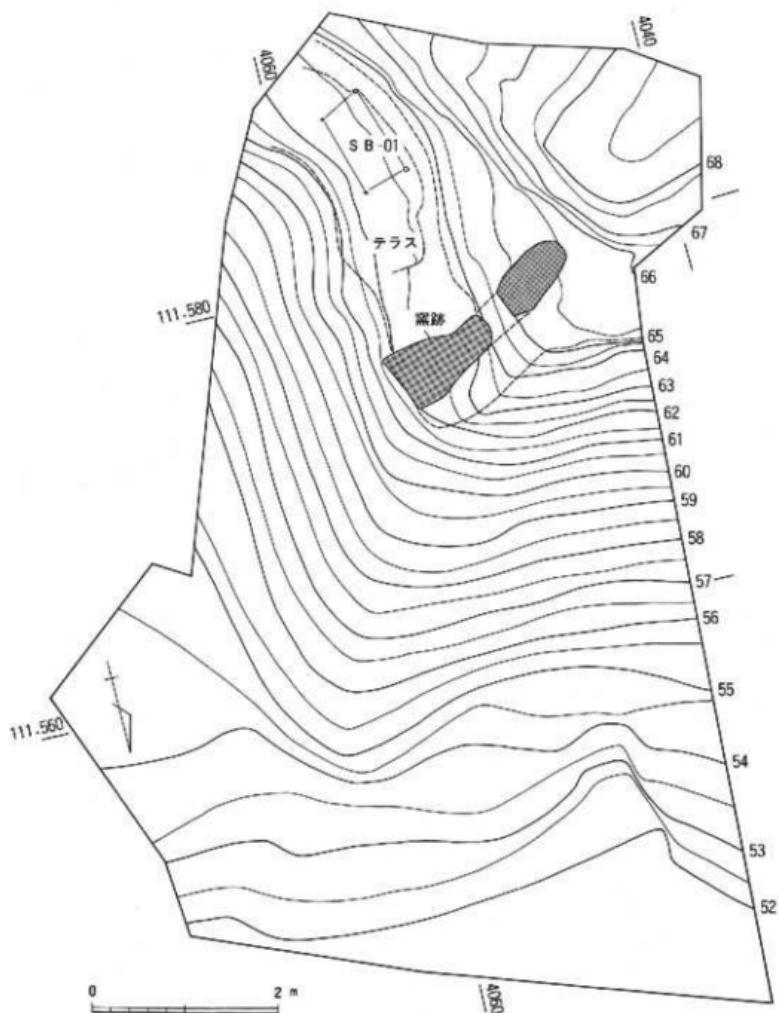
窯跡は標高62～66mの斜面に掘り込まれた、地下式登り窯（いわゆる窖窯）である。尾根は東西に伸びておりそこからやや下った斜面に位置している。天井部は、燃焼部から焼成部にかけて残っており、焼成部の奥側は重機により削平を受けており残っていない。窯跡の南側にはテラスがあるが、この部分には削られた土が盛られていた。灰原から下の斜面は地山面まで削られた後に、上側の斜面の土（遺物を含む）が流れ込んでおり、多量の遺物が、炭、灰層、窯壁と共に出土している。



第40図 久本奥窯跡調査区位置図

遺物の散布する範囲はかなりの広範囲であった。

窯跡は灰原を含めて全長11.6m、最大幅2.0m、主軸方向 W-27°-S を測る。窯は大きく別けて三回



第41図 久本奥窯跡位置図

の操業時期があり、一次、二次で須恵器、三次で瓦を焼いている。

一次床面（第42図）

焚口の床面は地山を平坦に削りだし、焼成により赤く焼けた部分がある。焚口部の幅2.3m、側壁残存高0.43mを測る。焼成部には長さ2.15m、幅1.5mの落ち込みがあり、この床面から須恵器が出土している。床面と側壁には厚さ2cmの粘土が貼られ窯壁となっている。天井部は部分的に崩れ落ちているが、かなり厚く窯壁が塗られている。落ち込み内の床面直上からは、須恵器壺・蓋（43-1、9、11）が、床面の側壁寄りからは壺・身（43-20）が出土している。

梢円形の落ち込みの奥側には、幅0.9、長さ3.5mの溝状の落ち込みがある。この溝の床は焚口側から長さ1.8mまで極めて平坦で、その奥は35°の傾斜で立ち上がる。この溝の床面、側壁は焼けておらず、この溝を茶赤褐色上で埋めた後に床面を作り出している。この溝は排水等の用途が考えられ、床面を乾燥させるためのものと思われる。溝の上面からは鉄器（44-11、12）、須恵器壺・蓋（44-13）、壺・身（14、15）、甌（16）、硯（17）が出土している。床の基底面の幅は焼成部近くで1.45m、焼成部の中央で2.0mを測り、中ほどで膨らむ形となっている。床面の傾斜角は18°である。焼成部の奥側は、地山が平坦に二段削り出されており、床面直上から須恵器、鶴尾の破片が出土している。天井部は長さ3m程残っており、横断面を見ると側壁は斜めに立上り天井部には丸味を有している。床面から天井までの高さ1.5mをはかる。側壁から天井に向け粘土が徐々に厚く塗られており、天井部で25cmの厚さがある。窯壁の裏は、側壁で10cm、天井部で20cmの厚さで地山が熱を受けて赤く変色している。焼成部の奥側の横断面では、側壁が高さ1.2mまで垂直に立上り、その後天井部が丸くなっている。床面、側壁共に地山面となっており、厚さ10cm程火を受けて赤く変色している。床面の奥側は、方形で幅1.8mを測る。奥壁が70°の傾斜で高さ0.9m程立上り途中で屈曲し、緩く立ち上がる。上面においては幅1.05mと床面に比べて狭くなっている。焼成部の奥側の床面直上からは、須恵器壺・蓋（43-4、5、6）と壺・身（43-14、15）、甌（44-4、5）が、また鶴尾の細かい破片も出土している。床面直上には、きめの細かい黄色粘質土が流入している。

煙道部は削平されており、残っていなかった。

灰原には、長さ2.5m、幅1.3mの土壤があり、灰と炭が混入した黒色土が入り込んでいた。黒色土は東、南側のテラスの斜面側に向けて広がっていた。焚口から灰原に向けて幅が広がっており、先端で幅3.5mを測る。土壤内からは須恵器壺・身（43-13）が出土している。

焚口、焼成部、灰原出土遺物（第43、44図）

窯跡内、灰原からは、須恵器・蓋壺・高壺・甌・甌・硯・鶴尾が出土している。このうち蓋壺が多く出土しており、形態の分類ができた。

蓋坏（蓋）B類 天井部にヘラ削りを行い、中央に凝宝珠のつまみが付き、口縁端部に短いかえりが付く。1は口径14.2cm、高さ3.0cmを測る。2はつまみが大きく、口径も大きなものである。

蓋坏（蓋）C類 3は天井部にヘラ削りを行い、扁平なつまみが付く。口縁端部に極めて短いかえりが付く。

蓋坏（蓋）D類 天井部に扁平なつまみを持ち、口縁部が鳥の嘴状を呈している。4は口径17cm、高さ2.4cmを測り、5も高さ2.0cmとかなり扁平なものである。6は天井部の破片である。

蓋坏（蓋）E類 7～12は天井部にヘラ削りを行い輪状のつまみを有し、口縁部が鳥の嘴状を呈している。7～10は口径が12.6～13.5cmを測り、全体的に焼成が悪く軟質のものである。11は口径15.2cm、高さ3.0cmと多少大きなものである。12は口径19cm、高さ3.4cmつまみの径8.1cmとかなり大型のものであり、口縁端部が鋭い形になっている。

蓋坏（身）C類 13～15 底部が平底で、体部は口縁部へ向け外傾し直線的に立ち上がる。底部の外面にヘラ切り調整を行っている。

蓋坏（身）D類 16は高台が斜め外方に向け付くもので、高台の外側が下に付く様になっている。体部は口縁部へ向け直線的に立ち上がる。

蓋坏（身）E類 16～20 高台が断面方形で細く、底部の外周よりやや内側の位置に高台あり、内側が下と密着するように付くものである。19は口径12.4cm、高さ6.6cmと器高の高いものである。

高坏 21は体部に丸みを持ち、口縁部がやや外反し端部に丸味がある。脚部は低く「ハ」の字状に開いている。22、23も体部に丸味を持つが脚部は長いものである。いずれも体部外面の下半にヘラ削りを行う。24は坏部に深さのあるもので、外面のナデが強く施される。44-1は底部が平坦で浅い坏部である。2は低い脚部で端部が鳥の嘴状になっている。

甕 4は口縁部の上端が方形で外面に櫛描波状文が3条施される。体部は外面に平行叩き、内面に同心円叩きが施される。

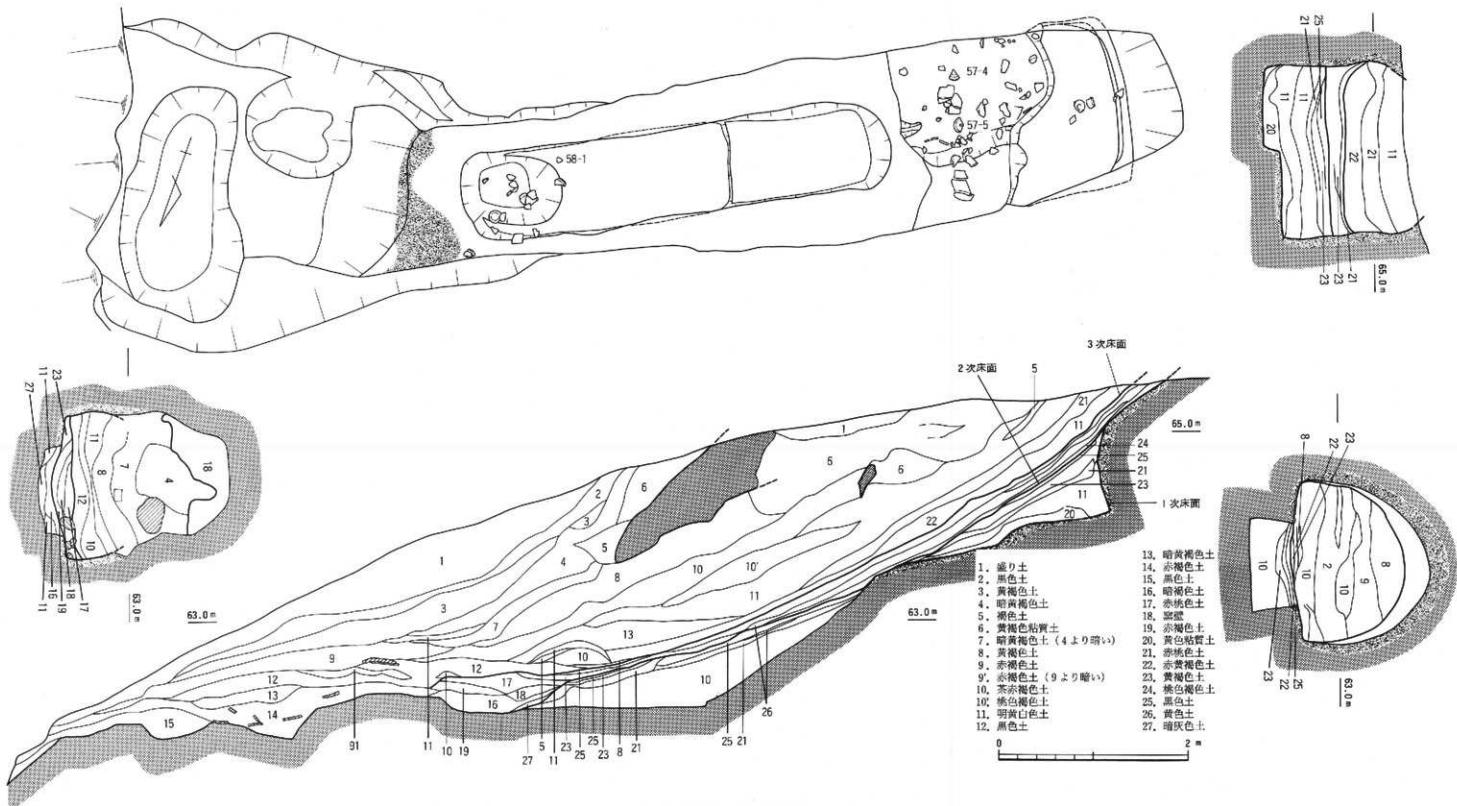
床面下溝出土遺物（第44図11～17）

鉄器 11は刀子で刃部の先端部分を欠いているが、残存長10.0cm、身幅1.3cm、茎の長さ6.6cmを測る長いものである。12は鎌で残存長8.4cm、身幅2.9cmを測り、端部を片方折り返している。

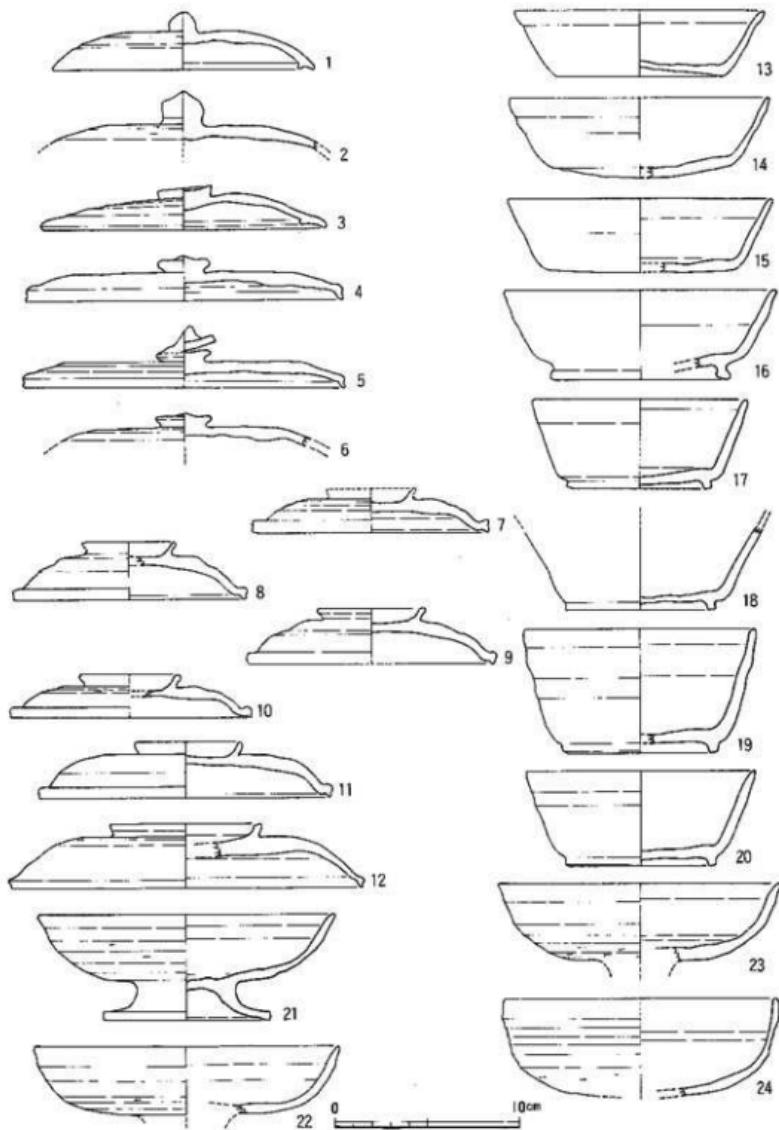
須恵器 13、14は坏D類である。坏14の高台は、小さいが外側が下に接するようになっている。15は坏C類で底部の外面をヘラ切りし、無高台である。16は瓶で底部に幅2.2cmの帯が十文字に付くものと思われる。底部には厚さ1cmの高台が付いている。17は円面覗と思われ坏蓋の天井部外面を使用するものと思われる。

窯跡壁面加工痕（第45図）

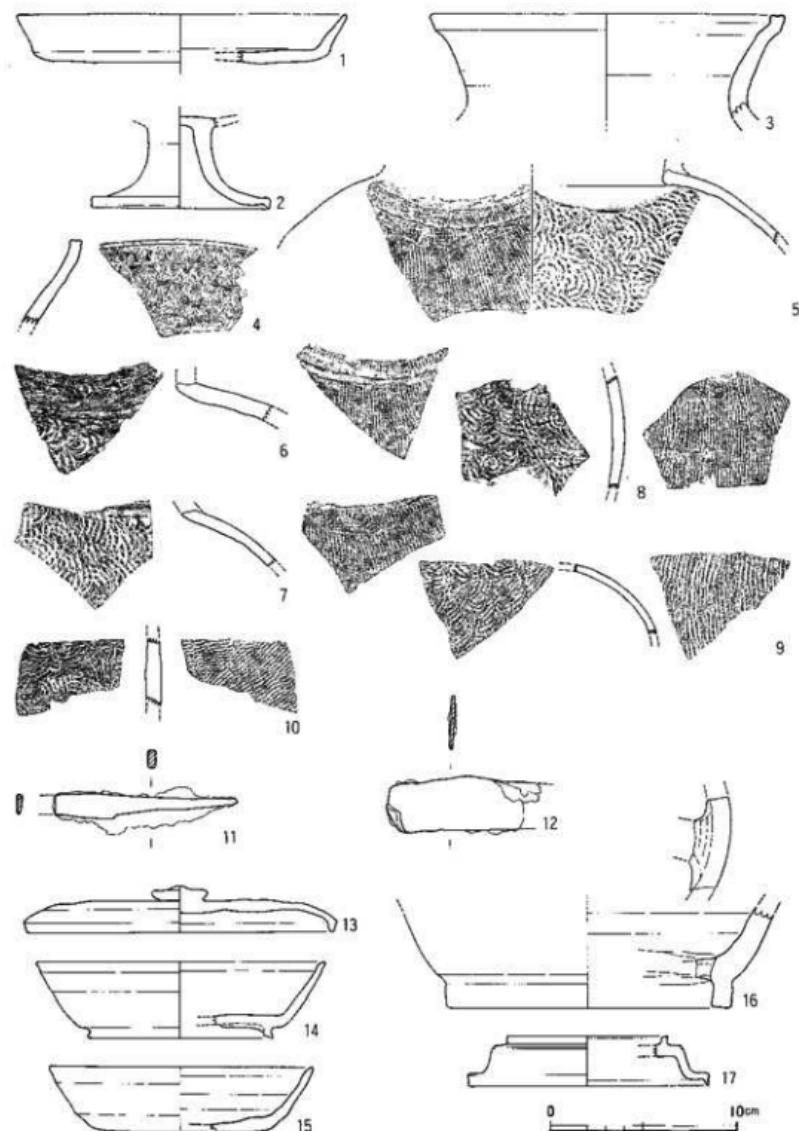
窯跡の焼成部の奥側は、地山をトンネル状に掘り込んでおり、奥壁、側壁には削った際の加工痕



第42図 猪跡第1次床面実測図



第43図 痕跡焚口焼成部出土遺物



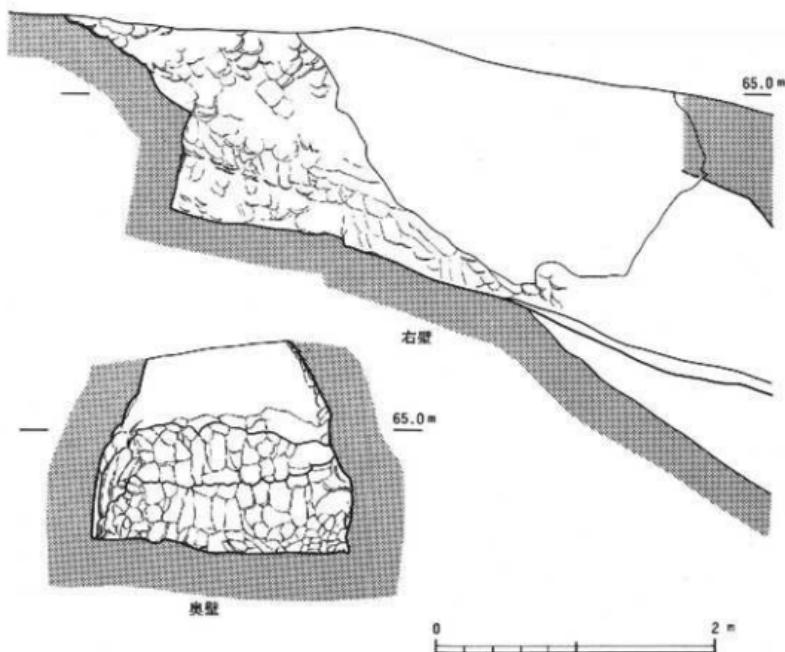
第44図 猿跡焼成部灰原出土遺物

が残っている。加工に使用した工具は刃部の幅15cmで先端が丸く湾曲している。右壁に残る加工痕は奥側から斜め下方に向けて削られ、床面から60cmのあたりで横方向になり、床面近くで下向きに削られる。奥壁は、上方から下方に向けて削られ、側壁との境で横方向に削られる。天井部が残る位置の側壁と天井部にはすき入り粘土が貼られており、側壁には粘土を塗った時の指ナデの痕が残っている。(図版35一下)

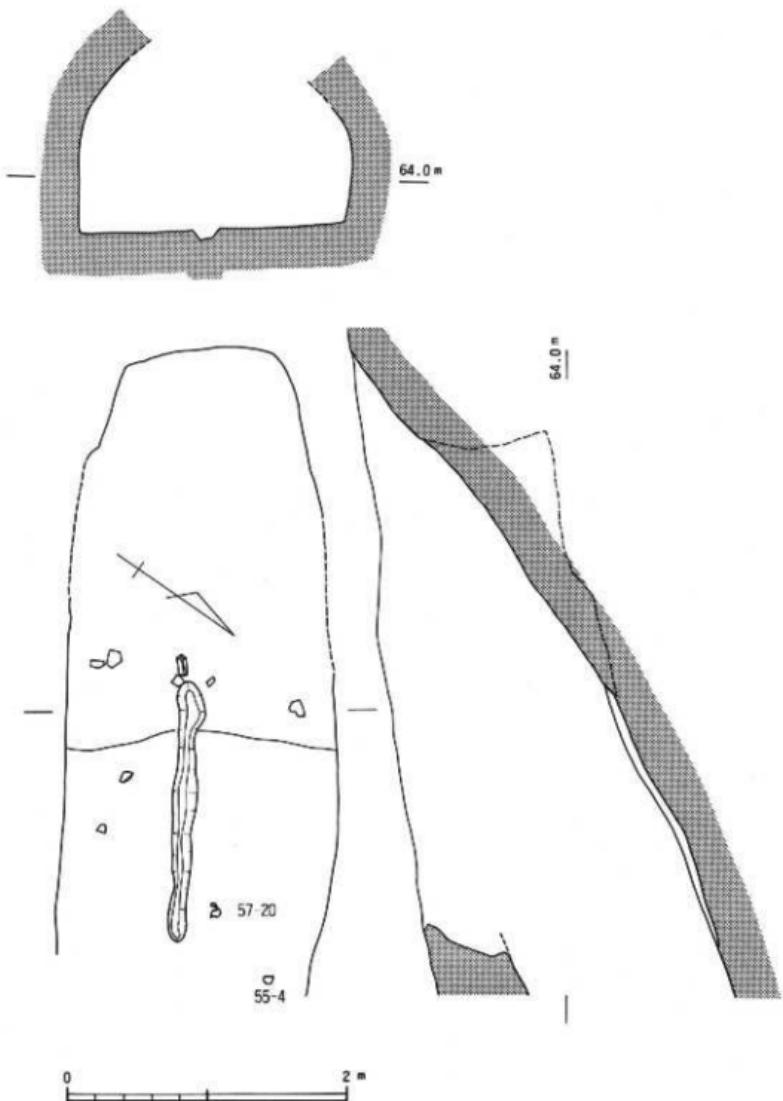
二次床面(第46図)

二次床面は焼成部の奥側2.3mの平坦な一次床面を埋めて床にし、燃焼部から焼成部にかけて一次床面と重複して床面としている。一次床面を埋める土は、黄色粘質土、明黄白色土で奥壁側で厚さ0.9mを測る。床面の平均傾斜角35°を測る。床面の中央部には、長さ1.85m、幅10~20cmを測り、覆土には黄色粘質土が入っている。二次床面からは須恵器・壺(55図-4)が出土している。

二次床面出土遺物(第55図-4)　須恵器の壺の口縁部である。口縁上端部は平坦面がある。



第45図 窯跡、壁面加工痕実測図



第46図 窯跡第2次床面実測図



第47図 第3次床面実測図

三次床面（第47図） 二次床面の全体を厚さ15~20cm埋めて、三次床面を作り瓦を焼成している。二次床面の上には黄褐色土を埋めており、床面は赤く焼けている。床面の傾斜角は焼成部で5°、焼成部で26°、焼成部から煙道にかけて40°を測り、煙道部に向けて徐々に傾斜が強くなっている。床面全体からは平瓦、丸瓦、がほぼ全体的に出土している。瓦は破片の平面が密着した状態で出土しており、窯詰めの後に破壊され原位置から動いている状態である。平瓦は、縄目叩きの三種類が混在している。

テラス状遺構（第49図）

窯跡の南側にテラス状の平坦面があり、平坦面の山側に溝が廻りその内側から掘建柱建物跡（SB-01）、ピットを検出している。平坦面の幅は3.5~4.5mで谷地形に沿うように長さ11.5mを測り、南側は調査区域外へ続いている。平坦面は山側を削り、谷側に土を盛っており、盛り土は黄褐色土で炭化物を多く含んでいる。（第48図）テラスの北側斜面寄りからは、須恵器がまとまって出土している。

SB-01（第50図）

テラス状遺構において検出した南北2間、東西1間の掘建柱建物跡である。西側は1間で、溝の中に柱穴が掘り込まれている。P1~P3は黄色褐色土の盛り土上面において検出している。柱間距離は梁行北側で2.6m、南側で2.9mを測る。桁行は東側で北から3.1、2.6m、西側で5.9mを測る。柱穴の径は、10~25cm、深さ20~40cmを測る。P5の南側において焼土が見られ、地山上に厚さ10cmの黄色土が堆積しており、その土が焼けたものである。遺物は、壺・蓋が52-1、11、12、21、22、23、25、28、29、壺・身53-2、3、10、高壺54-15、壺-9、甌55-10、甌56-3、土師器甌56-9が出土している。建物であることから甌、土師器・甌も出土している。

土器溜り（第51図）

テラスの北側斜面寄りにおいて須恵器がまとまって出土している。壺には灰釉が多く付くもの、割れたもの等があり、製品としては不合格とされたものようで、それらが選別後に廃棄された状態であったと思われる。

遺物は、須恵器壺・蓋52-2~9、13~17、20、壺・身4~9、高壺4~6、11、壺55-3、7、甌56-1、土師器・甌56-7が出土している。壺・蓋、身はほぼ一箇所に重なり合うようにして出土している。蓋は、口縁部にかすかに返りが付くものと端部を折り返すものの二種類がある。壺・身は高台が付かず、体部が直線的に開くもの一種類である。

テラス出土遺物（第52~56図）

テラスからは、SB-01とその周辺、土器溜りから須恵器が多く出土している。量的には壺が多く出土している。

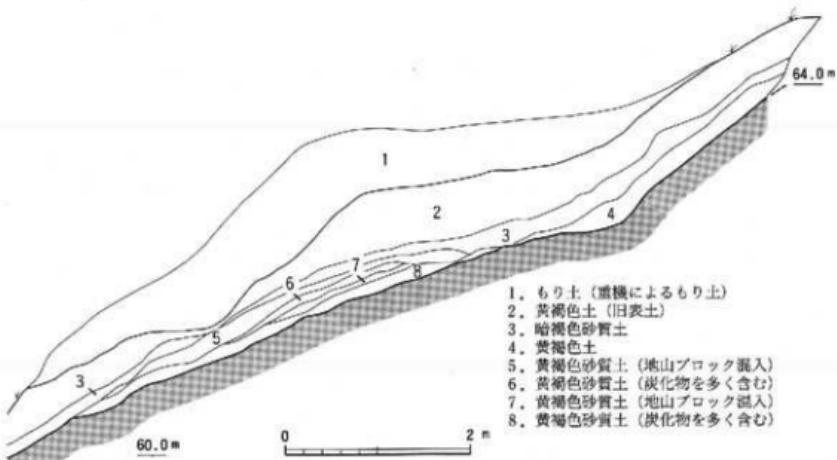
蓋坏（蓋）A類 52—19は、口径16.8cm、器高3.0cmを測る。天井部は多少丸みがあり、口縁部との境は不明瞭である。天井部の外面にはヘラ削りを施す。

坏蓋（蓋）B類 1は口縁部に返りを有し、天井部の外面にヘラ削りを行い、つまみは付かない。

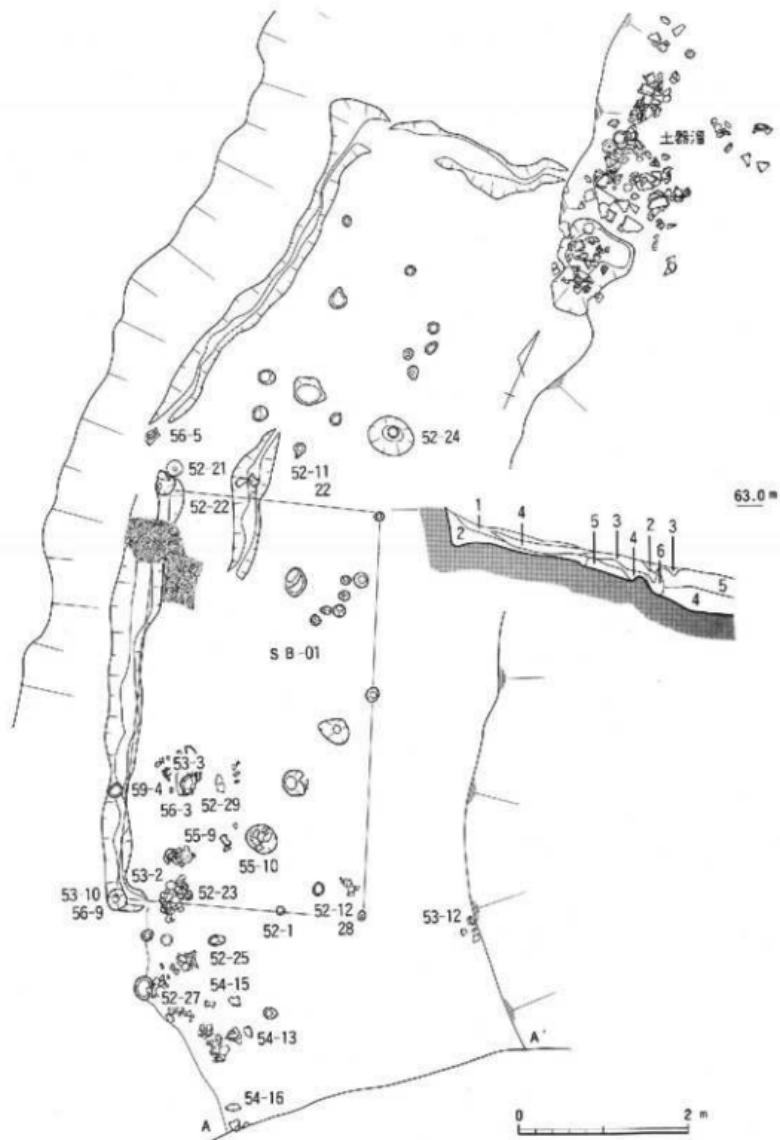
坏蓋（蓋）C類 2～10は口縁部の内側に低い返りを有し、天井部の外面にヘラ削りを行い擬宝珠を扁平に押しつぶした様なつまみを付ける。2～8は口径14.3～15.1cm、器高1.8～2.6cmをばかり、小形のものである。9は口径16.8cmとやや大きなものである。2～6は受け部と口縁端部の間に重ね焼きの際に付いた、坏の口縁口唇部が溶着している。いずれも外面には、窯の中で焼成時に付いた灰釉が付いている。

坏蓋（蓋）D類 11～18、20、21は天井部の外面に扁平なつまみを有し、口縁端部が鳥の嘴状を呈している。11、12は口径12.0～12.5cmと小形のものである。13、14は天井のつまみの中央が凹んでおり、口縁端部にやや厚みがある。18はつまみを欠くが、天井部に丸みを有しており、器高も高い。21は天井部が平坦で、口縁端部内側に向けて折り込まれている。22はつまみは同様の形態をしているものの、口縁部が長く下方に向けて伸びている。直口蓋のようなものの蓋と思われる。

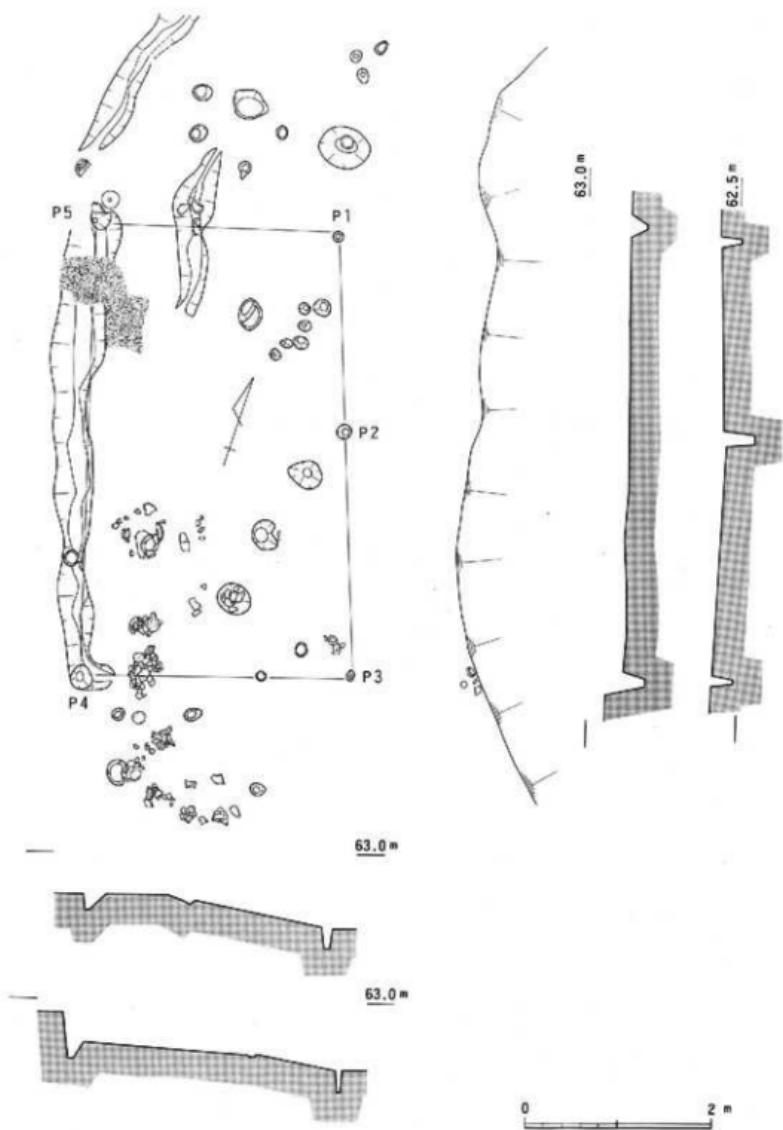
蓋坏（蓋）E類 天井部が平坦で外面に輪状のつまみを付ける。23～27は口径13.3～14.9cm、器高2.3～2.5cmと小形である。29は口径21.6cm、器高3.1cm、つまみの径9.2cmとかなり大きなものである。



第48図 テラス東壁土層実測図



第49図 テラス実測図



第50図 テラス SB-01実測図



第51図 テラス土器溜実測図

蓋坏（身）A類 口縁部に返りを有し、口径12.0cmを測る。

蓋坏（身）B類 底部が平底で、体部が内湾気味に立ち上がる。口径4.5cm、器高3.1cmを測る、小型のものである。

蓋坏（身）C類 底部が平底で、体部が直線的に斜め外方に開くように立ち上がる。底部外面をヘラ切りにより切り離す。底部は平坦ではなく、中央がやや膨らんでいる。4は口縁部外面に重ね焼きにより、口縁部の破片が熔着している。

蓋坏（身）D類 3は底部の外周からやや中に入った位置に、下端部が横に広がった様な高台が付く。体部はかなり開き気味に口縁部に至る。

蓋坏（身）E類 10は体部が直線的に斜め上方に立ち上がる、高台は小さく断面が方形に近い。底部外面はヘラ切りを行う。11は器高が3.3cmと低く、高台にやや幅を持つ。

蓋坏（身）F類 13、14は器高が低く、体部が外反気味に開き底部外面にヘラ切りを行う。15は体部がかなり外傾する。16、17は体部が直線的に開くものである。いずれの土器も焼成が悪く灰白色を呈している。

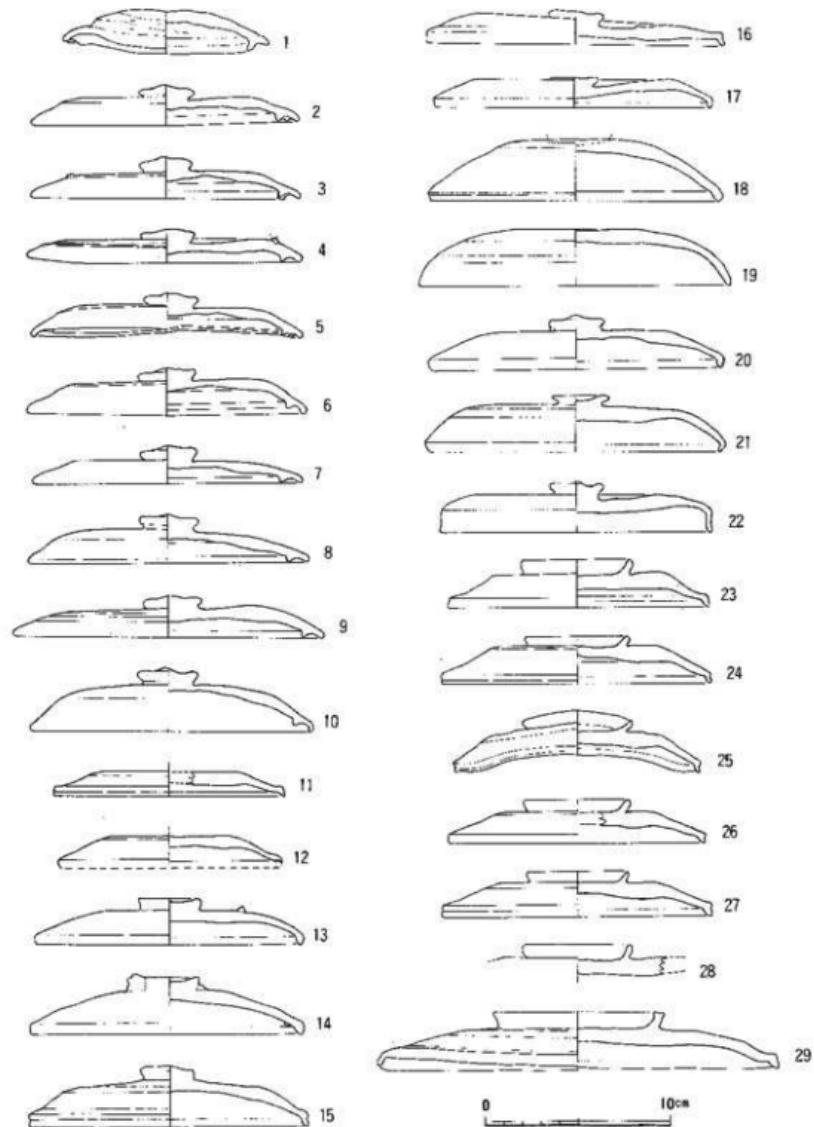
高坏（第54図） 1は体部下半に丸みを有し、口縁端部が鋭いものである。2は坏部の立上りが低く1.2cmである、脚部は高く内面にしづり目が残る。口径14.8cm、器高9.1cmを測る。3～7は同様の形態で、坏部より脚部のほうが多少高い程度のものである。坏部の底部は平底で、体部は直線的に立ち上がる。脚部は裾へ向けて広がり、端部が屈曲している。8、9、11、12は同形態の高坏の脚部である。13～16は、脚部の長い高坏の坏部である。坏部の口径22.2～24.3cmを測る、体部の途中で屈曲しながら外反し口縁端部に至るため、途中に稜がある。坏底部内面は同心円叩きの後にナデている。

甌（第55図1） 体部の破片で上半に横方向の沈線を入れ、縦方向に刻むように沈線文を入れる。体部下半にはヘラ削りを施す。

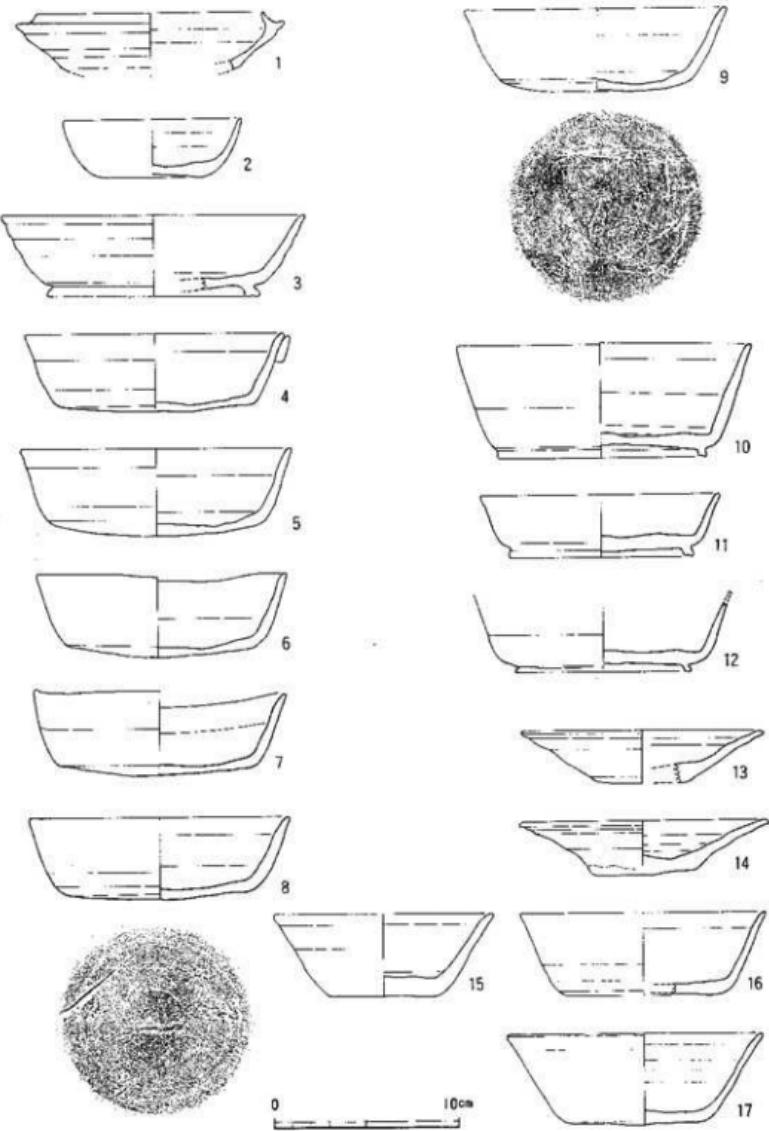
壺（2、3、5、7～9） 3は長颈壺で肩部に二条の沈線を入れ、口縁部が外反している。口縁部の内外面にしづり目が残る。5は肩部が屈曲し一条の沈線が入り、内外面にヨコナデを施す。7は窓内で焼成時に歪んでおり、本来は口縁部が直口気味に立上り、端部はわずかに外反するものと思われる。肩部に一条の沈線が入り、底部外面に手持ちヘラ削りを行っている。8は壺の口縁部で端部で屈曲している。9は体部下半部の破片で、外方に開くような高台を有している。

甌（第55図10） 底部近くの破片であり、径6mmの孔があり、もとは4ヶ所あったものと思われる。外面の下半はヘラ削り、上半は叩きの後にナデている。

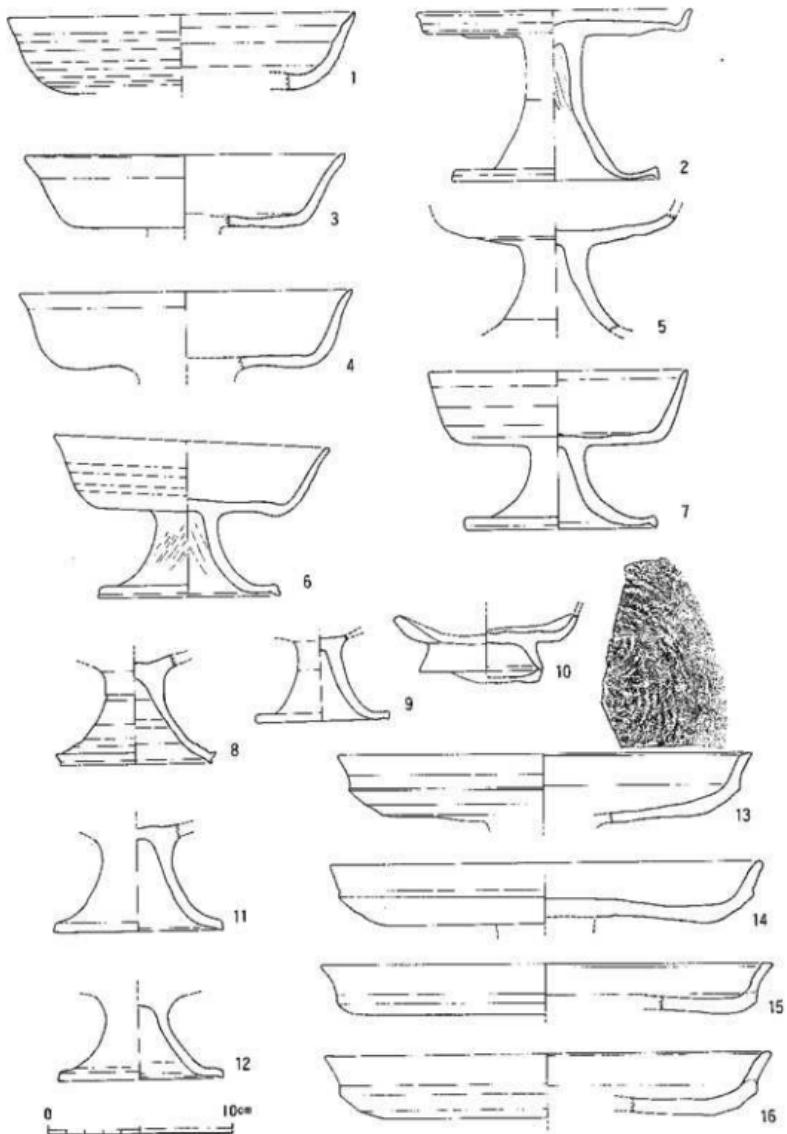
鉢（第55図11） 平底で体部が直線的に立上り、口縁部は体部を途中で切り取った要になっている。底部には径2mmの孔が6個貫通している。



第52図 テラス出土須恵器（蓋）実測図



第53図 テラス出土遺物実測図



第54図 テラス出土遺物実測図

6は壺のようなものの把手と思われ、粘土紐を渦巻状にして体部に貼付ている。

壺（第56図1～4、6） 1～3は体部の外面に平行叩き、内面に同心円叩きを施す、3は口縁部の外面に平行叩きの後をナデしている。4は口縁部の外面に五条の沈線を入れ、ヘラ状工具により斜行文を入れる。6は口縁部の外面にカキ目を入れた後に二段の斜行文を入れる。

横瓶（第56図5） 側部の破片で外面に同心円状にカキメを入れる。

土師器（第56図7～9） 7は頸の長い壺と呼ぶべきものであり、口縁部の外面にヘラ削りの後ナデを行っている。8、9は甕で、逆「L」字状の口縁部である。8は内面に、9は内外面に平行のハケメを施す。

調査区北側盛り土出土遺物（第57～61図）

調査区の北側は、窓跡の灰原の途中から前が重機により全体的に削られており、遺物が全体的に出土している。調査区中央斜面は地山上面まで削られ、北側に遺物がその土と共に盛られた状態であり、土層の堆積は搅乱を受けている。遺物は灰原の黒色土がある場所にまとまってみられた。遺物は瓦、鶴尾、須恵器、密壁があり、須恵器の坏が多く出土している。

蓋坏（蓋）A類 57～3、4は、口径12.9、13.1、器高3.4cmを測る小形の蓋である。天井外面はヘラ切りにより、口縁部との境は不明瞭である。

蓋坏（蓋）B類 天井部外面にヘラ削りを行い中央に擬宝珠のつまみを付け、口縁端部に短いかえりが付く。5は口径12.0cmと小形で、7～9は14～15.3cmを測る。9はつまみの上部を押しつぶした様になっている。

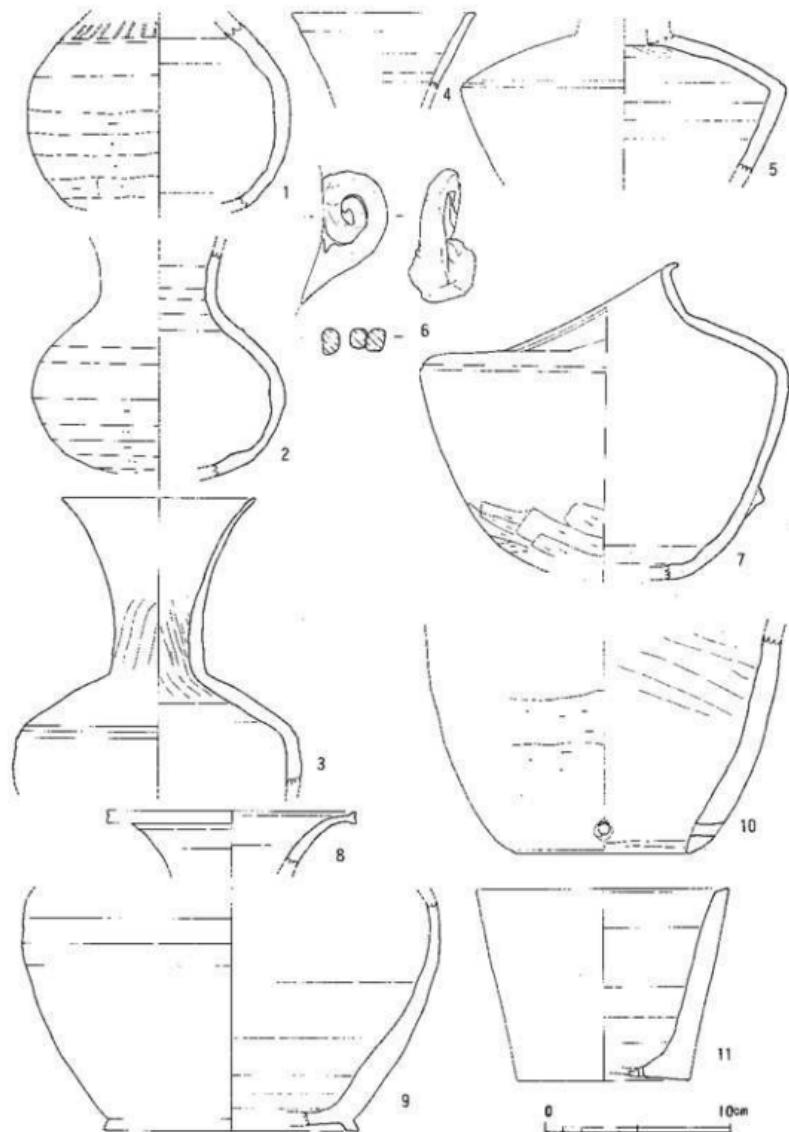
蓋坏（蓋）C類 10、12、13、15、16は擬宝珠をつぶした様な扁平なつまみを有しており、口縁端部の内面に短いかえりを持つ。蓋B類のかえりの位置に比べ、やや天井に寄っている。口径は13.7～14.6cmと小形のものである。12は天井部が丸く、つまみが大きなものである。

蓋坏（蓋）D類 17～26は天井部の外面に扁平なつまみを持ち、口縁端部が鳥の嘴状となる。17は器高が高く3.6cmを測る。21は端部の折り返しが弱く、丸くなっている。23は口縁端部に折り返しがなく、斜め外方へ伸びている。26は天井部が平坦で口縁端部が内側に向け伸びている。

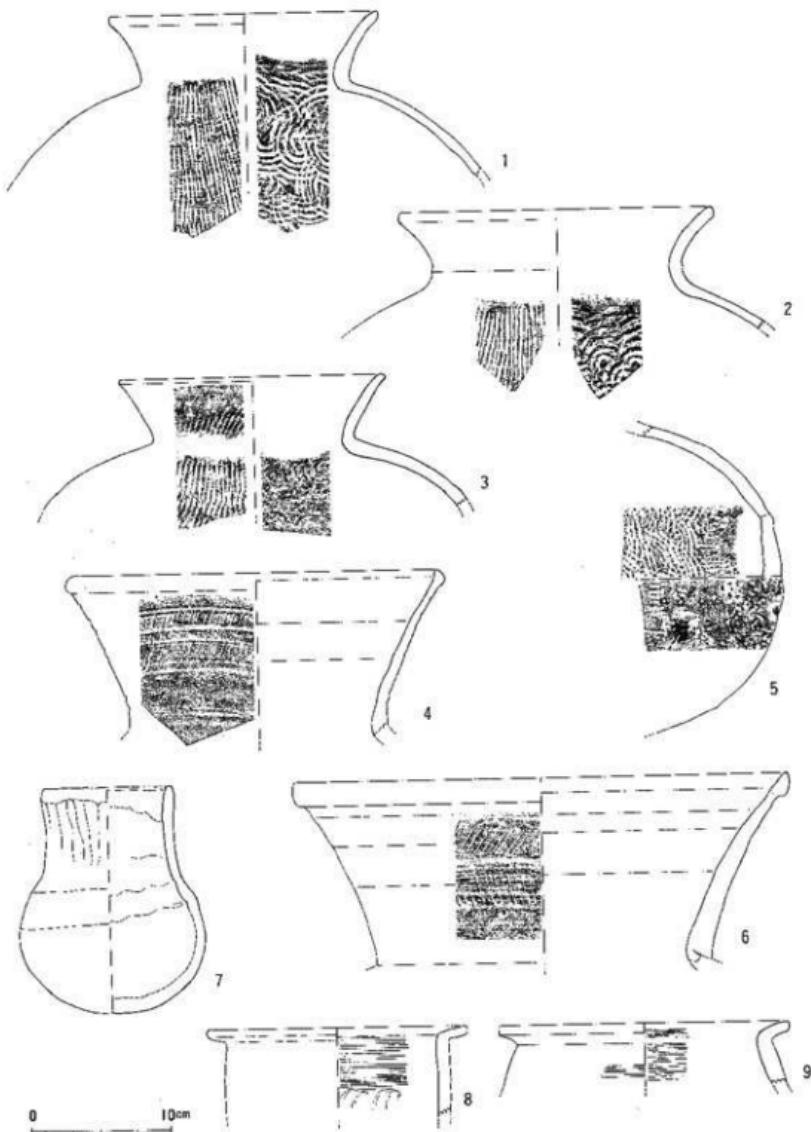
蓋坏（蓋）E類 28は天井部に輪状のつまみが付き、口縁端部が鳥の嘴状を呈している。30も天井部に輪状のつまみが付くと思われるかなり大きなものである。

その他の蓋 1は天井部の外面をヘラ削りの後にナデしており、口縁部に向け緩やかに広がっている。2は天井部に丸みを有しヘラ削りを行っている、口縁部は内湾し天井部との境に段を有している。14は天井部の外面に不正方向のヘラ削りの後に指頭によるナデを行っている。かなり大形の蓋である。27は耳の付く壺の蓋となるもので、一対の把手が付く。

蓋坏（身）A類 1～4は口径10～11.6cmと小形で、口縁部内側に返りを有し、4は口縁部の内



第55図 テラス出土須恵器実測図



第56図 テラス出土遺物実測図

側に蓋の口縁端部が溶着している。5は極めて小形の坏身で外面に釉がかかる。

蓋坏（身）C類 6～8は底部の外面をヘラ切りしており高台は付かない、体部は直線的で斜めに立ち上がる。

蓋坏（身）D類 9～18は高台の付く坏である。底部外面はヘラ切りにより切離し、高台は端部がやや広がり、斜め外方に向け広がる。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口径は13.6～16.1cm、器高3.8～4.7cmを測る。12は口縁部に蓋D類の口縁部が溶着しており、重ね焼きの状態が判るものである。

蓋坏（身）E類 19、20は高台が方形を呈しやや小さいもので、体部は上方に向けて直線的に立ち上がる。19は器高が高く、口縁端部に向け細くなっている。

その他の坏 21は高台の付かない坏で底部外面はヘラ切りの後にナデている。胎土も白っぽく、他の坏とは異なっている。23、24は細長い高台が付くもので、全体に器壁も薄くなっている。22は坏以外の器種の高台部と思われる。

高坏 1、2は口径が小さく体部は直線的に立ち上がる。3は体部の途中に段を有し、口縁端部が外反する。4は体部に丸味を有し、口縁端部が外反する。5は坏部に深さがあり、体部は外傾して立ち上がる。6は坏部の口径27.4cmと大きく、盤状を呈している。坏部の内面は同心円印きの後にナデしており、口縁端部に平坦面を有している。7は坏部の径が大きく、体部の途中で屈曲し口縁端部に至り稜線を有している。6、7共に脚部の長いものである。9～16は器高の大小はあるものの基本的に同様の形態を呈すものと思われる。これらの坏部は、底部が平底で体部が直線的に立ち上がる。坏部より脚部のほうが多少高い程度である。17～19は低脚の高坏である。

鼈 59～20は体部の円孔を欠くものの鼈と思われる。体部の上半に二条の沈線を入れ、その間にヘラ描きの沈線を縱方向に入れる。口縁部は細く、体部下半にはヘラ削りを施す。

短頸臺 21は口縁部が直立気味に立ち上り、体部の肩に沈線を一条入れている。

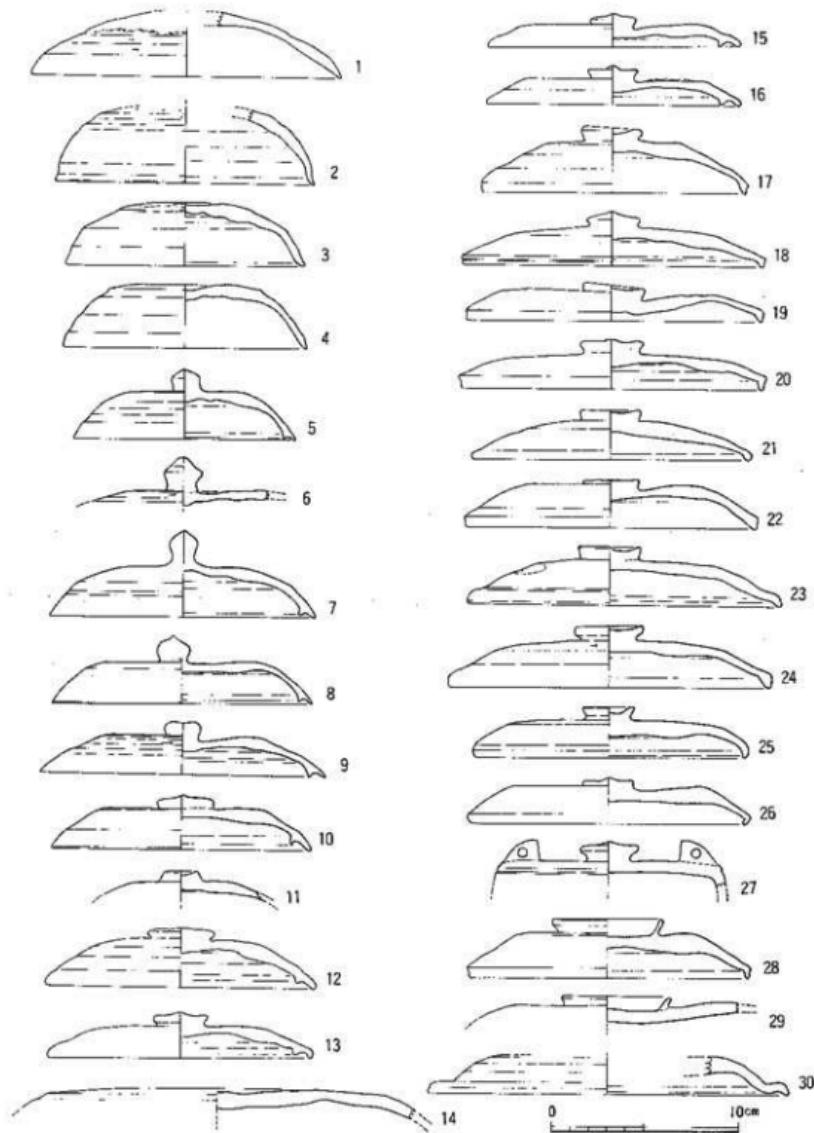
壺 1～4は長頸壺の口縁部でいずれも外面に一条の沈線が入っている。4は特に頸が長く、口縁部が外反している。5は壺の体部で肩部に一条の沈線が入る。6は壺の体部下半で高台を有している。8は壺の底部で、平底である。

鉢 口径19.6cmと体部から口縁部に向けかなり開き気味に立ち上がる。口縁端部に丸みを有し、内外面に釉がかかる。10は底部に円形の粘土盤が付く形態で、底部から刺突により孔が開けられている。14は大形のもので内外面に横ナデを施す。

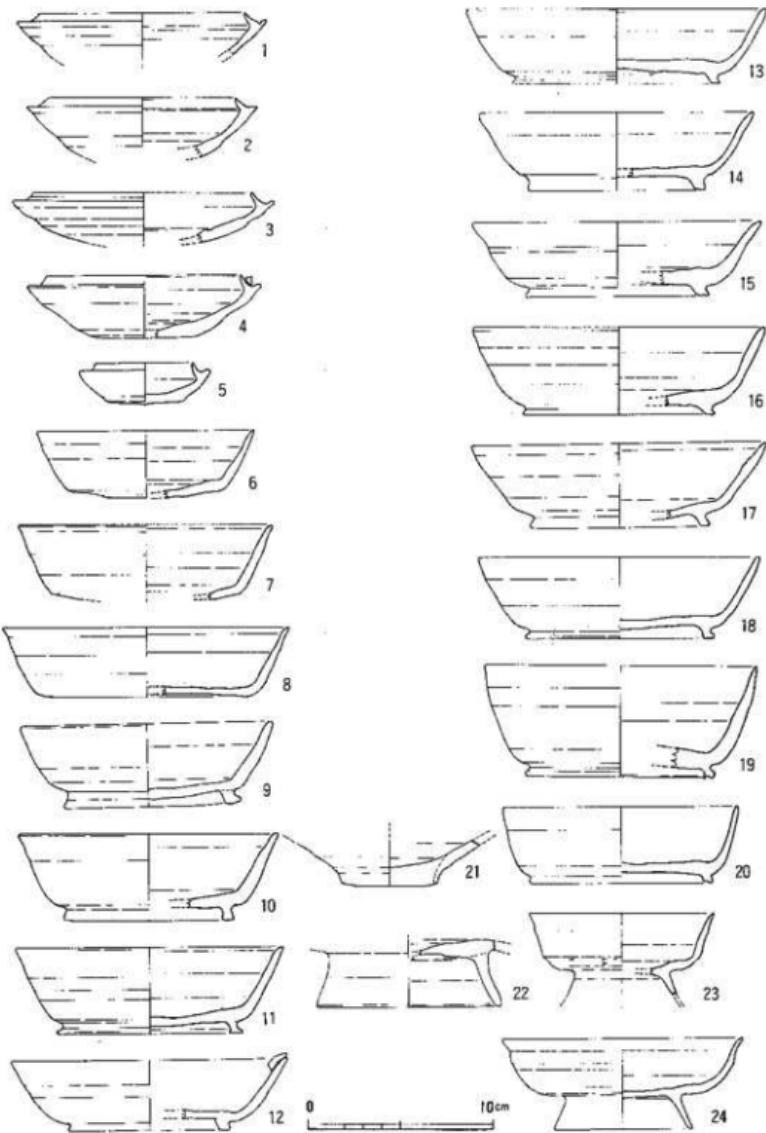
硯 11は円面硯で蓋坏の天井部外面を使用するものと思われる。

櫃 13は口縁部が「く」の字状になり、外面に平行印き、内面に同心円印きを入れる。

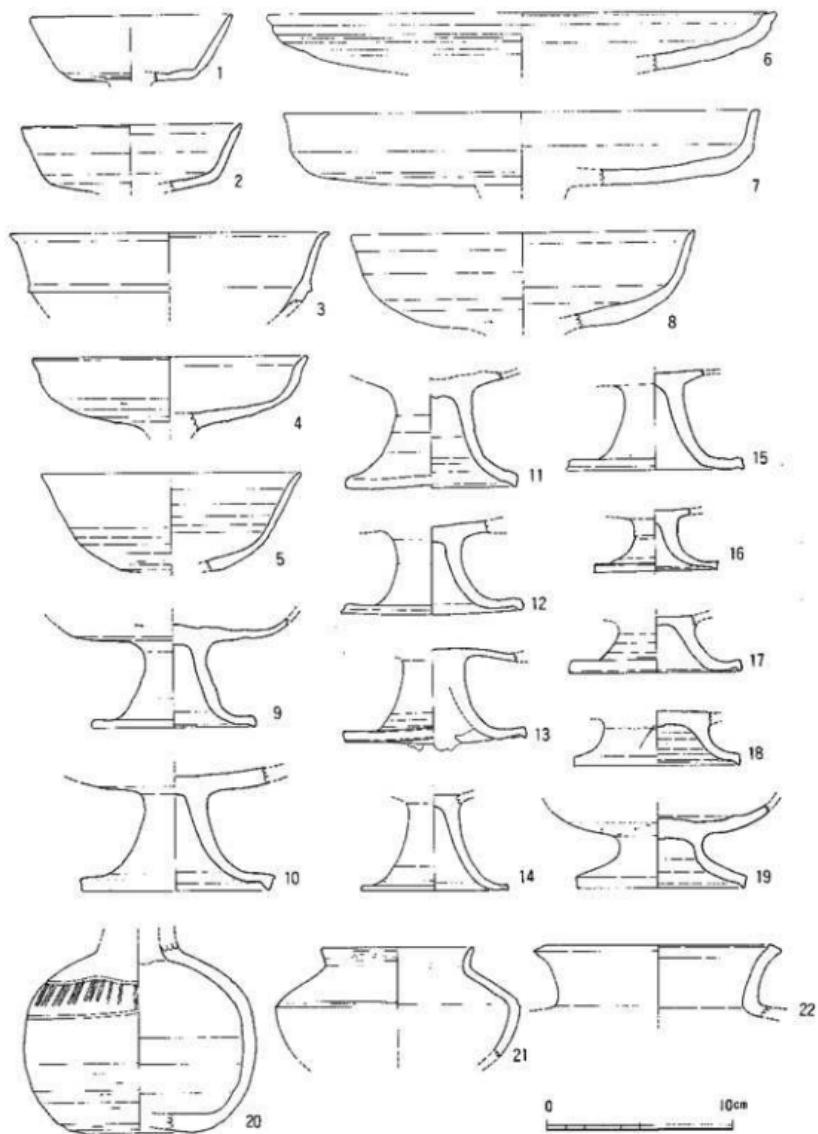
鉄鉢形土器 15は、口縁部端部が内湾し、底部が丸底である。



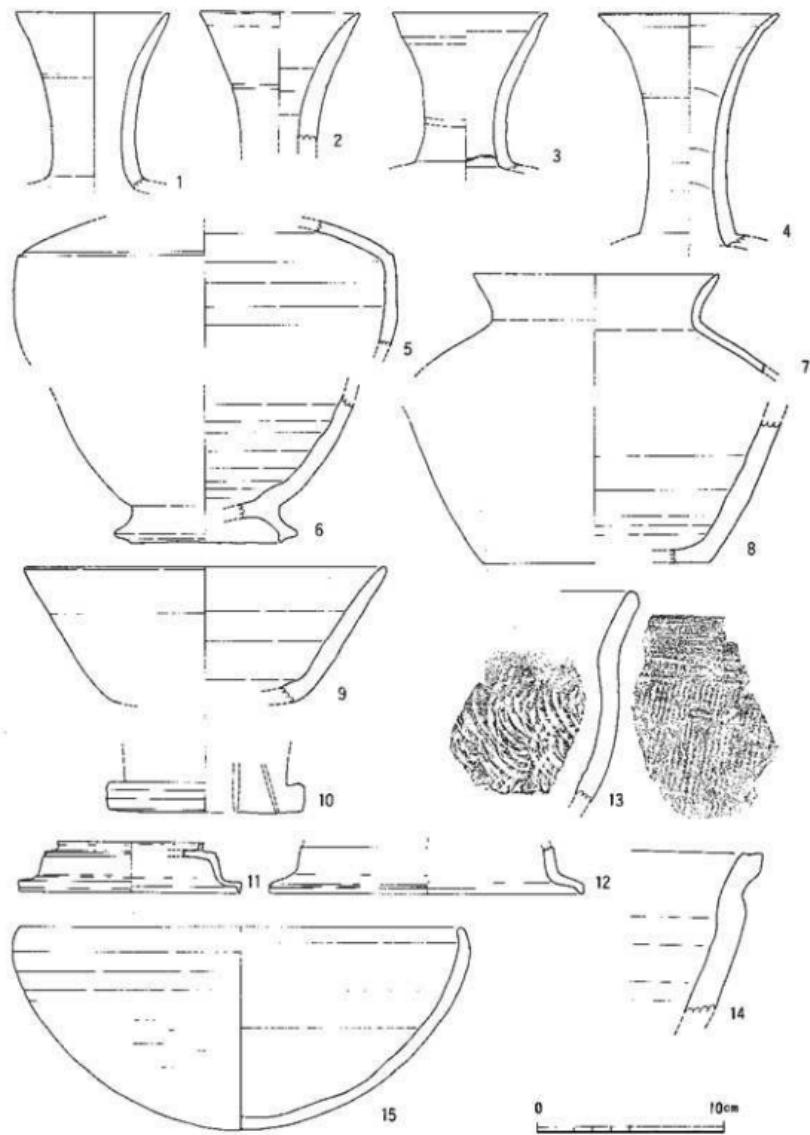
第57図 調査区北側盛土出土須恵器(杯、蓋)実測図(1)



第58図 調査区北側盛土出土須恵器実測図(2)



第59図 調査区北側盛土出土須恵器実測図(3)



第60図 調査区北側盛土出土須恵器実測図(4)

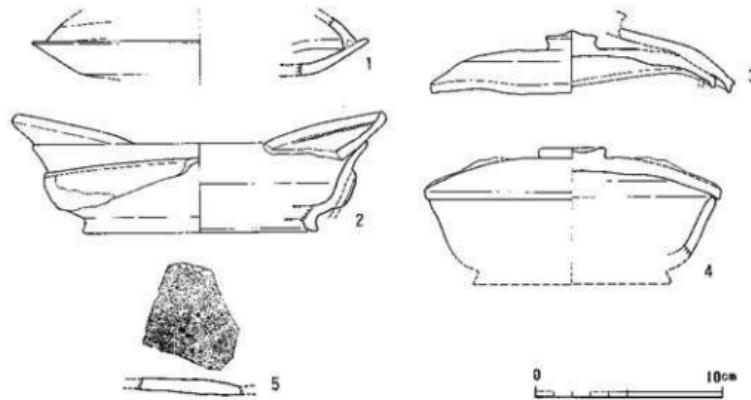
壺（第62図） 2、4は体部外面に細かい平行叩きを施す。3、5、6は口縁部外面に五条の節描波状文を三段入れ、端部に平坦面を有している。7、8は上下二段に一条の波状文を上下二段に入れる。9、10は幅広の波状文を上下二段に入れ、10はその下に刺突点文が入る。11は口縁部外面に4条の緩やかな曲線の波状文を上下二段に入る。15は器壁が3cmとかなり厚いものである。

重ね焼きの須恵器 61-1は壺Bの蓋と身が溶着したものである。2は壺D類の身に蓋の天井部側が溶着し、この上にもう一点壺が口縁部を下にして重なっている、身の体部にもう一点の口縁部が溶着している。3は壺D類の蓋に蓋が重なっており、蓋の内面に壺の口縁端部が溶着していた痕跡が残る。4は壺D類の身に蓋がかぶさったもので、壺のセット関係の良く判る資料である。5は蓋の内面にヘラ描の記号のようなものが刻まれている。

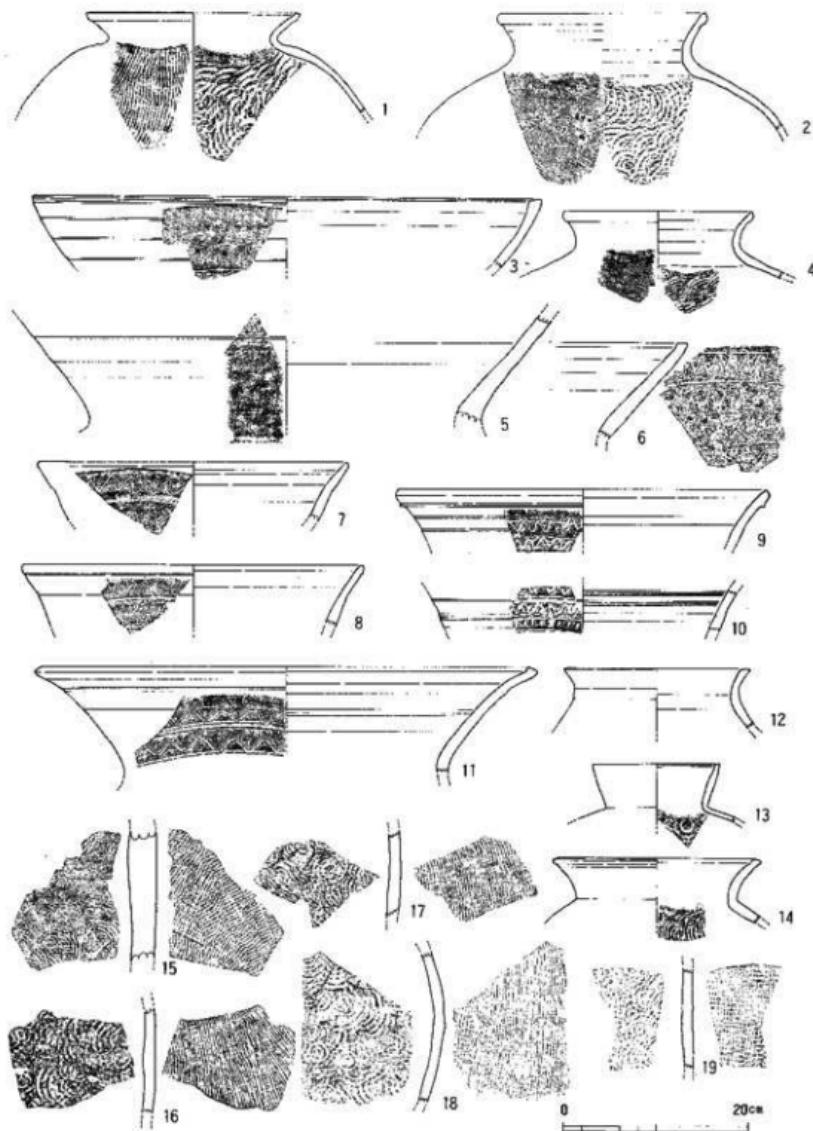
軒丸瓦（第63図—1、図版54）

北側テラスより単弁8葉蓮華文軒丸瓦が1点出土している。瓦当面の約2/5を欠くが、文様構成の判る資料である。残存部で瓦当厚約1.8cm、瓦当面径は約18cmに復元でき、外区に深い陰刻鋸齒文、内区に突線による単弁8葉を配し、一段高い中房には1+4の蓮子が置かれる。鋸齒文は、太い突線で表現され、個々の表現も整っておらず、雑な印象を受ける。8葉の蓮弁は、2重の突線で重弁を表現する。蓮弁間には、内外区境界の隈線から三角形文が伸びており、間弁の表現を簡略化したものと思える。この三角形文は、突線の二等辺三角形で表現されるが、1ヵ所のみは、垂線が表現されている。瓦筋は、使用による傷みがあり、瓦当面にわずかに木目が見える。

丸瓦取り付け部は、殆ど残存していないが、凹みを穿って丸瓦を差し込んだ後、補強粘土を当て



第63図 調査区北側盛土出土須恵器（溶着資料）



第62図 調査区北側盛土出土須恵器実測図

たものと思われる。取り付け部に施されるヘラによる傷は見られない。酸化炎焼成されており、やや軟質で、褐色を呈す。胎土中に1~2mm大の赤色の砂粒を含んでいる。

この瓦については、浜田市の下府廃寺に同文のものが知られており、同窓の可能性がある。また、同系統の瓦当文様は、大田市の天王平廃寺、那賀郡旭町の重富廃寺（重富遺跡）にみられる。

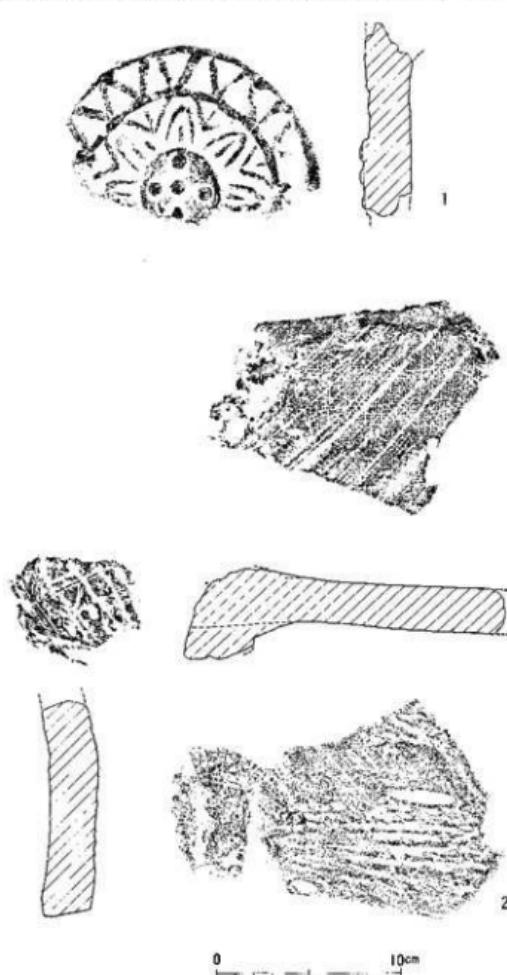
軒平瓦（第63図-2、図版54）

瓦当面を欠く小片で、窯跡内から出土した。本来の瓦当部分には、他の窓で整形した瓦当を接合するためのヘラによる傷が施されており、頸部は緩やかな傾斜を持つ段頸であったと考えられる。平瓦部は、凸面に太い縄目のタタキ痕、凹面に布目压痕・糸切り痕を未調整のまま残している。側部は、鉛直方向に切り落され、凹面で2面取りにケズリ調整される、後述する平瓦II類に分類されるものである。頸部は、平瓦部に直接貼り付けている。還元炎焼成されているが、やや軟質で、明褐色を呈す。軒丸瓦にみられた赤色の砂粒は見られず、白色の小砂粒を含んでいる。瓦当文様は不明である。

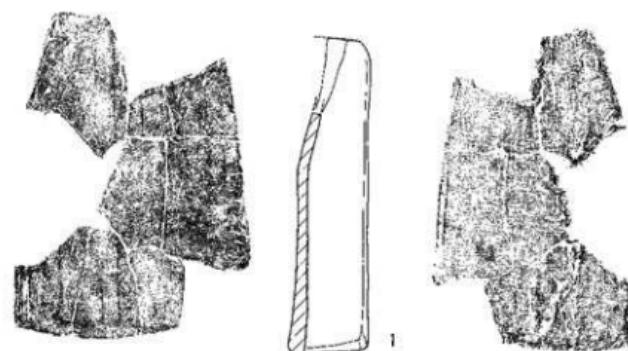
丸瓦（第64・65図、図版54）

丸瓦は、窯跡内を中心にコンテナ3箱分が出土しており、その内7点を図示した。端部の形状の判るものについては、行基式が大半を占めており、玉縁式と確認できる資料は5点しか見られなかった。

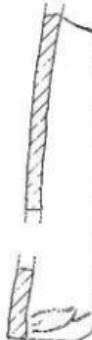
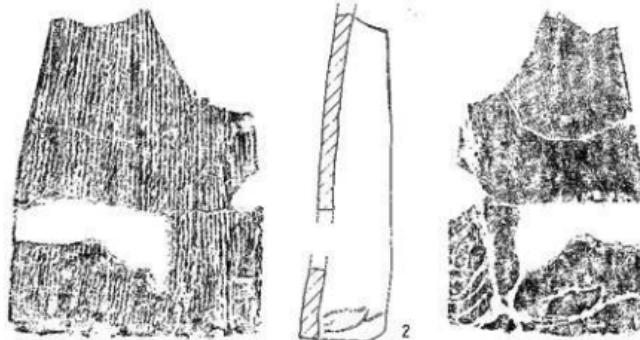
端部の形状と凸面の調整から3類



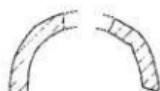
第63図 窯跡出土軒丸瓦・軒平瓦実測図



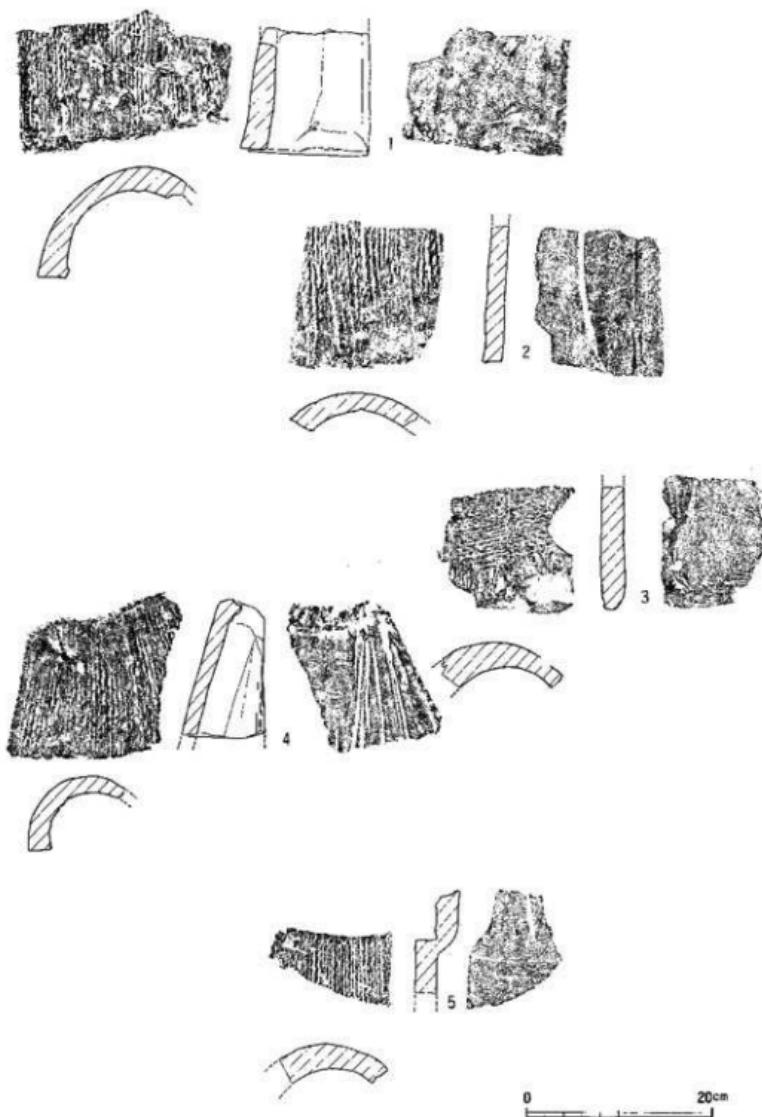
1



2



第64図 窯跡出土丸瓦実測図



第65図 烹跡出土丸瓦実測図

に分類できる。

丸瓦 I 類 (第64図-1) 凸面をヘラケズリにより調整する行基式丸瓦である。小型という印象を受けるもので、全長約34cmを測る。凸面には縦方向に非常に強いケズリが施されているほか、広端部にも大きく面取りが成されている。凹面には全面に布目圧痕が見られ、布の折れ目や紐状の圧痕も見られる。酸化炎焼成されており、胎土中に白色の微砂粒を含む。

この瓦は、出土遺物中からは1点しか確認できず、特殊な用途に使用されるものであろう。広端部側の面取りから、軒丸瓦の丸瓦部であった可能性がある。

丸瓦 II 類 (第64図-2・第65図-1~4) 行基式丸瓦の内、凸面のタタキ痕を未調整のものである。第64図-2で残存長34.5cmを測り、I類よりも大型である。凸面に縦方向の、やや細い繩目タタキを施す。還元炎焼成されるものが多く、胎土中に白色の砂粒を少量含む。第65図-4では、凸面に離れ砂を使用している。

第65図-3は横方向にタタキが見られるが、端部近くであり、例外的なものであろう。還元炎により焼成されている。

丸瓦 III 類 (第65図-4) 玉縁式丸瓦である。凸面に縦方向の繩目タタキを残しており、玉縁部が非常に短い。還元炎焼成されるがやや軟質で明灰色を呈し、白色の小砂粒をわずかに含む。

II・III類では、側部・端部の形状が似通っており、切断部を1面でケズリ調整するのみで、面取りは行わない。

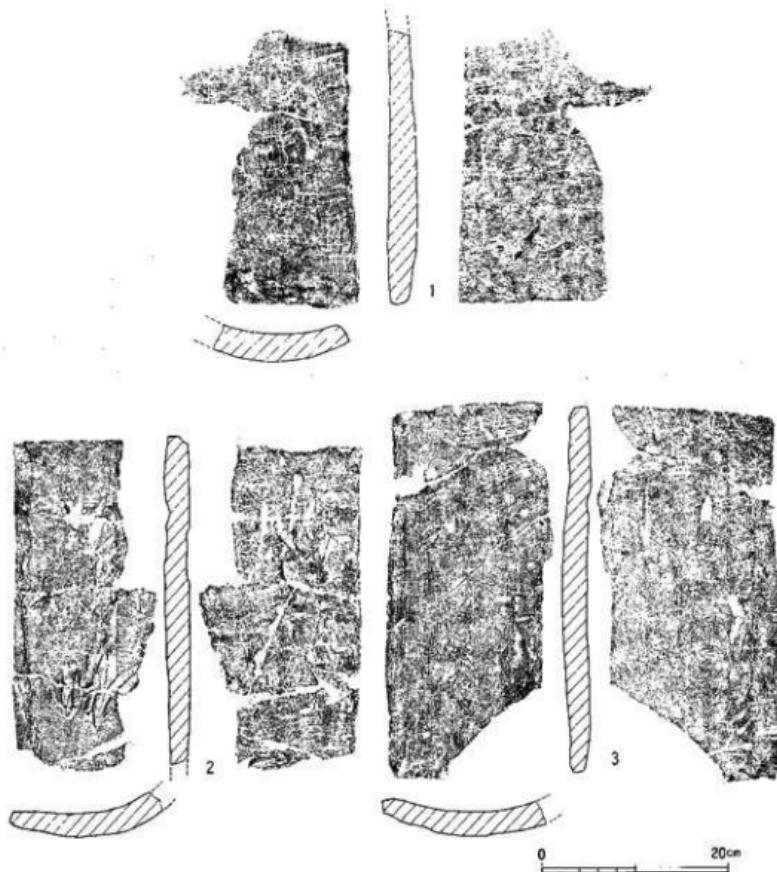
平瓦 (第66~72図、図版55~59)

平瓦は、窯跡内を中心にコンテナ約50箱分が出土しており、その数は丸瓦に対し異常に多い。平瓦の全てが凸面に繩目タタキを施すもので、平行・格子タタキは見られず、タタキ痕の二次調整も意図的には行われていない。側部の形状から2類に分類したところ、タタキ痕の差異もほぼ合致するものであった。

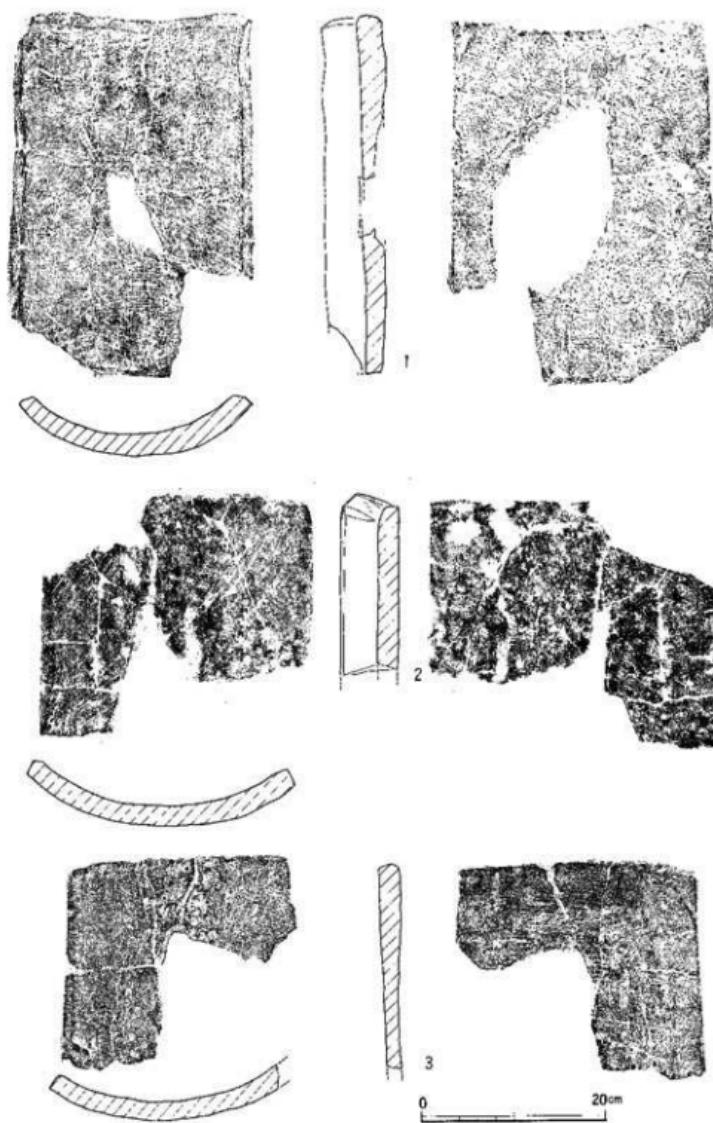
平瓦 I 類 (第66~68図) 側部断面が円周方向を向くもので、繩目タタキは横方向に施されるものが多い。第66図-2を除き、凸面に離れ砂を使用する。叩き締めがやや甘い印象が有り、粘土の継目で割れているものが多く、粘土の継目を強い指揮さえにより修正している資料(第68図-2等)が見られる。全形を推定できる資料では、全長約38cm、中央付近での幅約25cm、弧深約3.5cm、厚さ2.5cmを測る。酸化炎によりやや軟質に焼成され、褐色を呈す物が多い。白色の微砂粒をわずかに含む。側部断面は、円周方向を向くが、切断痕や布の継ぎ目、模骨痕等は見られない。粘土板の継ぎ目が見られるが、桶巻造りに見られる粘土帯が一周する時の継ぎ目とは異なり、小さな四角形の継ぎ当て状に見え、一枚造り成形による不都合部分の補修と思われる。

平瓦 II 類 (第69~72図) 側部断面が鉛直方向を向くもので、繩目タタキを縦方向を中心に行す

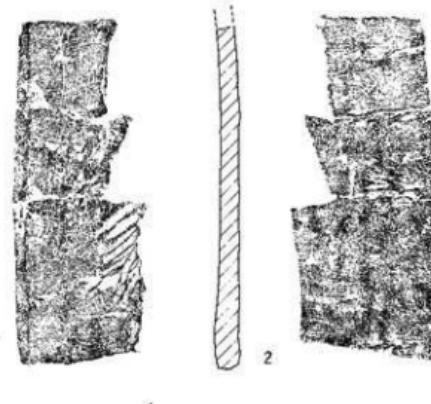
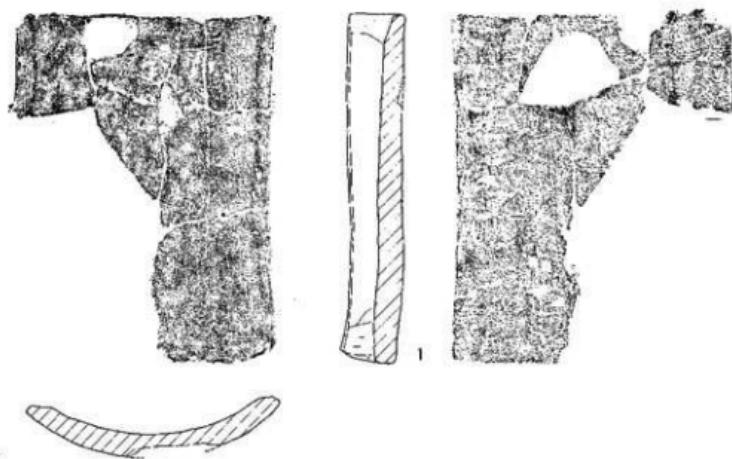
ものである。叩き締めは十分でないため、凹面だけでなく、凸面にも糸切り痕を残すものが多い。繩目タタキは基本的に縦方向としているが、端部付近では、やや斜めに傾くことが多いようだ。I類と異なり、焼成にはらつきが大きく、酸化炎焼成のものから還元炎焼成のものまで多種ある。小砂粒を多く含む。第69図-1は、ほぼ完形に復元出来るもので、全長約39cm、広端部幅約28cm、狭端部幅約25cm、中央付近での弧深約4cm、中央付近での厚さ約2.5cmを測る。I類に比べやや幅が広



第66図 窯跡出土平瓦実測図

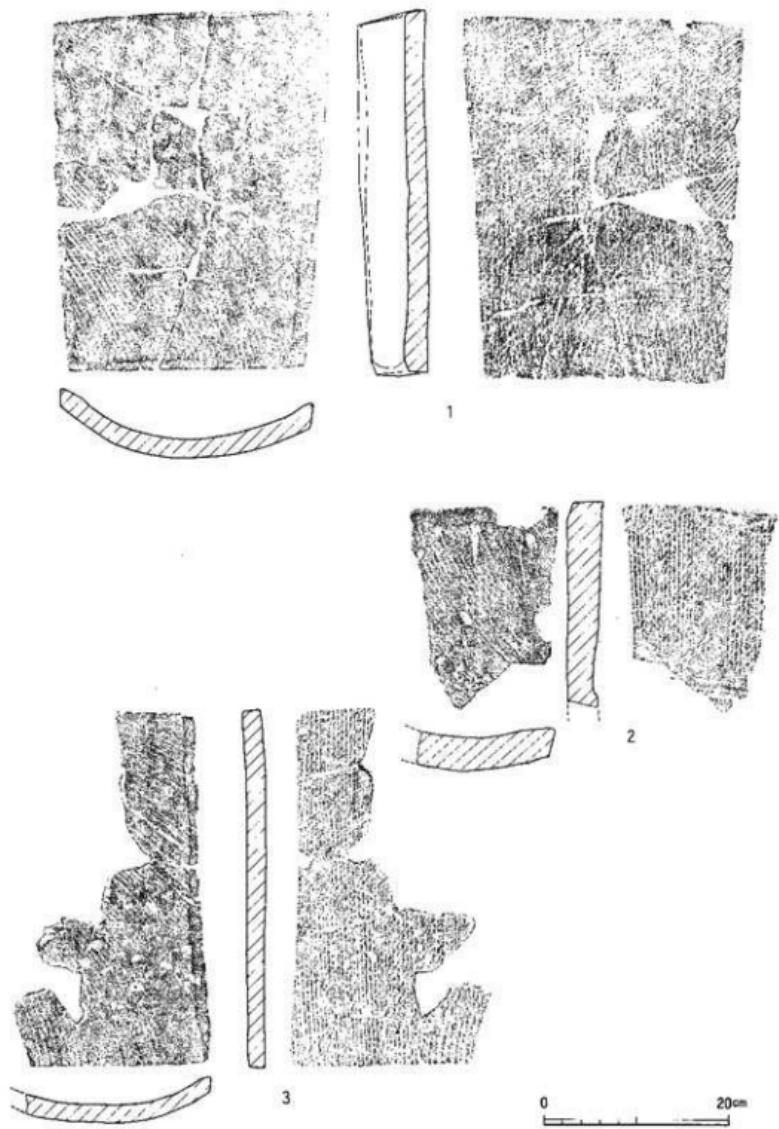


第67図 窯跡出土平瓦実測図

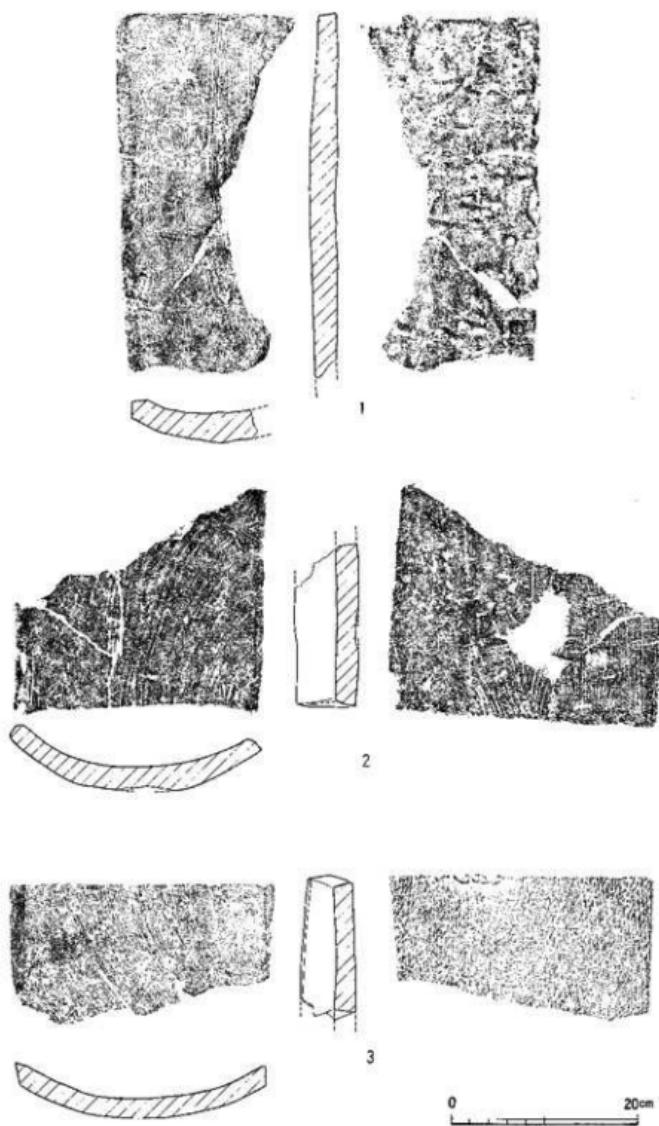


0 20cm

第68図 窯跡出土平瓦実測図



第69図 黒跡出土平瓦実測図

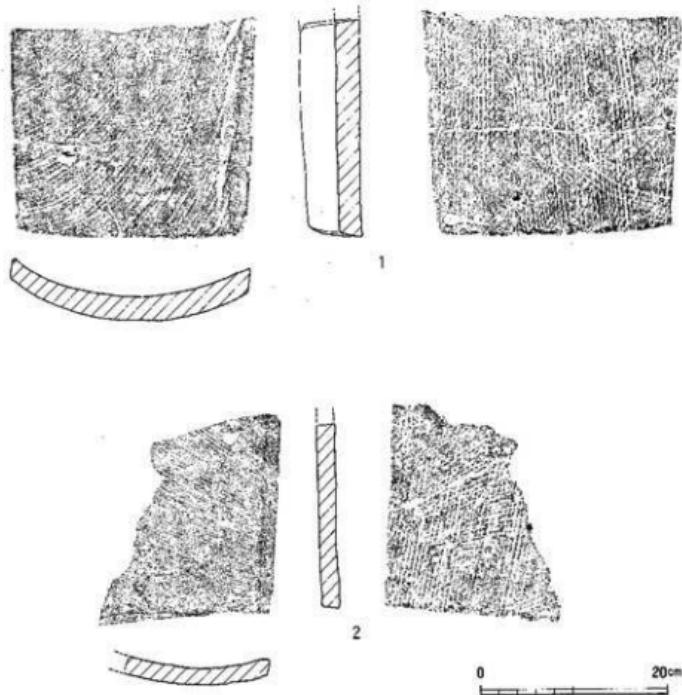


第70図 窯跡出土平瓦実測図

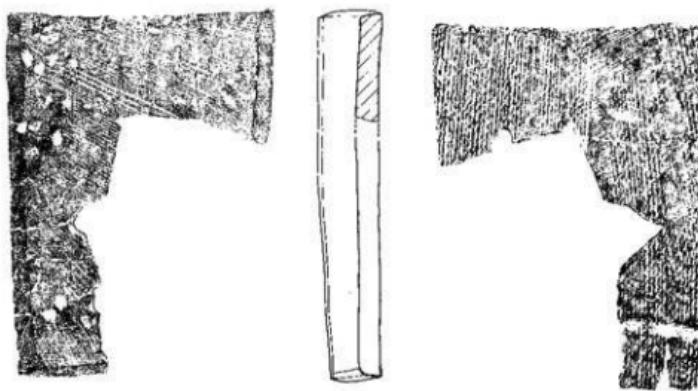
いため、ほぼ同様の弧深を測るにもかかわらず湾曲が緩い印象がある。

軒平瓦・丸瓦・平瓦については、基本的には同様の胎土を使用しており、軒丸瓦に見られた赤色の砂粒は見られない。形状や焼成には違いが見られるが、比較的近い時期に製作されたものであろう。また、後述する鷲尾には、軒丸瓦と同様の赤色の砂粒が含まれており、軒丸瓦と同時期に製作されたものと考えられる。

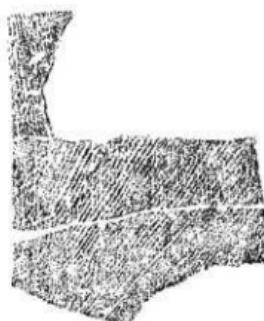
鷲尾（第73図、図版60・61）



第71図 畠跡出土平瓦実測図



1



2

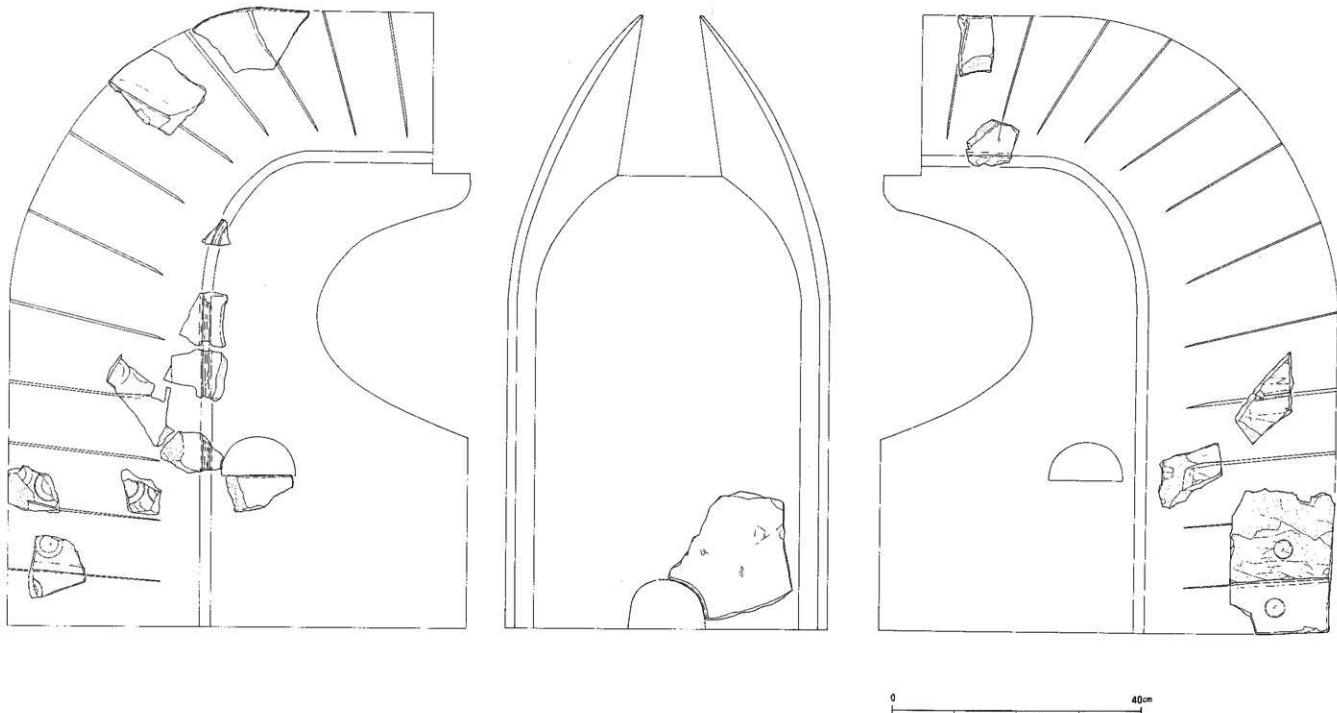


第72図 窯跡出土平瓦実測図

第1床面を中心に瓦製鶴尾片が出土している。破片の総量はコンテナ3箱分以上に上ったが、その量は1個体に満たない。使用部位の判る破片も少なかったため、全体の復元は困難であった。

幅30cm程の鱗部は、正規型に削り出されており、内面側の逆規型は省略されている。縁帶は高さ約2cm、幅約2cmの断面方形を呈し、器面に後から貼り付けられたもので、埴輪のたがを思わせるものである。腹部下端に半円形刺り形を持ち、他の破片から、複数の透し穴を持つことが判る。脊稜と考えられる破片は見られない。鱗部前端の形状は不明である。鱗部に連珠文を表すと思われるコンパス文が見られるが、部位の判る破片では、下方に集中しており、上方では省略される様である。また、コンパス文は、左側面では1重であるのに対し、右側面では2重に描かれている。器面の調整は極めて乱雑で、ケズリとナデが不整方向に施され、それぞれ規則性を持たない。焼成も悪く、還元炎と高温で焼き歪みを起している箇所と、酸化炎による低温で焼成不良になっている箇所が隣接して混在する。同様の鶴尾の破片は、浜田市の下府廃寺からも出土している。

県内での鶴尾の出土は、下府廃寺の他、松江市の来美廃寺で2種類の鶴尾の小片が知られているのみである。^(註1)全面発掘された出雲国分寺では、鬼面文鬼板瓦が使用されており、^(註2)8世紀中頃以降の県内の寺院では、鶴尾の使用は少なかったものと思われる。山陰地方では、伯耆・出雲を中心^(註3)に特徴的な鶴尾が知られているが、久本奥窯跡・下府廃寺出土のものとは異なる。



第73図 穀路、テラス、北側斜面出土鷲尾復元想像図

小 結

窯跡の構造

窯の位置が標高62～65m のかなり高い丘陵斜面で、尾根頂部に近い場所である。窯の掘り込まれた土層が花崗岩であり、地下式の登り窯を築くためにこの土質を選んだものと思われる。

窯は、大別すると3次に渡って操業されており、一次床面においては須恵器、鶴尾が焼かれている。鶴尾の破片は窯の奥の平坦な床面に貼り付くように出土しており、鶴尾のような大型品を焼くために床を平坦に加工したものと思われる。一次床面の下部には幅0.9m の溝状の落ち込みがあり焚口まで続いている。この溝は埋められて床面としており、床面を乾燥させるための構造と思われる。二次床面、三次床面とも焚口から煙道に向かって傾斜があり、瓦焼成のために床面を加工しなおしたものと思われる。

窯の西側にはテラスが造られており、柱穴の小さな簡単な構造の掘建柱建物跡が築かれている。この建物からは、土師器壺、壺も出土しており、作業場としての施設と考えられる。テラスの窯寄りでは、製品の選別が行なわれ、不良品が斜面に廃棄されていた。作業場と思われる住居跡は、益田市本片子遺跡においても見られる。

石見地方における窯跡の調査は、古墳時代中期の浜田市日脚窯跡、後期の益田市芝窯跡、中塚窯跡^(註6)、奈良時代は瓦陶兼用窯の益田市本片子窯跡、瓦窯跡の旭町重富遺跡がある。^(註7) 本片子遺跡は、瓦陶兼用の登り窯で久本奥窯跡と時期的に重なっている。本片子の方が床面の傾斜が急で、幅がやや広いものである。重富瓦窯跡は、県内唯一の瓦専用の登り窯である。久本奥窯跡は、重富、本片子に比べやや細長い形態であるが、これは操業開始の時期が2者に比べやや古いためと思われる。

須恵器

石見地方における須恵器の編年は、古墳時代から奈良時代にかけては日脚遺跡、奈良時代から平安時代にかけては益田市大益遺跡^(註8)においてなされている。今回出土した須恵器はその両者の間を埋める時期の資料でI～VII期に分けられる。

I期 壱蓋の天井部外面に回転ヘラケズギが施されている。量的には極めて少ない出土量である。

II期（A類） 壱蓋、身の外面をヘラ切り調整しており、口径が小型化している。I期、II期とも窯跡本体からは出土しておらず、灰原とテラスから出土している。

III期（B類） 壱蓋の天井部に乳房状のつまみを有し、返りが付くものである。身は、平底で、口径が小形化する時期である。III期は2種類あり、もう1種類の方はやや大型であり、器高が低くなっている。この時期以降の製品が窯内から出土している。

IV期（C類） 坯蓋C類、D類の一部からなる。蓋の口径14cmを測り、返りの付く場所が口縁端部よりやや内側に寄っている。坯身は、底部へラ切りで口縁部に向か直線的に立ち上がる。

坯蓋D類は口径がC類と同規模で、天井部に付くつまみは中央を指頭により押し凹めている。

V期（D類） 坯蓋身の口径がやや大きくなり器高が低く、蓋の口縁部が鳥の嘴状になっている。

坯身の底部には高台が付き、端部がやや広がっている。

VI期（E類） 坯蓋の天井部には輪状つまみが坯、身は体部が直線的に立上り、高台は細めで下方へ向けて立ち上がる。

VII期 底部をヘラ切りにより切離し、体部は直線的に開き気味に立ち上がっている。蓋は見られず、皿がある。

須恵器の時期は、IV期の高杯が福岡県牛頭窯跡出土のものに類似しており7世紀後半と考えられる。V期の杯と同様のものが益田市大益遺跡でI期とされており、8世紀前半とされている。VII期は、大益遺跡III期の古い段階、日脚遺跡VII期と同時期で8世紀後半と考えられる。VII期は、器種として蓋が無く、半田浜西遺跡SD-04出土のものより先行する形態のものである半田浜西遺跡出土の須恵器は、底部に糸切り痕を有し、併存する灰釉陶器より9世紀後半で、VII期より古い段階のものと思われる。底部を糸切りにより切り離す手法はこの時期に入ったもので、出雲より後の時期に採用される。須恵器・甕（第56-4、6）は、口縁部外面にヘラ描によるキザミ状の施文がみられる。この施文方法は、益田市芝窯跡出土の資料に共通するものである。

粘土塊（図版62上）は、木の枝と葉が付いた状態のものに粘土を貼り付け焼いたものと思われるものである。焚口から焼成室にかけて出土したものであり、焼成も生焼けに近い状態のもので、第三次床面において瓦と併せて出土している。

窯跡の操業年代

窯跡の第一次床面から7世紀後半～8世紀後半の須恵器が出土し、第三次床面からは瓦が多量に出土している。また、テラス及び灰原からは6世紀後半までさかのぼるものもある。今回調査した窯跡は、操業開始が7世紀後半と考えられ、瓦の年代は8世紀後半かその直後と思われ、約1世紀に渡って継続的に操業されたものと思われる。また、6世紀後半～7世紀前半の資料については付近に別の窯跡の存在も想定される。

I	
II	
III	
IV	
V	
VI	
VII	

久本奥窯跡出土須恵器編年表

軒丸瓦について 久本奥窯跡から出土した軒丸瓦は、浜田市下府廃寺跡出土第IV類軒丸瓦と同文である。この、外区に大きな鋸歯文を持つ瓦は、那賀郡旭町の重富廃寺(重富遺跡)、大田市の天王平廃寺で同様のものがあり、石見地方一円に広がる特徴的な文様として知られている。下府廃寺(久本奥窯跡)出土瓦と他の2遺跡出土瓦を比較した場合、天王平廃寺のものでは蓮弁の形状、間弁が入る点、中房の蓮子が $1+8$ となる点で、重富廃寺のものでは、外区の鋸歯文が2重に施る点で異なる。上記の差異より、一般的には、天王平廃寺のものを祖形に、重富廃寺のもの、下府廃寺ものの順に形式変化していくと考えられている他、天王平廃寺のものの差異が大きいため、これだけを別系統とする考えもある。

那賀郡旭町の重富遺跡では、1990年に瓦専用の地下式窯窓の調査が行われており、窯体内より多量の瓦を検出している。重富遺跡出土瓦には、平瓦凸面を叩き締めずハケメ調整を行う、丸瓦の粘土円筒半裁に糸切りを使用する、瓦当文様を持つ軒平瓦が存在しない等の特徴が見られる。また、大田市の天王平廃寺でも平瓦凸面にハケメ調整を施す、軒平瓦が存在しない等の共通点が見られる。久本奥窯跡と同文の軒丸瓦を出土する下府廃寺でも第IV類軒丸瓦に組み合う軒平瓦が確認されておらず、平瓦に凸面ハケメ調整を施すものがあることから、これらの瓦が同一系譜上に有り、同様の組み合わせ(瓦当文様を持つ軒平瓦を伴わず、平瓦凸面をハケメ調整する)を持つ可能性が高いといえる。凸面をハケメ調整する平瓦は、益田市の本片子遺跡の窯跡の調査でも確認されている。本片子遺跡では、軒瓦が確認されていないが、瓦陶兼業窯であり、瓦の調整が須恵器の調整に共通すると思われることから、須恵器工人の影響が強いと考えられている。

軒丸瓦を出土しない本片子遺跡での年代観は押し戻りがたいが、天王平廃寺・重富廃寺・下府廃寺の軒丸瓦については、同一系譜上にあることは明らかであり、その文様から、天王平廃寺を祖形に重富廃寺、下府廃寺の順に退化していくものと推定できる。

これらの瓦の祖形については、備中日畠廃寺とする考え方がある。日畠廃寺で見られる軒丸瓦は、八葉重弁蓮華文の周囲に二重の鋸歯文帯を施せざる間にその間に珠文帯を配す華やかなもので、「吉備式軒丸瓦」と呼ばれている。この瓦は吉備地方の白鳳寺院に分布し、二重弧文軒平瓦を伴っている。この軒丸瓦から、珠文帯を省略すると、天王平廃寺・重富廃寺の軒丸瓦とよく似ており、唐草文を持つ軒平瓦を伴わないなどの共通点も見られるが、石見地方でのこれらの瓦の最大の特徴は、平瓦凸面のハケメ調整であり、この特徴を備えて、初めて系譜関係を論証できるものと考えたい。

久本奥窯跡出土軒丸瓦の年代観については、鶴尾の出土面と須恵器の関係から、7世紀後半代から8世紀初頭の間に収まるものと思われる。この年代観では、下府廃寺や重富遺跡での年代観と矛盾が生じることになるが、重富遺跡では、窯跡内からの須恵器の出土ではなく、下府廃寺での年代観も重富遺跡に拠っていることから、検討の余地があるものと思われる。

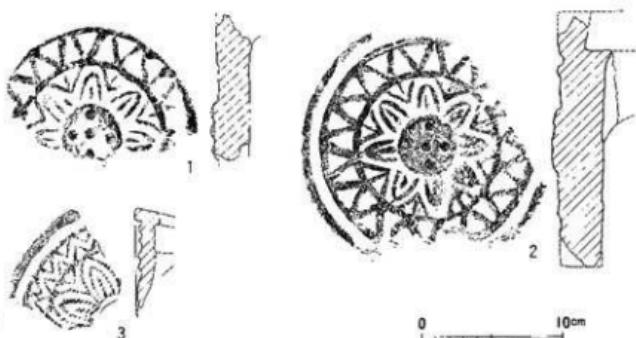
丸瓦・平瓦について 久本奥窯跡出土瓦は、繩目タタキを使用した平瓦一枚造り技法による成形で、離れ砂を多用し、窯窓による還元炎焼成を意識する等の特徴が有るが、その中でも最も特徴的な点は、丸瓦凸面のタタキ痕を消さない点である。県内の寺院跡・窯跡出土資料では、丸瓦凸面は、ナデもしくはケズリによりタタキ痕を調整するものが殆どで、多少タタキ痕を残しても、まったくの未調整という資料は見当らない。下府廃寺や下府廃寺と同系統にあると考えられる天王平廃寺・重富遺跡・本片子遺跡でも見る事ができないことから、久本奥窯跡出土の軒丸瓦以外の瓦は、下府廃寺には供給していない可能性が高い。丸瓦凸面のタタキ痕を調整しない手法は、九州地方では一般的であり、遠方との交流の可能性も意識せざるを得ない。

久本奥窯跡出土瓦は、当初、下府廃寺との関連を考えていたが、丸瓦の特徴からそれ以外の可能性を考えざるを得なくなった。平瓦についても、下府廃寺で見られるものは、久本奥窯跡出土平瓦より小さい印象があり、久本奥窯跡で生産した瓦を使用したとは思えない。また、窯が窯窓構造でありながら、離れ砂を使用する一枚造り成形を行う等の過渡期的状況が見られる。以上の事から久本奥窯跡で生産した瓦の供給先は、現在の知識では存在しないこととなり、江津市周辺域での寺院・官衙の存在が推定される。

離れ砂を使用した平瓦一枚造りは、平窯の技術と共に、国分寺創建に伴い地方に伝播されたと考えられる。久本奥窯跡の場合、登り窯（窯窓）で焼成しており、技術的過渡期にあったか、寺院・官衙の造営を急ぐ理由があったものと思われる。こうした状況は、8世紀中頃から後半の比較的早い段階での事と考えられるが、瓦の焼成面は、須恵器の焼成面を埋めて造成しており、須恵器の年代観から8世紀後半を越らない。

鶴尾について 鶴

尾は、前述のとおり、7世紀後半から8世紀初頭のものと考えられる。下府廃寺以外での鶴尾・鬼板瓦の存在は石見では知られていないが、出雲での例を見ると、比較的古い造営と考えられる来美庵



第74図 久本奥窯跡(1)、下府廃寺(2)、重富廃寺(3)出土軒丸瓦

寺で鷲尾が見られ、8世紀中頃以降の造営と考えられる出雲国分寺においては、鬼板瓦が使用されている。軒丸瓦・鷲尾が下府廃寺に供給されているものとすると、下府廃寺では、この軒丸瓦・鷲尾は創建時か、その後に使用されたと考えられる。

註1 内田律雄『第4回 出雲古代史研究会 発表資料』1993年

2 地方史研究所編『出雲・隠岐』1963年

『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会1975年

出雲国分寺関係では、鬼板瓦は多く紹介されているが、鷲尾は知られていない。また、周辺の中竹矢遺跡・才ノ畔遺跡でも鷲尾は見られず、鬼板瓦しか出土していない。

3 前島己基「山陰地方の初期造寺活動の一側面」「山陰考古学の諸問題」1986年

4 益田市教育委員会『本方子遺跡・木原古墳』1982年

5 島根県教育委員会『日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』-日脚遺跡-1985年

6 大川清・田中義昭・西垣丹三「島根県益田市西平原窯跡」(『古代』29・30合併号)1958年

7 島根県教育委員会『中国横断道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』1992年

8 島根県教育委員会『石見空港予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』-大益遺跡-1992年

9 福岡県教育委員会『福岡県文化財調査報告書』-牛頭窯跡群II-1989年

10 浜田市教育委員会『下府廃寺跡』1993年

11 7に同じ

12 島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財発掘調査報告書 第II集』1970年

13 10に同じ 間弁の表現が、天王平廃寺では蓮弁の形状で表現されているが、下府廃寺・重富廃寺では、三角形の突線で表現される。

14 註1に同じ

15 註4に同じ

16 註3に同じ

理 化 学 的 分 析

久本奥窯跡と建物跡焼土面の地磁気年代

島根大学理学部 時枝 克安

島根職業能力開発短期大学校 伊藤 明

久本奥窯跡と建物跡焼土面の熱残留磁気を測定し西南日本の地磁気永年変化と比較して地磁気年代を求めた。その結果、窯の最下床面操業年代として A.D.715±15、窯の最終操業年代として A.D.780±15を得た。二つの年代の分離は、最下床面上の厚い埋土が上部からの熱を遮断したため可能になった。この窯の操業期間は約65年と推定できる。また、建物跡焼土面の最終焼成年代として A.D.605±15の年代値を得た。これらの地磁気年代は出土した土器の年代と整合している。以下に、年代推定の経過について述べる。

1 年代測定の仕組と問題点

地磁気は一定ではなく種々の原因による長短の周期をもつ変動をしているが、これらの変動の中でも時間が10年以上経過してはじめて顕著になるような緩慢な変動を地磁気永年変化と呼んでいる。地磁気年代測定法で時計の機能をはたしているのはこの地磁気永年変化であり、年代を目盛った永年変化曲線（標準曲線）を使用して、過去の地磁気の方向から年代を読み取る。

しかし、たとえば、ある須恵器窯の年代を知るために、窯が使用されていたときの地磁気の方向がどこかに記録されており、それを測定できなければならない。実は、窯の操業時の地磁気の方向は焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代の推定手順を述べると、まず、窯の焼土の熱残留磁気を測定し、焼土が最終加熱されたときの地磁気の方向を求める。そして、この方向を標準曲線と比較して、曲線につけられた年代目盛りを読みとることになる。

地磁気中で粘土が焼けると、焼土は磁鉄鉱(Fe_3O_4)等を担い手として熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方向は焼成時の地磁気の方向に一致し、しかも非常に安定であり、 Fe_3O_4 のキュリー温度(575度C)以上に再加熱されないかぎり数万以上年代が経過しても変化しない。焼土は、言はば、地磁気の化石であり、焼土が最後に加熱されたときの地磁気の方向を正しく記憶していることになる。それゆえ、年代既知の焼土を利用して、その熱残留磁気から過去の地磁気の方向が年代の推移とともにどのように変化したかを確立しておけば、このグラフを時計として、遺物を伴わない

焼土の最終焼成年代を推定できる。この時計では地磁気の方向が針に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の針の位置を記憶していることになる。

日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線が詳細に測定されているので、地磁気年代測定法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている¹⁾。地磁気年代測定法の詳細については中島・夏原による解説が参考になる²⁾。

次に、地磁気年代測定法の問題点について述べると、第一に、地磁気は時間だけでなく場所によつても変化するので、地域によっては、そこで地磁気永年変化曲線の形が西南日本のものとかなり相違していることが挙げられる。ある焼土の地磁気年代を求めるには、厳密には、焼土のある場所の地磁気永年変化曲線と焼土の熱残留磁気を比較しなければならない。西南日本の標準曲線との相違が無視できるときにはこれを代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と残留磁気の方向を比較する必要がある。しかし、島根県内では、多数例について、広岡による標準曲線から求めた地磁気年代と考古学的年代が整合しているのでこの問題はない。

第二に、地磁気年代は地磁気変動という物理現象を通じてその値を推定するので土器編年に左右されないと思われるがちであるが、そうではなく、双方の年代は直接に相互依存をしている。すなわち、古記録等で確認されている少數の年代定点をのぞくと、標準曲線上のほとんどの年代日盛りは考古学の土器編年体系を参照して決められているのが実状である。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から離れた値は土器年代の影響を強く受けており、もし、土器編年に改訂があれば、それに伴って、標準曲線上の年代日盛りも修正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代はこのような相互依存から独立できるが、現状では年代の分かつた焼土が少ないのでやむを得ない。しかし、地磁気年代測定法は、地磁気を媒介とする対比のおかげで、焼土跡に遺物がない場合でも有効である点、相互に隔絶した土器編年を対比できる点で独自の性格をもっている。

2 遺跡の概要と試料

久本奥遺跡の須恵器・瓦を焼いた窯跡1基および建物跡焼土面1基から地磁気年代を推定するための定方位試料を表1のように採取した。遺構からの出土遺物としては、窯の内部から7C末-8C、8C前半、および、8C後半の3時期の須恵器が、灰原から古墳時代、奈良時代および平安時代の土器片と奈良時代の軒丸瓦が出土している。また、他に、7C前半の土器片が建物跡内とその下方斜面に流入しているのが確認されている。

窯には3枚の床面が認められた。最下床面は窯尻で傾斜をえてほぼ水平になっているが、窯の改築時、上部床面は全体が一様に傾斜するように作られている。そのため、窯尻では最下床面と中

間床面の間隔が埋土のため広くなっているが、中間床面と最上床面の間隔は全体にわたって狭い。

表1において、(a)の試料は窯尻最下床面の水平部から、(b)と(c)の試料は水平な最下床面が傾斜するあたりから、また、(d)と(e)は3枚の床面が同様に傾斜し相互の間隔が狭くなっているところから採取されている。なお、定方位試料の採取方法は、焼土塊を動かぬように削りだし、この上に樹脂製小箱(24×24×24mm)をかぶせて隙間を石膏で埋め、小箱上面の方位をクリノコンパスで測定する仕方をとっている。

表1 定方位試料採取状況

遺構	採取位置	床面	個数	備考
(a) 窯跡	窯尻最下床面水平部	最下床面	20	中間床面との間隔大(約60cm)
(b)	最下床面傾斜変化部	中間床面	10	
(c)	同上	最上床面	10	省略(残留磁気分散)
(d)	窯中央	全床面混在	10	
(e)	窯焚口	同上	8	省略(残留磁気分散)
(f) 建物跡焼上面	固く焼けた平坦部		15	

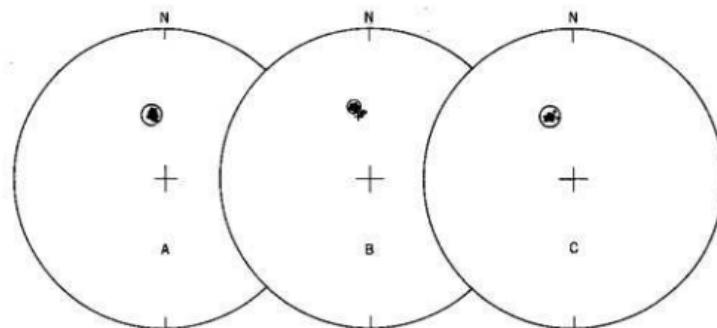


図1 久本奥窯跡と建物跡焼上面の残留磁気の方向

- (A) 表1(a)のデータ
- (B) 表1(b)と(d)を合わせたデータ (+印: (a)のデータ平均位置)
- (C) 表1(f)のデータ

3 測定結果

試料の残留磁気の方向と強度をスピナー磁力計で測定した。表1の(c)、(e)は擾乱によるデータの乱れが大きいのでこれ以上の記述を省略する。図1に(a)、(b)と(d)を合わせたもの、および、(f)について残留磁気の方向を示す。(a)と(f)のデータは非常にまとまりがよい。(b)と(d)は3枚の床面が混在するところから採取されており、各試料がどの床面から採取されたのかは分からぬ。そこで、(b)と(d)のデータを、図のように、緊密に揃う内のものと、この群から離れて(a)の平均方向へ偏って分布するものに分けて考察する。図の+印は(a)のデータの平均位置を示している。

最上床面と中間床面の間隔が全体に狭いので、最上床面操業時の熱によって中間床面が磁性鉱物のキュリー温度以上に加熱された可能性が大きい。この場合、2枚の床面の熱残留磁気は最上床面操業時の地磁気の方向に揃う。したがって、円内のシャープに揃ったデータは最上および中間床面から採取された試料のものと考えられ、これらのデータは最上床面における最終操業時の地磁気の方向を示していると解釈できる。また、円外のデータが円内と(a)の両データ間に分布しているのは、最下床面操業時に獲得された熱残留磁気に、上部床面操業時の再加熱による熱残留磁気が重なり合っているためと考えられるので、円外のデータは最下床面から採取された試料のものと判断できる。

(a)、(b)と(d)を合わせたもの、および、(f)について円内のデータの平均方向、分散の日安を計算すると表2のようになる。結局、窯跡の熱残留磁気から、最下床面操業時と窯の最終操業時の熱残留磁気を分離して検出できることになる。表2より、両方向の角度差はそれぞれの誤差（約1度）を越えて約5度に達しているのが分かる。なお、kの値が大きいほど、また、 θ_{95} の値が小さいほど、残留磁気の測定精度がよいことを意味している。

表2 残留磁気（図1の円内）の平均方向

遺構	Im	Dm	k	θ_{95}	N
(a) 窯の最下床面水平部	56.07°	11.19°W	849	1.19°	18
(b)(d)混在層（最上床面、中間床面）	50.70	13.06°W	1335	1.05	15
(f) 建物跡焼土面	55.82	20.48°W	943	1.30	14

Im：平均伏角 Dm：平均偏角 k：Fisher の信頼度係数 θ_{95} ：95%誤差角 N：有効試料数

4 地磁気年代の推定

図2は広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線上に、窯の最下床面水平部、窯の最上・中間床面、および、建物跡焼土面の残留磁気の平均方向と誤差の範囲を記入したものである。地磁気年代を求めるには、平均方向から近い点を永年変化曲線上にもとめ、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も同様にして推定できる。表3にこのようにして求めた地磁気年代を示す。

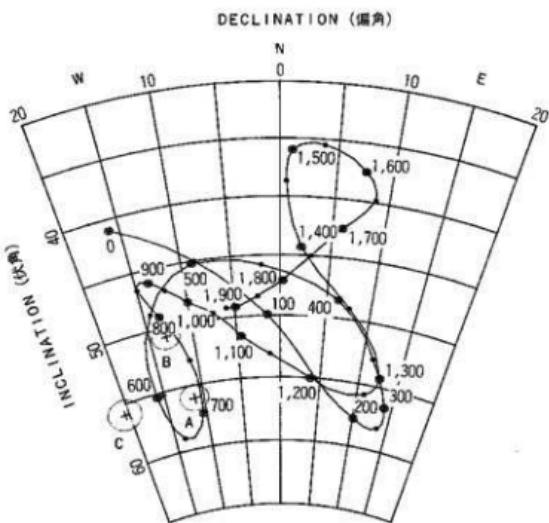


図2 久本奥窯跡と建物跡焼土面の残磁気(円内)の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の梢円)および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線
(A) 最下床面水平部(最下床面の最終操業年代を示す)
(B) 混在層(最上床面、中間床面)(窯の最終操業年代を示す)
(C) 建物跡焼土面

表3 地磁気年代

(a) 最下床面水平部	A.D. 715 ± 15 (最下床面の最終操業年代)
(b)(d)混在層(最上床面、中間床面)	A.D. 780 ± 15 (窯の最終操業年代)
(f) 建物跡焼土面	A.D. 605 ± 15

5 土器年代との比較

地磁気年代による最下床面の最終操業年代(A.D. $715+15$)と窯の最終操業年代(A.D. $780+15$)は、それぞれ、窯の内部から出土した土器の年代幅の両端(7C末—8Cと8C後半)に整合している。また、建物跡焼土面のA.D. $605+15$ という地磁気年代は、建物内部およびその下方の斜面から発見された7C前半という土器年代と一応整合している。ただし、この土器は流入した状態で出土しているので、土器と焼土面との時間的関係は確認できない。

6 窯跡の操業期間：最下床面操業時と最終操業時の熱残留磁気の分離

窯尻の最下床面水平部の試料は約1.5m四方の範囲から採取されている。この部分を覆う埋土の厚みは上部床面の傾斜に沿って焚口方向に減少するので、もし上部床面操業時の熱が最下床面に影響を与えたとするとその程度は焚口方向に大きくなつたはずであり、試料の残留磁気の方向は上部床面操業時の地磁気の方向に引きずられてかなり分散することが予想される。しかし、表2のように、(a)の測定データは非常にまとまりがよい。このことは採取試料が再加熱の影響をほとんど受けていないことを示唆している。一方、土層断面の観察によれば、窯尻の最下床面の試料が採取されたあたりでは、厚い埋土の下部10cmに肌理の細かい黄色粘質土が散かれており、この層には焼けた形跡が認められない。また、その上の50cmには小さい赤変焼土塊を混じえた土層が乗り、この土層が中間床面に接する薄い部分(2-4cm)のみが上部からの熱で明瞭に黒変している。以上のことからより、(a)の熱残留磁気は最下床面の最終焼成時のものであると結論できる。

さらに、図1に見るように、(a)のデータと(b)(d)の円内のデータの両者は非常にまとまりがよく、表2の大きいFisherの信頼度係数(849, 1335)と小さい95%誤差角(1.19度, 1.05度)はデータの信頼性を保証している。結局、信頼性の高い地磁気年代にもとづいて、久本奥窯跡の操業期間が約65年であると結論できる。

最後に、試料採取でお世話になった島根県埋蔵文化財調査センターの広江耕史氏に厚く感謝します。

注1 広岡公夫(1978) 第4紀研究 15, 200-203

2 中島正志、夏原信義「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9、ニューサイエンス社

江津市周辺の窯跡および遺跡出土瓦と 須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

1)はじめに

島根県内には松江市を中心とした東部地域に大井窯群があり、浜田市などの西部地域にも窯群がある。これらの窯群から出土する須恵器は対照的な化学特性を持っており、蛍光X線分析によって相互識別は容易にできる。東部地域産の須恵器にはCa、Sr量が多く、逆に西部地域の須恵器には少ない。

今回は江津市付近で見つけられた久本奥窯、櫛柄押込窯出土須恵器の化学特性を明らかにするとともに、周辺の遺跡から出土した須恵器、瓦も蛍光X線分析法により胎土分析し、その産地を推定した結果についても併せて報告する。

2)分析結果

土器片資料の処理法、分析法、分析データーの表示法は従来通りである。

はじめに、窯跡出土須恵器、瓦の分析結果から説明する。

表1には、窯跡出土須恵器、瓦の分析値を示してある。数値だけではわかりにくいので、Rb-Sr分布図とK-Ca分布図を作成し、比較検討した。

図1には久本奥窯出土須恵器、瓦のRb-Sr分布図を示す。須恵器と瓦が混在し、まとまって久本奥領域を形成していることがわかる。すべての点を包含するようにして、久本奥領域を描いた。勿論、この領域は定性的な意味しかもたないが、それでも、他の窯群の須恵器、瓦と比較する上には有効である。須恵器には古墳時代後期から奈良時代に至るまでのものが含まれているが、とくに、年代による化学特性の相違は認められない。つまり、地元の、同質の素材粘土をいつの時代にも使用していたことを示唆している。さらに飛鳥・奈良時代の瓦も含まれているが、須恵器と同じ特性をもつことがわかる。瓦も須恵器と同じ素材粘土を利用していた証である。1点、粘土試料が含まれているが、須恵器、瓦と同じ化学特性をもつことを示している。したがって、この粘土が須恵器、瓦の素材となった可能性は高い。

図2にはK-Ca分布図を示してあるが、図1のRb-Srに分布図で述べたと同じことがこの分布図からも読みとれる。通常岩石、粘土、土器片では、微量元素Rbは主成分元素Kと正の相関性をもつ。つまり、マグマから岩石形成の過程、さらに、一次の火成岩が風化し、二次岩石の形成、さらに、土壤化、粘土化の過程でも、RbはKと同じ挙動をとっていたことを示す。そして、主成分元素Kは一次岩石中の主成分鉱物であるカリ長石中に存在する。同様に、微量元素Srは主成分元素Ca

と正の相関性をもっており、一次岩石中の主成分鉱物、斜長石中に存在する。

したがって、K、Ca、Rb、Sr の 4 因子が地域差を示すということは母岩中のカリ長石、斜長石に地域差があるということを意味する。

以上のようなことから、Rb-Sr 分布図での分布の傾向は K-Ca 分布図での分布の傾向と対応する場合が多いことが理解される。図 1、2 を比較すると、そのことがよくわかる。ただ、Rb-Sr 分布図の方が少し拡がって分布し、見易いので、通常、Rb-Sr 分布図を描く場合が多い。本報告では統計計算を行わず、分布図の比較のみで粘土の特性を把握するので、Rb-Sr 分布図とともに、K-Ca 分布図も一緒に描いてみた。

図 3 には棚橋押込窯の須恵器の Rb-Sr 分布図を、また、図 4 には K-Ca 分布図を示してある。久本奥窯域によく対応していることがわかる。したがって、長石系因子からみて、久本奥窯と棚橋押込窯の須恵器は同質であるといえる。その結果、両者を合わせて、江津群を形成することができる。久本奥窯と棚橋押込窯は数キロメートル離れて存在しており、したがって、数キロメートルにわたって、同質の粘土が分布している訳である。このようなことは全国各地で示されている。なお、浜田市の奈古田窯の須恵器も両分布図で久本奥窯域によく対応しており、同質の粘土は相当広い範囲にわたって分布していることを示している。

図 5、6 には下府廃寺出土瓦、須恵器の Rb-Sr 分布図と K-Ca 分布図を示してある。ほとんどの瓦は両図において久本奥窯域によく対応していることがわかる。遺跡出土瓦、須恵器の分析値は表 2 にまとめられている。K、Ca、Rb、Sr 因子のみならず、Na、Fe 因子でも下府廃寺の瓦は久本奥窯の瓦と類似している。胎土からみて、久本奥窯が産地であるといつてもよい。なお、1 点の須恵器 (No27) は久本奥窯とみられるが、他の 3 点は少しずれる。しかし、島根県西部地域の製品であることには相違ない。

図 7、8 には岩国分寺瓦窯、岩国分尼寺出土瓦の Rb-Sr 分布図と K-Ca 分布図を示す。石見国分寺瓦窯の瓦をすべて包含するようにして、石見国分寺瓦窯域をしめしてある。久本奥窯の瓦、須恵器と類似した化学特性をもっているが、K、Rb 量が少し少ない点が異なる。石見国分尼寺の瓦の中に、3 点石見国分寺瓦窯域に対応するものがあるが、1 点は明らかにずれる。久本奥窯域からもずれる。いくつかの瓦窯から瓦が供給されたことを示している。

図 9、10 には石見国分寺出土瓦、須恵器の Rb-Sr 分布図と K-Ca 分布図を示す。石見国分寺瓦窯の瓦胎土と同じものが 2 点ほどあるが、久本奥窯の瓦胎土と同じ胎土をもつ瓦も含まれている。両方から供給されたものと思われる。2 点の須恵器は久本奥窯のものではない。しかし、島根県西部地域の製品である。

図 11、12 には古八幡付近遺跡、宮倉遺跡出土須恵器の Rb-Sr 分布図と K-Ca 分布図を示す。古八

橋遺跡の3点と、宮倉遺跡の3点の須恵器は久本奥領域に対応している。久本奥窯産の可能性もあるが、棚橋押込窯産の可能性もある。胎土からはその区別は困難である。土器のプロポーションなどの考古学的観察の結果も参考にすべきであろう。なお、宮倉遺跡の3点の須恵器には、Ca、Sr量が多い。これは島根県東部地域の須恵器の特性である。大井群からの搬入品である可能性もあるが、瑞穂町付近の窯の製品である可能性も残されている。

図13、14には半田浜西遺跡出土須恵器、土師器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示す。G-2、3、4の3点の須恵器は久本奥領域に対応しているので、久本奥窯か棚橋押込窯などの地元窯産の須恵器と見られる。しかし、古墳時代後期と推定されるG-1は久本奥領域からはずれる。それでも、島根県西部地域産の須恵器とみられる。

土師器は胎土が須恵器とは異なる。勿論、作っている場所も違うと思われる。したがって、产地推定には須恵器のデーターをストレートに使う訳にはいかない。そのため、土器形式と胎土との関連などから考古学に有意な情報を引き出そうとする努力が積み重ねられている現状である。今回分析した土師器はこれ1点のみで比較する相手がないので、特に、情報は引き出しえなかった。

今回の分析によって、江津市、浜田市周辺の窯跡出土須恵器の化学特性は類似していることがわかった。益田市周辺にはCa、Sr量は少ないと共通の特徴をもつが、K、Rb量が多いという特徴をもつもう一つ別の窯群がある。この窯群に対応する須恵器が下府庵寺に1点、石見国分寺に2点出土している。

島根県西部地域の窯跡出土須恵器は東部地域ほど多く分析されていない。今後、西部地域に窯跡の発見も期待されるが、こつこつと基礎データーを集積していくことによって、島根県およびその周辺地域の須恵器の伝播・流通の研究を胎土分析によって遂行できるだろう。

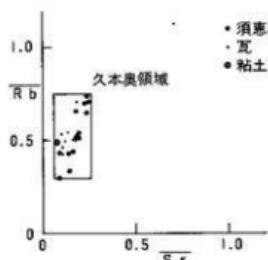


図1 久本奥窯跡出土須恵器, 瓦の
Rb-Sr分布図

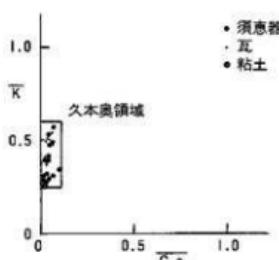


図2 久本奥窯跡出土須恵器, 瓦の
K-Ca分布図

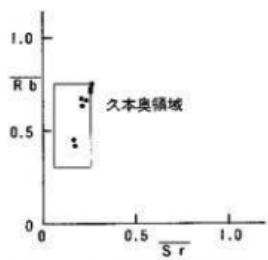


図3 棚接押込窯跡出土須恵器の
Rb-Sr分布図

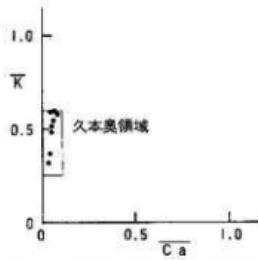


図4 棚接押込窯跡出土須恵器の
K-Ca分布図

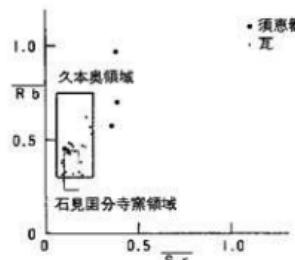


図5 下府廐寺跡出土瓦, 須恵器の
Rb-Sr分布図

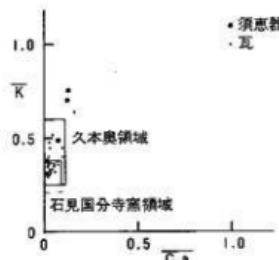


図6 下府廐寺跡出土瓦, 須恵器の
K-Ca分布図

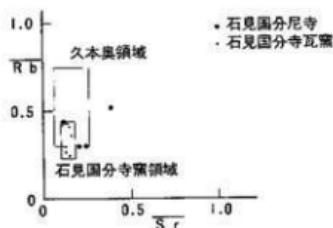


図7 石見国分尼寺、石見国分寺瓦窯跡出土瓦の
Rb-Sr分布図

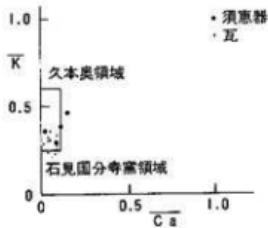


図8 石見国分尼寺、石見国分寺瓦窯跡出土瓦の
K-Ca分布図

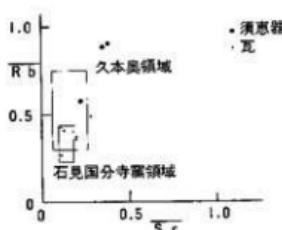


図9 石見国分寺出土瓦、須恵器のRb-Sr分布図

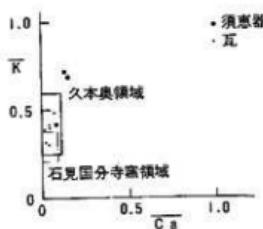


図10 石見国分寺出土瓦、須恵器のK-Ca分布図

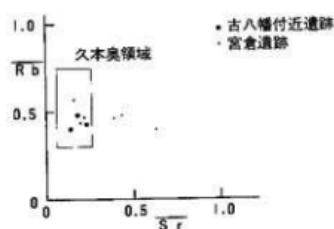


図11 宮倉遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図

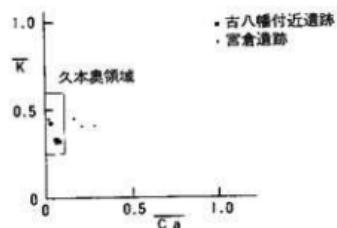


図12 宮倉遺跡出土須恵器のK-Ca分布図

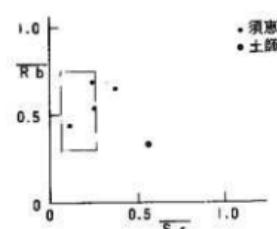


図13 半田浜西遺跡出土須恵器、土師器の
Rb-Sr分布図

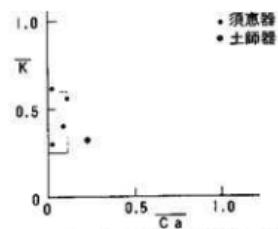


図14 半田浜西遺跡出土須恵器、土師器の
K-Ca分布図

表1 窯跡出土瓦、須恵器の分析値

遺跡名	番号	遺物名	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
久本奥窯跡	F-1	須恵器	奈良時代	0.391	0.040	1.72	0.543	0.194	0.124
	2	〃	〃	0.335	0.120	1.17	0.534	0.185	0.033
	3	〃	〃	0.311	0.010	1.20	0.432	0.086	0.020
	4	〃	〃	0.393	0.039	1.87	0.524	0.176	0.128
	5	〃	古墳時代	0.566	0.065	2.60	0.746	0.242	0.198
	6	〃	〃	0.533	0.038	1.79	0.709	0.252	0.218
	7	〃	飛鳥時代	0.279	0.010	2.67	0.296	0.088	0.018
	8	〃	〃	0.476	0.050	1.65	0.703	0.226	0.124
	9	〃	奈良時代	0.278	0.107	1.78	0.438	0.164	0.025
	10	〃	〃	0.409	0.039	1.51	0.655	0.182	0.105
	11	〃	飛鳥時代	0.303	0.067	1.07	0.512	0.191	0.028
	12	〃	奈良時代	0.493	0.059	1.62	0.653	0.240	0.184
	13	〃	〃	0.285	0.039	2.43	0.335	0.138	0.021
	14	〃	〃	0.325	0.028	2.49	0.427	0.137	0.058
	15	鷲尾	飛鳥・奈良	0.374	0.026	1.94	0.505	0.166	0.108
	16	〃	〃	0.385	0.027	2.00	0.504	0.176	0.070
	17	瓦(丸)	奈良時代	0.409	0.027	1.47	0.428	0.096	0.044
	18	(〃)	〃	0.502	0.025	1.90	0.539	0.101	0.087
	19	(半)	〃	0.481	0.058	1.36	0.546	0.130	0.049
	20	(〃)	〃	0.511	0.035	2.64	0.465	0.103	0.042
	21	(〃)	〃	0.540	0.053	0.901	0.712	0.181	0.067
	22	(〃)	〃	0.511	0.041	2.42	0.500	0.118	0.058
	23	粘土		0.250	0.013	0.942	0.494	0.068	0.014
石見国分寺瓦	D-1	平瓦	平安前半	0.235	0.035	1.91	0.426	0.137	0.027
	2	〃	〃	0.292	0.015	1.74	0.421	0.114	0.029
	3	〃	〃	0.362	0.042	1.86	0.366	0.160	0.072
	4	〃	〃	0.307	0.048	2.17	0.274	0.127	0.049
	5	〃	〃	0.325	0.037	2.34	0.400	0.152	0.032
	6	〃	〃	0.234	0.075	2.33	0.252	0.150	0.039
	7	軒平瓦	〃	0.306	0.042	2.25	0.303	0.133	0.055
奈古田窯跡	E-1	須恵器	奈良～平安	0.463	0.077	2.10	0.608	0.230	0.150
	2	〃	〃	0.499	0.134	1.81	0.631	0.278	0.140
櫛櫛押込窯跡	J-1	〃		0.365	0.042	2.74	0.454	0.165	0.067
	2	〃		0.481	0.052	2.55	0.634	0.213	0.098
	3	〃		0.510	0.052	2.17	0.658	0.237	0.141
	4	〃		0.324	0.031	2.57	0.420	0.170	0.070
	5	〃		0.597	0.059	1.90	0.750	0.268	0.223
	6	〃		0.581	0.074	2.07	0.733	0.266	0.185
	7	〃		0.543	0.057	2.41	0.669	0.208	0.134
	8	〃		0.595	0.059	1.93	0.717	0.261	0.206

表2 遺跡出土瓦、須恵器の分析値

遺跡名	番号	遺物名	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	
下府庵寺跡	A-1	軒丸瓦	奈良・後	0.353	0.020	1.70	0.450	0.122	0.039	
	2	〃	〃	0.291	0.016	1.95	0.325	0.106	0.022	
	3	〃	〃	0.317	0.056	1.65	0.375	0.092	0.028	
	4	〃	〃	0.328	0.024	1.65	0.479	0.134	0.026	
	5	〃	古墳前	0.326	0.038	1.34	0.436	0.159	0.042	
	6	〃	〃	0.357	0.051	1.24	0.331	0.176	0.059	
	7	〃	〃	0.307	0.014	1.67	0.315	0.088	0.021	
	8	〃	奈良後	0.400	0.021	1.95	0.430	0.115	0.022	
	9	〃	奈良時代	0.524	0.042	1.52	0.623	0.224	0.262	
	10	〃	〃	0.320	0.029	2.02	0.279	0.096	0.039	
	11	〃	〃	0.355	0.068	2.86	0.324	0.146	0.056	
	12	〃	〃	0.638	0.161	3.17	0.573	0.239	0.259	
	13	〃	奈良初	0.448	0.029	2.03	0.427	0.130	0.041	
	14	軒平瓦	〃	0.316	0.012	2.17	0.394	0.090	0.024	
	15	〃	奈良後	0.477	0.025	1.79	0.465	0.149	0.056	
	16	〃	〃	0.373	0.031	2.44	0.379	0.187	0.070	
	17	〃	〃	0.398	0.097	3.47	0.313	0.198	0.099	
	18	〃	〃	0.458	0.093	2.69	0.534	0.250	0.121	
	19	丸瓦	〃	奈良	0.356	0.021	1.26	0.429	0.121	0.026
	20	平瓦	〃	0.302	0.013	1.25	0.363	0.100	0.027	
	21	〃	〃	0.348	0.050	1.34	0.470	0.198	0.070	
	22	〃	〃	0.375	0.072	2.25	0.465	0.218	0.054	
	23	〃	〃	0.313	0.021	1.30	0.481	0.138	0.041	
	24	平瓦	奈良初	0.701	0.116	1.39	0.696	0.389	0.296	
	25	〃	平安前	0.756	0.125	1.32	0.979	0.379	0.187	
	26	〃	奈良後	0.491	0.074	1.44	0.571	0.362	0.254	
	27	〃	奈良初	0.373	0.010	2.32	0.449	0.113	0.049	
石見国分寺	B-1	軒丸瓦	奈良後	0.319	0.021	1.42	0.409	0.130	0.040	
	2	〃	〃	0.422	0.040	2.30	0.362	0.204	0.083	
	3	軒平瓦	〃	0.390	0.014	1.92	0.430	0.110	0.031	
	4	〃	〃	0.400	0.041	2.14	0.369	0.198	0.076	
	5	〃	〃	0.490	0.168	2.44	0.486	0.282	0.120	
	6	〃	平安前	0.305	0.037	2.10	0.270	0.112	0.040	
	7	須恵器	〃	0.690	0.146	1.37	0.898	0.378	0.181	
	8	〃	奈良	0.422	0.078	1.75	0.575	0.222	0.150	
	9	〃	平安前	0.716	0.130	1.81	0.889	0.348	0.188	
石見国分尼寺	C-1	軒平瓦	〃	0.294	0.084	1.98	0.303	0.203	0.060	
	2	軒丸瓦	奈良後	0.458	0.146	1.79	0.524	0.383	0.139	
	3	軒平瓦	〃	0.360	0.020	1.99	0.439	0.119	0.025	
	4	軒丸瓦	〃	0.377	0.107	2.93	0.304	0.238	0.062	

遺跡名	番号	遺物名	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
半田浜西遺跡	G-1	須恵器	古墳後	0.560	0.111	2.32	0.651	0.374	0.182
	2	刀	飛鳥	0.622	0.018	1.84	0.687	0.239	0.083
	3	刀	奈良	0.301	0.017	1.64	0.441	0.114	0.046
	4	刀	刀	0.404	0.093	2.62	0.539	0.253	0.036
	5	土師器	古墳奈良	0.320	0.223	1.79	0.332	0.555	0.073
古八幡付近遺跡	H-1			0.326	0.061	2.69	0.427	0.228	0.141
	2			0.325	0.076	1.25	0.477	0.184	0.037
	3			0.426	0.026	4.12	0.399	0.141	0.046
宮倉遺跡	I-1			0.413	0.283	1.91	0.403	0.630	0.348
	2			0.448	0.164	1.62	0.483	0.429	0.276
	3			0.450	0.017	1.84	0.573	0.161	0.082
	4			0.321	0.060	2.76	0.442	0.195	0.024
	5			0.414	0.205	1.51	0.473	0.385	0.231
	6			0.332	0.057	2.38	0.470	0.215	0.021

土器観察表

(半田西内遺跡)

探査番号	出土地点	種類	器種	法景(cm)	胎土	焼成	色調
10-1	SD-01	須恵器	环、蓋	口径16.6 高さ2.9	砂粒含む、密	良	明灰色
-2	SD-01	須恵器	环、蓋	天井径5.6	砂粒を含む、密	良	灰色
-3	SD-01	須恵器	环、蓋	天井径5.8	砂粒少、密	良	明灰色
-4	No36	須恵器	环、身	底径11.3	砂粒ほとんど含ま ず、密	良	明灰色
-5	SD-01	須恵器	环、身	底径12	砂粒含まず、密	良	暗灰色
-6	SD-01	須恵器	环、身	底径9.6	砂粒含まず、密	良	灰色
-7	SD-01	須恵器	环、身	口径14.1 高さ4 底径9.4	砂粒少、密	良	灰色
--8	No 37	須恵器	高环	口径25.2 高さ13 脚底径14.4	砂粒多し、密	良	明灰色
-9	SD-01	須恵器	高环 脚部		黒色粒を含む	良	暗灰色
-10	SD-01	須恵器	甕		砂粒含まず、密	良	灰色
10-11	SD-01	土製品	分網	重量48.6g	砂粒多し	良	赤褐色、一部黑色
9-1	SD-03	磁器	青磁・碗	底径5.6	気泡を含む	良	綠灰色
12-1	SD-04	須恵器	环、身	口径12.5 高さ3.3 底径6.3	砂粒少	不良	白色
-2	SD-04	須恵器	环、身	底径6.8	砂粒多し	普通	灰白色
-3	SD-04	灰釉陶器	碗	底径7.5	灰白色、極めて密	良	明綠灰色
-4	SD-04周辺	須恵器	环、身	口径12.5 高さ4.7 底径7	砂粒多し、	不良	白色
-5	SD-04周辺	須恵器	环、身	口径11.9 高さ4.2 底径5.5	砂粒含む	不良	白色
-6	SD-04周辺	須恵器	环、身	口径13.4 高さ5.4 底径6	砂粒少、密	良	明灰色
-7	SD-04周辺 No-192	土師器	小皿	底径5.5	極めて精良	良	桃白色
-8	SD-04周辺	須恵器	环、身	口径13.2	細かい砂粒含む、 密	不良	白色
-9	SD-05 No-190	土師器	小皿	口径8.2 高さ2.2 底径4.7	細かい砂粒含む、 密	良	桃色
14-1	SB-01	土師器	甕	口径18	再チェック	---	一
-2	SB-01 No27	土師器	高环、脚部	底径13.8	砂粒多し、密	普通	赤黃褐色

(半田浜西遺跡)

鉢器番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
17-1	SB-02 pit-76		甕	底径2.8	砂粒多し、密	不良	灰白色
--2	SB-02 SD 10		甕	口径16.6	細かい砂粒多く含む、密	普通	黄灰白色
18-1	No 22	瓶	風字瓶	横10.2 高さ2.2	砂粒少 黒色粒子を含む 密	良	灰色
-2	磯の近辺 No-23	須恵器	坏、身	口径16.4	砂粒ほとんどの含ま ず、密	良	明灰色
20-1	石積み	須恵器	坏、蓋	口径13.7 器高1.9 天井径2.2	砂粒含まず、密	良	明灰色
-2	石積み No 21	須恵器	坏、身	底径10.3	砂粒少、密	良	明灰色
-3	石積み No-20	須恵器	坏、身	底径8.3	砂粒少、密	良	灰色
-4	石積み No-15	土師器	坏、身	底径7.1	砂粒少、精良	良	明黄褐色
-5	石積み東テラス	碗	円面碗	口径16 底径13 高さ2.3	砂粒少、密	良	灰色
6	石積みテラス	須恵器	甕 下半部		砂粒少、密	良	灰色
-7	石積み No-5	土師器	小皿	口径8.9 器高1.6 底径5.2	細かい砂粒を含む	良	黄桃色
-8	石積み No-11	土師	分銅	幅4.7 厚み4 高さ5.7	砂粒を含む、密	良	明黄灰褐色 90g
-9	石積み No101	弥生	甕		砂粒少、密	良	灰白色
-10	石積み下	磁器	白磁理頭 碗	底径6.7	気泡を含む		灰白色
-11	石積み	磁器	越州窓 青磁 碗	底径5.3	明茶灰色		うす茶色かった銀色
-12	石積み下	磁器	青磁	口径16.4	明灰色		明綠灰色
22-1	電周辺 No 178	須恵器	坏、蓋	口径13.7 器高3.8	砂粒少、密	普通	暗灰色
-2	電周辺	須恵器	坏、蓋	口径14.6 器高4.5	砂粒少し、密	良	灰色
-3	電周辺 No-22	須恵器	坏、蓋	口径13.4 器高3.9	砂粒少、密	良	暗灰色
-4	電周辺 NO-116	須恵器	坏、蓋	口径13.5 器高3.5	砂粒少	良	暗灰色
-5	電周辺 No-189	須恵器	坏、蓋	口径13.2 器高4	砂粒含む、密	良	灰色
-6	電周辺 NO-189	須恵器	坏、蓋	口径13.1	砂粒少、密	良	灰色
-7	電周辺 NO-154	須恵器	坏、身	口径10.8 器高4.4	砂粒少、密	良	暗灰色

(半田浜西遺跡)

鉢図番号	出土地点	種類	器種	法環(cm)	胎土	焼成	色調
22-8	電周辺 No-146	須恵器	环、身	口径12.8 器高3.5	砂粒少、密	良	暗灰色
9	電周辺	須恵器	环、身	口径14.8 器高3.5	砂粒含まず、密	良	明灰色
-10	東周辺	須恵器	短腹壺	口径8.7 器高9.2	砂粒少、密	良	灰色
-11	電周辺	須恵器	瓦足		砂粒少、密、白色	やや不良	暗灰色
12	電周辺	須恵器	高环	口径13.6	砂粒少、密	不良	灰白色
-13	電周辺 No-30	須恵器	高环	底径14	砂粒少、密	良	暗灰色
-14	電周辺	須恵器	高环脚部		砂粒少、密、白色	良	暗灰色
23-1	東側 No-26	土師器	壺	口径17.8	砂粒多し、密	良	明桃白色、暗褐色
2	東側	土師器	壺	口径17.4	砂粒多し、密	良	黄褐色、暗灰色
-3	東側 No-113	土師器	壺	口径18.8	砂粒多し、密	良	桃褐色
-4	No-98	土師器	丈形の碗	口径17.8 器高8.2	細かい砂粒多し、 密	良	明灰色、黄褐色
-5	No-179	土師器	丈形の碗	口径23.9 器高10	砂粒多し、密	良	明桃灰色
6	No-180	土師器	脚付き环	口径18.2	砂粒多し、密	良	明黄褐色
-7	東側	土師器	高环	脚底径12.2	砂粒少、密	良	黄白色
-8	No-184	土師器	高环	口径16.7	砂粒多し、密	良	褐色
-9	東側	土師器	高环		砂粒多し、密	普通	橙色
-10	No-140	土師器	高环	口径19.3 器高15.4 脚底径13.2	砂粒少、密	良	明黄色
-11	東	土師器	高环	口径17.5	砂粒少、密	良	赤橙色
-12	No-77	土師器	高环	口径19.6	砂粒少、密	良	桃橙色
-13	No-163	土師器	高环	口径15.7 器高12.1 脚底径13.3	細かい砂粒多し、 密	良	明橙色
-14	No-115・175	土師器	壺	口径22.5	——	—	——
-15	No-131	土師器	壺	底径10.6	砂粒多し、密	良	桃褐色
24-1	東側	土師	土製支脚		砂粒多し、密	良	黄褐色

(半田浜西遺跡)

捕獲番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
24-2	No-24	土師	土製支脚		砂粒多し、密	良	赤褐色
-3	No-32	土師	土製支脚		細かい砂粒多し、 密	良	桃褐色、黄灰白色
-4	東側	土師	土製支脚		砂粒多し、密	良	赤褐色
-5	東	土師	土製支脚		砂粒少、密	良	赤褐色
26-4		土師	分銅	幅4.5 厚み4 高さ5.2	—	—	88g
-5	東側	土師	分銅	幅4.5 厚み4.1	砂粒多し、密	良	赤褐色 100g
-6		土師	分銅	幅6.5 高さ6.4	細かい砂粒多く含む	良	明黄褐色、黒色 193g
-7		土師	分銅	幅4 厚み3.9	細かい砂粒多し、 密	普通	黄褐色、黄白色 46g
-8		石器	石斧	厚み0.3			4.34g
25-1	No54・58・59・ 166	土師	電		—	—	—
-2		土師	電		密	良	黄褐色
-3	No-39・96・95・ 99・100・165・89・ 88	土師	電	—	—	—	—
27-1	中央	弥生	甕	口径24.4	やや大きめ砂粒含む	普通	黄灰白色、一部暗灰色
-2	南西	—	甕	口径16.4	砂粒多し、密	不良	黄白色
-3	南西	—	注ぎ口	口径3	砂粒多し、密	良	黄灰白色
4	中央	土師器	甕	口径16.8	砂粒含む、密	普通	茶灰白色
-5	南西	土師器	小型丸底甕	口径11.7	砂粒多し、密	普通	明黄褐色
-6	No-183	土師器	小型丸底甕	口径8.4 器高6.7	砂粒少、密	良	桃白色
-7	南西	土師器	器台	脚底径19.9	砂粒多し	普通	黄灰白色
-8		土師器	高坏	口径14.9	砂粒含む、やや粗	良	淡赤褐色
9	東側	土師器	高坏	口径17.4	砂粒多し、密	不良	黄褐色
-10	南西	土師器	高坏脚部		砂粒多し、密	普通	桃白色
-11		土師器	甕	口径21.8	砂粒多し、密	良	桃褐色

(平田浜西遺跡)

探査番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
27-12	東側	土師器	甕	口径18.5	砂粒含む、密	良	桃白色
-13	抜張区	土師	土製支脚		砂粒多し、密	良	赤桃色
14	抜張区	土師	土製支脚		砂粒含む、密	良	赤褐色
28-1	東	須恵器	蓋	口径10.3 器高1.3	砂粒含まず、密	良	暗灰色
-2	南西	須恵器	蓋	口径10.5 器高1.7	砂粒含まず、密	良	青灰色
-3	東	須恵器	蓋	口径13.8 器高1.2	砂粒少、密	良	明灰色
-4		須恵器	蓋	口径16 器高3.8	砂粒少、密	普通	明灰色
-5		須恵器	蓋	口径15.5	砂粒少、密	良	灰色
-6	東	須恵器	蓋	口径14.6 器高2.5	砂粒少、密	普通	明灰色
7	I区	須恵器	蓋	口径17.5 器高2.5 大井径4	砂粒多、密	良	暗灰色
-8	抜張区	須恵器	蓋	口径14.2 器高3 天井径8.2	砂粒少、密	良	明灰色
-9	I区	須恵器	环	口径15.2 器高4.7	砂粒少、密	良	灰色
-10	東	須恵器	环	口径13 器高3.9	砂粒少、密	良	灰色
-11	東	須恵器	高环脚部	脚底径7.8	砂粒少、密	良	暗灰色
12		須恵器	高环脚部		石英質微粒含む、 密	良	灰色
-13	東	須恵器	甕	底径16	赤色粒子、白色粒子を含む	やや不良	桃灰色
-14	抜張区	須恵器	甕	底径16.5	—	—	—
-15	東	須恵器	甕	底径11.8	砂粒を含む、密	良	灰色
-16	東	須恵器	甕	底径8.8	砂粒含む、密	良	明灰色
29-1	III抜張区	須恵器	甕	口径32.2	砂粒含まず、密	良	青灰色
-2	IV抜張区	須恵器	甕	口径31.3	砂粒少、密	良	灰色
-3	東抜張区	須恵器	鉢	底径19.2	砂粒少、密	良	明灰色
-4	東	須恵器	甕		砂粒少、密	良	灰色

(半田浜内遺跡)

鉢岡番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
29-5	東	須恵器	壺		黒色粒子含有、密	良	灰白色
-6		須恵器	壺		黒色粒子含有	良	外、白色 内、灰白色
30-1	中央	東播系 須恵器	鉢	口径28.1	砂粒少、密	良	灰白色 口縁部、灰色
2	中央	東播系 須恵器	鉢	口径33.8	砂粒少、密	良	明灰色
-3	VH拡張区	常滑焼	壺	口径31.1	白色粒子を含む、 密		赤灰色
-4	中央	備前焼	壺鉢	口径31.4	白色粒子を含む、 密	良	桃灰色
-5	東拡張区	備前焼	壺鉢	口径25.4	白色粒子含む	良	赤灰色
6		土師器	小皿	口径8.6 高1.8	砂粒少、密	良	桃白色
-7		土師器	碗	底径6.5	砂粒ほとんど含ま ず	普通	明褐色
-8		土師器	皿	口径8.5 高2.1 底径4.4	砂粒ほとんど含ま ず	良好	桃白色
-9		磁器	白磁II類	口径14.5	黄白色		黄白色
-10		磁器	白磁IV類		黒色の纏かい粒子 含		薄い灰色がかった白色
11		磁器	白磁V類		黒色の粒子含む		薄い灰色がかった白色
-12		磁器	青磁 蓮弁文様 龍泉窓		明灰色		薄い緑色
-13		磁器	白磁 IV類		白色に気泡状の隙 間あり		白色

土器観察表

(二宮C遺跡)

鉢岡番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
34-1	SI-01 住居跡No46	土師器	壺	口径14.2	砂粒少、密	不良	黄白色
-2	SI-01 住居跡No25	土師器	壺	口径15.8	砂粒含む、密	不良	黄白色
-3	SI-01 上層	土師器	壺	口径13	纏かい砂粒多し	良	橙色
-4	SI-01 二宮C No 8	土師器	高坏	脚底径10.7	砂粒多し、密	良	黄橙色
-5	SI-01 住居跡No31	土師器	高坏	脚底径12.7	纏かい砂粒を含、 密	普通	赤橙色
-6	SD-01 二宮C No13	土師器	高坏	口径19.1 高12.3 脚底径12.3	砂粒含む、密	良	黄橙色

(二宮C遺跡)

探査番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
34-7	SD 01 二宮C No.39	土師器	甕	口径14.6	砂粒含む、密	良	赤橙色
-8	Pit 二宮C No.42	土師器	甕	口径18.4	砂粒含む、密	良	赤桃色
38-1		弥生	甕	口径16	大きめ砂粒多し、密	良	明灰褐色
-2		弥生	甕	口径13.7	大きめ砂粒多し、密	良	暗灰褐色
-3		弥生	甕	口径16.4	砂粒を含む、密	良	明褐色
-4		弥生	甕	口径20.7	砂粒多し、密	良	桃褐色
-5		弥生	甕	口径18.1	砂粒多し、密	良	灰褐色
-6		弥生	甕	口径15.2	砂粒少、密	良	桃灰白色
-7		弥生	甕	口径26.2	大きめ砂粒多し	良	桃灰褐色
-8		弥生	甕	口径20.5	砂粒多し、密	良	明灰褐色
-9		弥生	器台	口径17	大きめの砂粒を含む	良	白色
-10		弥生	器台	口径23.7	細かい砂粒多し、密	良	明灰褐色
39-1		土師器	甕	口径16.8	砂粒多し、密	良	赤橙色
-2		土師器	甕	口径15.8	砂粒多し、密	良	明灰褐色
3		土師器	甕	口径16.6	砂粒多し、密	良	外、赤橙色 内、灰褐色
-4		土師器	甕	口径16.5	砂粒多し、密	良	明灰褐色
-5		土師器	甕	口径16.6	砂粒多し	良	黄桜白色
-6		土師器	甕	口径17	砂粒多し、密	良	外、桃褐色 内、明灰褐色
-7		土師器	甕		砂粒多し、密	良	桃灰白色
-8		土師器	甕	口径13.6	細かい砂粒多し、密	良	黄桜色
9		土師器	高环	口径16.7	砂粒多し、密	良	黄桜白色
-10		土師器	高环	口径20.4	砂粒多し、密	良	赤橙褐色
-11		土師器	高环	口径18.3	細かい砂粒多し	良	黄桜色

(二官C遺跡)

擇図番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
39-12		土師器	高環	口径10.2 底径7	砂粒含む、密	良	黄褐色
-13		土師器	环	口径15.5 底径7	砂粒多し、密	良	外、明黄褐色 内、黒色
-14		土師器	小型丸底壺	口径9.1	砂粒含む、密	良	黄白色
-15		土師器	小壺丸底壺	口径10.9 底径9.3	砂粒多し、密	良	赤褐色、一部暗褐色
37-1		東晉系須恵器	鉢	口径33.6	砂粒少、密	良	外、口縁部 黑灰色 その他 灰色 内、灰褐色
-2		備前焼	鉢	口径25.3	白色の粒子含有	良	赤茶色
-3		備前焼	壺	底径15.8	砂粒少、密	良	綠茶色
-4		瓦質土器	3足付 鉢	底径18.5	細かい砂粒を含む	良	灰色、一部白色
-5		須恵器	壺		砂粒含まず、密	良	灰色
-6	Pit 3	瓦質土器	鉢		砂粒少、密	やや不良	灰白色
-7	No.38	土師壺	椀	底径6.4	砂粒含まず、密	やや不良	明褐色
-8		土師器	环	底径5.3	砂粒を含む、密	普通	明桃褐色
-9		土師器	椀	底径5.7	細かい砂粒多し、 密	良	外、明褐色 内、灰褐色
-10		土師器	椀	底径6.3	細かい砂粒含む、 密	普通	桃灰褐色
-11		土師器	椀	底径6.5	細かい砂粒多し、 密	良	明桃褐色
-12		土師器	盤	底径4.8	砂粒含まず、密	良	赤橙色

石器観察表

(二官C遺跡)

擇図番号	出土地点	器種	法量 [全長×幅×厚さ](cm)	重量	材質
38-11		打製石斧	11.4×5.8×1.3	108g	
-12		打製石斧	13.6×6.0×2.9	270g	

土器観察表

(久本実業館)

採集番号	出土地点	種類	器種	法環(cm)	胎土	焼成	色調
43-1	灰原	須恵器	壺、蓋	口径13.9 器高3 天井径1.4	砂粒多し、密	良	明灰色
-2	灰原	須恵器	壺、蓋	天井径2.2	砂粒多し、密	良	灰色
3	灰原	須恵器	壺、蓋	口径15.2 器高2.2 天井径2.8	砂粒少し、密	良	灰色
-4	No-844	須恵器	壺、蓋	口径17 器高2.4 天井径2.8	砂粒含む、密	良	灰色
-5	No-849	須恵器	壺、蓋	口径17.1 器高2 天井径2.9	砂粒含む、密	良	灰色
-6	No-373	須恵器	壺、蓋	天井径3	砂粒少し、密	良	黒灰色
7	No-168	須恵器	壺、蓋	口径12.8	砂粒少し、密	良	灰色
-8	灰原床底	須恵器	壺、蓋	口径12.5 器高3.1 天井径5	細かい砂粒含む、 密	良 表面も施されている	明灰色
-9	焚口 No-161	須恵器	壺、蓋	口径13.1 器高3 天井径5.8	細かい砂粒含む、 密	不良	白色、灰色
-10	焚口 No-142	須恵器	壺、蓋	口径13 器高2.3 天井径4.5	細かい砂粒含む、 密	良	灰白色
-11	焚口燒土下	須恵器	壺、蓋	口径15.6 器高3 天井径5.7	細かい砂粒多し、 密	不良	灰白色、白色
-12	灰原黑色土	須恵器	壺、蓋	口径18.9 器高3.4 天井径8.1	砂粒少し、密	良	明灰色
-13	灰原赤褐色土	須恵器	壺、身	口径13.3 器高3.6 底径8.8	砂粒少し、密	良	明灰色
-14	No-372	須恵器	壺、身	口径13.9 器高4.3 底径9.3	砂粒少し、密	良	黒灰色
-15	No-369	須恵器	壺、身	口径14.2 器高4 底径9.9	砂粒少し、密	良	暗灰色
-16	焚口 No-172	須恵器	壺、身	口径14.6 器高4.8 底径9.6	砂粒少し、密	良	灰色
17	焚口 暗赤褐色土 No-890	須恵器	壺、身	口径11.4 器高4.8 底径7.7	砂粒少し、密	良	灰色
-18	焚口 No-178	須恵器	壺、身	底径8	細かい砂粒多し、 密	普通	灰白色
-19	灰原床底 No-141	須恵器	壺、身	口径12.4 器高6.6 底径8.2	砂粒少し、密	良	灰色
-20	焚口 No-87 No-168	須恵器	壺、身	口径12.2 器高5.1 底径8	砂粒少し、密	不良	暗灰色、灰白色
-21	灰原 No-271	須恵器	高壺	口径16 器高5.7 脚底径9	1 mm 程度の白 色粒子を含む、粗	良	内面、淡黃色 外面、青灰色
-22	灰原	須恵器	高壺	口径16.5	砂粒含む、密	良	灰色
-23	灰原 No-274	須恵器	高壺	口径15.2	1 mm 程度の白 色粒子を含む、粗	良	内面、淡黃色 外面、青灰色

鉢器番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
43-24	灰原	須恵器	壺、身	口径14.7	砂粒多し、密	良	灰色
44-1	焚口 No.884	須恵器	高壺	口径17.7	砂粒少、密	不良	暗灰色、白色
-2	焚口	須恵器	高壺脚部	脚底径9.6	砂粒少、密	良	灰色
3	灰原 赤褐色土	須恵器	壺	口径19	砂粒少、密	良	灰色
-4	No.860	須恵器	壺		砂粒少、密	良	黑灰色
-5	No.861	須恵器	壺		砂粒少、密	良	灰色
-6	焚口 No.137	須恵器	壺		砂粒含む、密	良	灰色
-7	No.867	須恵器	壺		砂粒少、密	良	灰色
-8	灰原	須恵器	壺		砂粒少、密	不良	白色
-9	No.359	須恵器	壺		砂粒少、密	良	明茶灰色
-10	焚口 No.88	須恵器	壺		砂粒少、密	良	茶灰色
-13	床面下溝内	須恵器	壺、蓋	口径16.5 器高2.5 大井径3	砂粒少、密	良	暗灰色
-14	床面下、溝内	須恵器	壺、身	口径15.6 器高4.1 底径10	砂粒少、密	良	灰色
-15	溝内	須恵器	壺、身	口径14.2 器高3.5 底径8.9	砂粒少、密	良	灰色
-16	床面下、溝内	須恵器	壺	底径15.2	砂粒多し、密	良	灰色、黒灰色
-17	溝内	須恵器	壺	口径8.6 器高2.7 底径12.8	砂粒少、密	良	灰色
52-1	テラス No.780	須恵器	壺、蓋	口径11 器高2.2	砂粒含む、密	良	灰色
2	テラス No.286 No.287	須恵器	壺、蓋	口径14.3 器高2.2 大井径2.9	砂粒少、密	良	灰色
-3	No.288	須恵器	壺、蓋	口径14.4 器高2.2 大井径2.8	砂粒含む、密	良	灰色
-4	No.289	須恵器	壺、蓋	口径14.8 器高1.8 大井径2.9	砂粒含む、密	良	灰色
-5	No.290B	須恵器	壺、蓋	口径14.5 器高2.1 大井径2.9	砂粒含む、密	良	灰色
-6	テラス No.290	須恵器	壺、蓋	口径14.9 器高2.5 大井径3	砂粒含む、密	良	灰色
-7	テラス No.291	須恵器	壺、蓋	口径14.5 器高2.2 大井径3.1	砂粒含む、密	良	灰色

拂団番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
52-8	テラス No-292	須恵器	环、蓋	口径15.1 器高2.7 天井径3.2	砂粒少、密	良	灰色
-9	テラス No-353 No-419 No-421	須恵器	环、蓋	口径16.7 器高2.2 天井径3.1	砂粒含む、密	良	灰色
-10	テラス No-292B	須恵器	环、蓋	口径15 器高3.4 天井径3.2	砂粒含む、密	良	灰色
-11	テラス No-649	須恵器	环、蓋	口径12.4 器高1.3	砂粒少、密	良	暗灰色
-12	テラス No-779	須恵器	环、蓋		砂粒少、密	良	灰色
13	テラス No-354	須恵器	环、蓋	口径14.1 器高2.5 天井径3.3	砂粒少、密	良	灰色
-14	No-334	須恵器	环、蓋	口径14.6 器高3.1	砂粒少、密	良	灰色
-15	テラス No-307	須恵器	环、蓋	口径14.9 器高3.3	砂粒少、密	良	灰色
-16	テラス No-285	須恵器	环、蓋	口径15.9 器高1.8 天井径2.9	砂粒含む、密	良	灰色
-17	テラス No-294 No-307 No-348	須恵器	环、蓋	口径14.8 器高1.6 天井径2.1	砂粒含む、密	良	灰色
-18	テラス 床面下黄褐色	須恵器	环、蓋	口径15.5 器高3.3	砂粒含む、密	良	灰色
-19	テラス 床下	須恵器	环、蓋	口径16.6 器高3	砂粒含む、密	良	明灰色
-20	テラス No-284	須恵器	环、蓋	口径15.5 器高2.9 天井径3	砂粒少、密	良	灰色
21	テラス No-647	須恵器	环、蓋	口径15.6 器高3 天井径3	砂粒少、密	良	灰色
-22	テラス No-649 No-648	須恵器	壺の蓋	口径14.4 器高2.7 天井径2.8	細かい砂粒含む、 密	良	灰色 外、暗灰色
-23	テラス No-779	須恵器	环、蓋	口径14 器高2.6 天井径6	細かい砂粒含む、 密	良	灰色
-24	テラス No-864	須恵器	环、蓋	口径14.3 器高2.5 天井径5.6	砂粒含む、密	良	灰色 一部暗灰色
-25	テラス No-793	須恵器	环、蓋	口径13.2 器高2.4 天井径5.8	砂粒少、密	良	外、暗灰色 内、灰色
-26	テラス	須恵器	环、蓋	口径13.7 器高2.8 天井径5.7	細かい砂粒含む、 密	良	明灰色
27	テラス No-789	須恵器	环、蓋	口径14.4 器高2.4 天井径5.7	細かい砂粒多し、 密	不良	灰白色～白色
-28	テラス No-779	須恵器	环、蓋	天井径5.9	黑色粒子含む	良	灰色
-29	テラス No-818	須恵器	环、蓋	口径21.5 器高3.1 天井径9.2	細かい砂粒含む、 密	良	灰色
53-1	南東テラス	須恵器	环、身	口径12.1	砂粒少、密	良	灰色

標図番号	出土地点	種類	器種	法蓋(cm)	胎土	焼成	色調
53-2	テラス No-810	須恵器	环、身	口径9.5 器高3.1	砂粒少、 黒色粒子含む、密	良	灰色
3	テラス No-820	須恵器	环、身	口径16.3 器高4.3 底径11.2	砂粒少、密	良	灰色
-4	テラス No-297	須恵器	环、身	口径13.8 器高4.2 底径10.4	砂粒少、密	良	灰色
-5	テラス No-346	須恵器	环、身	口径14.5 器高4.6 底径11	砂粒含む、密	不良	灰白色
6	テラス No-302	須恵器	环、身	口径13.4 器高4.3 底径10.5	砂粒含む、密	良	灰色
-7	テラス No-303	須恵器	环、身	口径13.5 器高4.5 底径10.5	細かい砂粒多し、 密	良	灰色
-8	テラス No-289	須恵器	环、身	口径14.1 器高4.3 底径9.5	砂粒含む、密	良	灰色
-9	テラス No-298	須恵器	环、身	口径14.1 器高4.4 底径9.9	砂粒含む、密	不良	灰白色
-10	No-796	須恵器	环、身	口径15.8 器高6.2 底径11.2	砂粒少、密	良	灰色
-11	テラス	須恵器	环、身	口径12.9 器高3.4 底径9.9	細かい砂粒含む、 密	良	暗灰色
-12	テラス No-803	須恵器	环、身	底径9.4	砂粒少、密	良	灰色
-13	灰原 赤褐色土	須恵器	环、身	口径13.1 器高2.8 底径5.1	大きな砂粒含む	不良	白色
-14	灰原 黑色土	須恵器	环、身	口径13.5 器高2.9 底径5.4	砂粒少、密	良	灰白色
-15	灰原 赤褐色土	須恵器	环、身	口径11.9 器高4.4 底径6	砂粒少、密	良	灰白色
-16	灰原 赤褐色土	須恵器	环、身	口径13.2 器高4.4 底径8.4	砂粒少、密	不良	白色
-17	灰原	須恵器	环、身	口径13.8 器高4.9 底径7.6	砂粒少、密	良	明灰色
54-1	テラス No-311	須恵器	高环	口径18.6	1 mm程度の白 色砂粒含む	良	青灰色 広い範囲に自然軸の付着
-2	テラス No-809	須恵器	高环	口径14.8 器高9.1 底径11.2	密	良	青灰色 内部内面に重ね焼のため の色調の違いあり
-3	テラス、床下	須恵器	高环、坏部	口径17.2	砂粒少、密	良	灰色
-4	テラス No-387	須恵器	高环、坏部	口径17.8	1 mm程度の白 色砂粒を少し含む	良	青灰色
5	テラス No-427	須恵器	高环		1 mm程度の白 色砂粒を少し含む	良	青灰色
-6	テラス No-317	須恵器	高环	口径14.8 器高8.4 脚底径9.7	砂粒少、密	良	暗灰色
-7	灰原 No-270	須恵器	高环	口径13.8 器高8.5 脚底径10.4	1 mm程度の白 色砂粒若干含む	良	青灰色

鉢器番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
54-8	テラス	須恵器	高环、脚部	脚底径8.2	密	良	青灰色
-9	テラス	須恵器	高环、脚部	脚底径7.1	砂粒少、密	良	灰色
-10	テラス	須恵器	脚付き壺	脚底径6.7	密	良	青灰色 一部に淡緑色の自然釉
-11	テラス No.328	須恵器	高环、脚部	脚底径9.1	密	不良	淡黄白色
-12	テラス No.276	須恵器	高环、脚部	脚底径8.9	密	良	青灰色 一部に淡黄灰色の自然釉
-13	テラス No.786	須恵器	高环、坪部	口径22.2	1mm程度の白色砂粒を少し含む	良	淡青灰色 内面に重ね焼のため、色調の違いあり
-14	テラス	須恵器	高环、坪部	口径23.2	密	不良	淡黄白色
-15	テラス No.792	須恵器	高环、坪部	口径24.3	密	良	淡青灰色
-16	テラス No.783	須恵器	高环、坪部	口径24	密	不良	淡黄白色
55-1	テラス	須恵器	壺		砂粒含む、密	良	灰色
-2	テラス、床下	須恵器	壺		砂粒含む、密	良	灰色
-3	テラス床下 No.341	須恵器	壺	口径10.4	砂粒含む、密	良	灰色
4	No.880	須恵器	壺	口径9.9	砂粒含まず、密	良	暗灰色
-5	テラス No.349	須恵器	壺		砂粒含む、密	良	灰色
-6	テラス	須恵器	把手		砂粒少、密	良	灰色~暗灰色
-7	テラス No.316 No.357	須恵器	壺		砂粒少、密	良	灰色
-8	テラス No.791	須恵器	壺	口径13.4	砂粒少、密	良	灰色
-9	テラス No.804 805, 808	須恵器	壺	底径13.6	砂粒少、密	良	暗灰色
10	テラス No.782	須恵器	壺	底径9.2	砂粒少、密	良	灰色
-11	テラス床下 黄褐色土	須恵器	擂鉢	底径9.3	砂粒少、密	良	灰色
56-1	テラス No.329 405, 280	須恵器	壺	口径19.0	1mm程度の白色砂粒少し含む	良	灰色
-2	テラス	須恵器	壺	口径22.4	1mm程度の白色砂粒を少し含む	良	灰色
-3	テラス No.823	須恵器	壺	口径19.1	密	良	外面、茶褐色 内面、黄褐色

探査番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
56-4	テラス床面下 黄褐色土	須恵器	壺	口径26	1 mm程度の白色砂粒を少し含む	良	外面、淡青灰色 内面、淡黄灰色
-5	テラス床面下	須恵器	壺	口径35.5	砂粒少、密	良	暗灰色
-6	No.645	須恵器	壺		砂粒少、密	良	暗灰色
7	テラス床下 No.890	土師器	壺	口径9.1 高さ16.1	砂粒含む、密	良	赤橙色
-8	テラス No.791	土師器	壺	口径18.6	砂粒多し、密	良	桃白色
-9	テラス No.796	土師器	壺	口径20.8	細かい砂粒含む、 密	良	褐色
57-1	北側盛り土	須恵器	壺、蓋	口径16.7	砂粒少、密	良	灰色
2	南東	須恵器	壺、蓋	口径14	1~2 mm程度 の砂粒を含む	良	淡青灰色
-3		須恵器	壺、蓋	口径12.9 高さ3.4	砂粒少、密	良	青灰色
-4	東側中央	須恵器	壺、蓋	LJ径13.1 高さ3.4	砂粒少、密	良	明茶灰色 表面に状をかぶる
-5	北側	須恵器	壺、蓋	LJ径12.9 高さ3.8 大井径1.5	1~2 mm程度 の砂粒を含む	やや不良	淡灰色
-6	北側盛土	須恵器	壺、蓋	天井径2.1	1 mm程度の白 色粒子をかなり含 む	良	灰色 表面に融着物あり
-7	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径14.3 高さ4.6 天井径1.5	砂粒少、密	良	灰色
-8	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径13.9 高さ3.6 天井径1.8	1 mm以下の白 色粒子を含む	良	灰色
-9	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径15.3 高さ2.8 天井径1.9	砂粒少、密	やや不良	白灰色
-10	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径14 高さ2.9 天井径3	1 mm程度の黒、 白色粒子を含む	良	外面、自然釉が全面にか かる 内面、青灰色
-11	北側盛土	須恵器	壺、蓋	天井径1.8	1 mm以下の砂 粒含む	良	淡灰色
-12	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径14.3 高さ3.2 天井径3.1	砂粒少、密	良	灰色
13	東側中央	須恵器	壺、蓋	LJ径14.3 高さ3.4 天井径2.9	砂粒を多く含む	良	灰色
-14	北側盛土	須恵器	壺、蓋		砂粒少、密	良	灰色
-15	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径13.7 高さ3.8 天井径2.5	砂粒少、密	良	灰色 外面に自然釉がかかる
-16	東中央	須恵器	壺、蓋	口径13.7 高さ2.1 天井径2.7	砂粒少、密	良	灰色 表面に灰、自然釉がかかる
-17	北側斜面盛土	須恵器	壺、蓋	口径14.2 高さ3.5 天井径3.3	細かい砂粒含む、 密	良	灰色

(久木農園跡)

探査番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	船上	焼成	色調
57-18	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径16.1 器高2.9 天井径2.9	1~2 mm程度の砂粒を含む	良	暗青灰色 外側全体に自然釉かかる
19	北側盛土	須恵器	壺、蓋	器高2 天井径3.3	1 mm程度の長石を少し含む	良	暗青色 表面に緑色の自然釉がかかる
-20	東中央	須恵器	壺、蓋	口径16.1 器高2.7 天井径3.4	砂粒普通、密	良	暗灰色
-21	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径14.8 器高2.7 天井径3.3	砂粒少、密	普通	明灰色
-22		須恵器	壺、蓋	口径15.5 器高2.6 天井径3	砂粒少、密	良	灰色
23	北側	須恵器	壺、蓋	口径16.8 器高3.1 天井径3.4	白色砂粒含む、密	良 表面に気泡による 藍斑が見当つ	暗青灰色
-24	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径17.2 器高3.3 天井径3.7	砂粒少、密 表面に自然釉がかかる	良	灰色
-25	東中央	須恵器	壺、蓋	口径14.4 器高2.7 天井径2.8	多量の黒白色粒子 を含む、密	良	外面、灰白色 内面、灰色
-26	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径14.6 器高2.4 天井径2.7	細かい砂粒わずか に含む、密	良	明灰色
27	東側	須恵器	壺の蓋	天井径3.1	砂粒少、密	良	暗灰色
-28	南東、黄褐色土	須恵器	壺、蓋	口径14.9 器高3.2 天井径6	砂粒少、密	良	明灰色
-29	中央東斜面	須恵器	壺、蓋	天井径5.9	1 mm程度の黒 色砂粒を含む	良	淡灰色
-30	南東斜面	須恵器	壺、蓋	口径19.3	砂粒少、密	良	灰色
58-1	北側盛土	須恵器	壺、身	口径11.1	1 mm以下の砂 粒少含む、密	良	青灰色
-2		須恵器	壺、身	口径10.1	大きな砂粒ほとん ど含まず、密	良	青灰色
-3	北側盛土	須恵器	壺、身	口径11.7	砂粒少、密	良	灰色
4	南東テラス 黄色土	須恵器	壺、身	口径10.4 器高3.4 底径5.8	ほとんど大きな砂 粒含まず、密	良	灰色
5	北側盛土	須恵器	壺、蓋	口径5.2 器高2.3	砂粒少、密	良	灰白色
-6	北側盛土	須恵器	壺、身	口径11.6 底径8.4	砂粒少、密	良	暗灰色
-7	北側盛土	須恵器	壺、身	口径13.6	良	良	青灰色
-8	東側中央	須恵器	壺、身	口径15.4 器高3.7 底径10.7	砂粒少、密	良	灰色
-9	北側盛土	須恵器	壺、身	口径13.6 器高4.5 底径9.5	白色粒子若干含む	良	青灰色
-10	北側盛土	須恵器	壺、身	口径13.9 器高4.7 底径9.1	砂粒少、密	良	灰色 外側に自然釉付着

発掘番号	出土地点	種類	器種	法蓋(cm)	胎土	焼成	色調
58-11	南東隅 黄褐色土	須恵器	环、身	口径14.4 器高1.6 底径10.0	良好	良	暗灰色
-12		須恵器	环、身	口径14.9 器高3.8 底径8.7	砂粒少、密	良	外面、黒色 内面、灰色
-13	北側	須恵器	环、身	口径16.1 器高4 底径11.2	1 mm程度の砂粒を多く含む	良	暗灰色
-14	北側盛土	須恵器	环、身	口径14.7 器高4.2 底径9.6	砂粒少、密	良	灰色
-15	北側盛土	須恵器	环、身	口径15.5 器高4 底径9.9	大きな砂粒をほとんど含まない	良	淡灰色 一部自然釉がかかる
-16	北側盛土	須恵器	环、身	口径15.7 器高4.7 底径10.4	1~2 mm程度の砂粒少々含む	良	外面、灰色 内面、淡灰色
-17		須恵器	环、身	口径15.9 器高4.5 底径9.7	砂粒少、密	良	明灰色
-18	東中央	須恵器	环、身	口径15.1 器高4.3 底径10.2	砂粒少、密	良	灰色
-19	テラス 黄褐色土	須恵器	环、身	口径14.7 器高6 底径10.1	砂粒少、密	良	灰色 一部灰をかぶる
-20	中央東斜面 茶褐色土	須恵器	环、身	口径12.6 器高4.1 底径9.9	砂粒少、密	良	灰色
-21	北側盛土	須恵器	环、身	直径5.2	良	不良	灰白色
22	北側盛土	須恵器	环、身 長い脚あり	底径10	1~2 mm程度の砂粒を密に含む	良	灰色 自然釉がかかる
-23	北側盛土	須恵器	环、身 長い脚あり	口径10	1 mm程度の砂粒を多少含む	良	青灰色
-24		須恵器	环、身 長い脚あり	口径13 器高4.8 底径7.5	砂粒少、密	良	灰色
59-1	北側盛土	須恵器	高环、环部	口径10.9	砂粒少、密	良	灰色
-2	北側	須恵器	高环、环部	口径11.8	良	良	灰色~淡灰色
3	中央東 茶褐色土	須恵器	高环、环部	口径17.2	砂粒少、密	良	灰色
-4	北側盛土	須恵器	高环、环部	口径14.8	砂粒少、密	良	明灰色
-5	東側	須恵器	高环、环部	口径13.9	砂粒少、密	良	明灰色
-6	北側盛土	須恵器	高环、环部	口径27.3	砂粒少、密	良	灰色
-7	中央東斜面 茶褐色土	須恵器	高环、环部	口径25.5	砂粒少、密	普通	明灰色 内側に同心円のたたきの跡
-8	北側盛土	須恵器	高环、环部	口径18.5	砂粒少、密	良	外面、灰色 内面、明灰色
-9	南東部斜面	須恵器	高环、脚部	脚底径8.7	砂粒少、密	良	灰色、白灰色混合

揮因番号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
59-10	北側盛土	須恵器	高坏、脚部	脚底径10	砂粒少、密	良	灰色
-11	東側中央	須恵器	高坏、脚部	脚底径9.2	砂粒少、密	良	灰色 一部に透明自然釉かかる
-12	北側盛土	須恵器	高坏、脚部	脚底径9.9	砂粒少、密	良	灰色
-13	北側	須恵器	高坏、脚部	脚底径9.8	1~2 mm 程度 の砂粒所々に含む	良好	淡灰色 緑色の自然釉がかかる 2次焼成をうける
-14	北側盛土	須恵器	高坏、脚部	脚底径8	1 mm 程度の白 色砂粒を若干含む	良	濃青黒色
-15		須恵器	高坏、脚部	脚底径9.6	1 mm 程度の砂 粒を部分的に含む	良	灰色 自然釉がかかる
-16	北側盛土	須恵器	高坏、脚部	脚底径6.6	1 mm 以下 の白 色砂粒を含む	良	青灰色 自然釉が部分的にかかる
-17	北側盛土	須恵器	高坏、脚部	脚底径9.3	3~4 mm 程度 の砂粒を少し含む	良	淡灰色
-18		須恵器	高坏、脚部	脚底径8.9	良	良	淡灰色
-19	南東属 黄褐色土	須恵器	高坏	脚底径9	1~2 mm 程度 の砂粒を含む	良	淡灰色~青灰色
-20	北側盛土	須恵器	埴	底径6.8	砂粒少、密	良	灰色
-21	北側盛土	須恵器	短頸壺	口径8.2	良	良	淡青灰色 口の一部に自然釉かかる
-22		須恵器	壺	口径13.4	密	良	外側、黄灰色 内側、茶色
60-1	中央東盛土	須恵器	長頸壺	口径8.2	密	良	外面、綠灰色 内面、灰色
-2	北側盛土	須恵器	長頸壺	口径8.6	密	不良	外面、黄緑色 内面、淡緑色
-3	北側盛土	須恵器	長頸壺	口径8.3	黑色砂粒多く含む	良	明灰色
-4	北側盛土	須恵器	長頸壺	口径9.6	密	不良	黑灰色
-5	北側盛土	須恵器	壺		密	良	明灰色
-6		須恵器	壺	底径9.9	密	良	外側、綠白灰色 縁釉かかる 内面、黄白灰色
-7	北側盛土	須恵器	壺	口径13.2	密	良	外面、綠色自然釉かかる 内面、綠白灰色
-8		須恵器	壺	底径12.1	密	不良	黄灰色
-9	北側盛土	須恵器	鉢	口径19.5	密	不良	外面、綠灰色 内面、綠色自然釉かかる
-10	東側中央	須恵器	鉢 底部に穿孔	口径10.5	砂粒少、密	良	灰色

擲出器号	出土地点	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
60-11		須恵器	坏、蓋	口径11.9 厚2.7	良	良	灰色
-12		須恵器	坏、蓋	口径16.9	1 mm 以下の白色砂粒をふくむ	良	外側、自然釉かかる 内側、青灰色
-13	盛土	須恵器	瓶		砂粒少、密	良	灰色
-14		須恵器	鉢		良	不良	淡灰白色
-15	表探	須恵器	丸底鉢	口径23.6	細かい砂粒多し	不良	灰色、桃灰色
61-1	北側盛土	須恵器	坏、身		砂粒少、密	良	灰色
-2	北側盛土	須恵器	环蓋の滑着	口径18 厚4.8 底径12.5	砂粒少、密	良	灰色
-3	盛土	須恵器	坏、蓋 他の蓋滑着	口径15.2 厚3.3 大井径2.8	砂粒少、密	良	暗灰色 外側全体に自然釉
-4	中央東側	須恵器	坏蓋滑着	(窓) 口径15.7 厚4.2.8 大井径 3.7(5) 口径15.2	砂粒少、密	良	灰色 外側全面に灰釉滑着
-5		須恵器	坏、蓋		砂粒少、密	良	暗灰色
62-1	北側盛土	須恵器	壺	口径22.9	砂粒多し、やや粗	良	明灰色
-2	南東斜面	須恵器		口径22	砂粒多し、密	良	外側、明灰色 内側、暗灰色
-3	東中央	須恵器	壺	口径54.6	きめ細かい	良	明灰色
-4	北側斜面上部	須恵器		口径20.1	1 mm 程度の砂粒をまばらに含む	良	明灰色
-5	東側中央	須恵器	壺		密	良	外側、灰色 内側、白灰色
6	東中央	須恵器	壺		密	焼けすぎ	外側、墨灰色 内側、綠釉かかる
-7	北側盛土	須恵器	壺	口径33.1	砂粒多し	不良	淡黄灰色
-8	北側盛土	須恵器	壺	口径36.7	密	不良	黄淡灰色
-9	東側中央	須恵器	壺	口径39.6	白色砂粒多し、密	焼けすぎ	外側、墨灰色 内側、茶色
-10	南東テラス 黄色土	須恵器	壺		白色砂粒多し、密	焼けすぎ	外側、墨灰色 内側、茶色
-11	南東斜面 黄色土	須恵器	壺	口径52.4	密	良	暗灰色
-12		須恵器	壺	口径19.1	密	不良	明灰色

(久木奥窓跡)

地図番号	出土地点	種類	器種	法景(cm)	胎土	焼成	色調
62-13	南東斜面 茶褐色土	須恵器	甕	口径13.8	密	良	緑暗灰褐色
14	北側盛土	須恵器	甕	口径21.2	密	良	灰色 一部淡緑自然釉かかる
-15	北斜面盛土	須恵器	甕		密	不良	灰色
-16	中央盛土	須恵器	甕		黑色砂粒多し、密	不良	外向、黄白色 内面、黄灰白色
17	中央東斜面 茶褐色土	須恵器	甕		1 mm程度の砂 粒散らばる	良	明灰色
-18	北側盛土	須恵器	甕		砂粒少、密	良	灰色
-19	北側盛土	須恵器	甕		砂粒少、密	普通	灰色、灰白色

久本奥窓跡瓦観察表

順番	団号	出土地点	種別	叩き	調整	側部	広端部	狭端部	離れ砂	焼成	布口	粘土つぎ目	備考
63-1		北側	軒丸瓦							B			
2		空跡	軒半瓦	NA		4			×	B	×	×	
64-1		〃	丸瓦	不明	ケズリ	4	5	4	×	C	×	×	丸瓦I類
2		〃	〃	NA		5	4		×	B	×	×	IIa
65-1		〃	〃	NA		5	4		×	A	×	×	IIa
2		〃	〃	NB		5	4		×	A	×	×	IIa
3		〃	〃	N YNB		5	1		×	A	×	×	丸瓦IIb類
4		テラス	〃	NB		5	未		○	A	×	×	IIa
5		〃	〃	NB		5			×	A	×	×	丸瓦III類
66-1		窓跡	平瓦	YNB		4C	1		○	B	×	×	平瓦I類
2		〃	〃	YNB		1	1		×	B	×	×	〃
3		〃	〃	YNB		4	2	2	○	B	×	×	〃
67-1		〃	〃	YNB		3	2	3	○	B	×	×	〃
2		〃	〃	NB		4	4		○	B	×	×	〃
3		〃	〃	YNB		4			○	B	×	×	〃
68-1		〃	〃	YNB		1	1		○	B	×	×	〃
2		〃	〃	YNB		1	1		○	B	×	×	〃
69-1		〃	〃	N B (YNB)		4B	3	2	○	B	×	×	平瓦II類
2		〃	〃	NB		1	1		○	A	×	×	〃
3		〃	〃	NB		4	4	4	○	A	×	×	〃
70-1		〃	〃	YNB		4	4		×	C	×	×	〃
2		〃	〃			3~4	4	2	×	C	×	×	〃
3		〃	〃	NB		4	4	4	○	A	×	×	〃
71-1		〃	〃	NB		4	5		○	A	×	×	〃
2		〃	〃	NB		4	2	2	○	A	×	×	〃
72-1		〃	〃	NB		4	4	2	○	A	×	×	〃
2		〃	〃	NB		4			2	○	A	×	〃

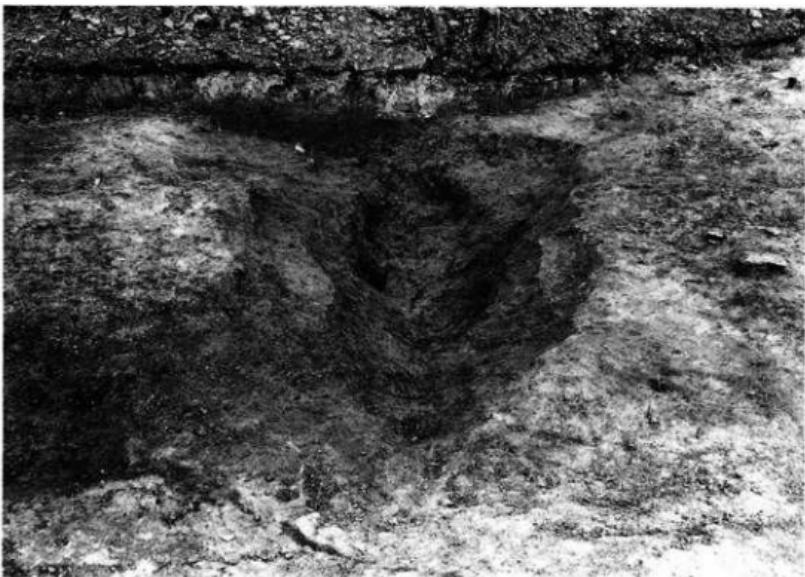
※観察表は、「中竹矢遺跡」1992年の分類による。

図 版





鹿伏山遺跡調査区全景(東より)



土壤検出状況(東より)



半田浜西遺跡遠景(南西より)



調査区発掘後全景(南より)



SB-01全景(南より)

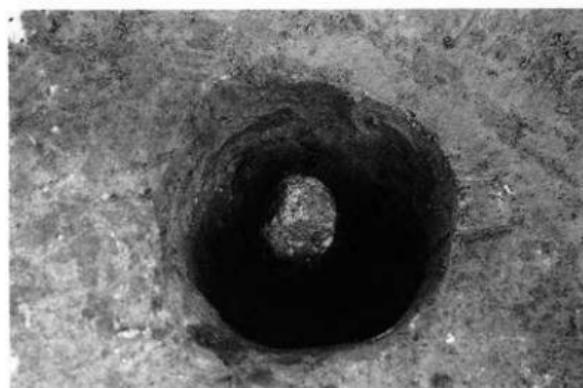


SB-02全景(南より)

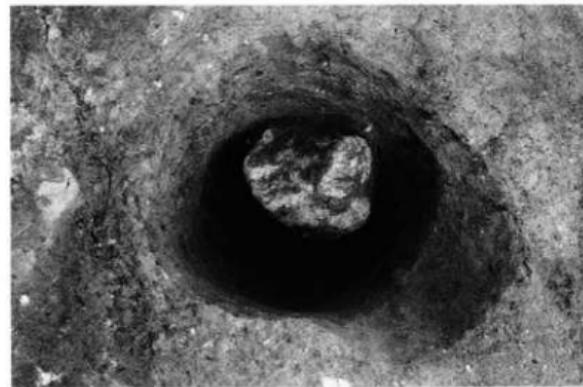
图版4



SB-02. P-1検出状況



P-2検出状況



P-3検出状況



石積み検出状況(東より)



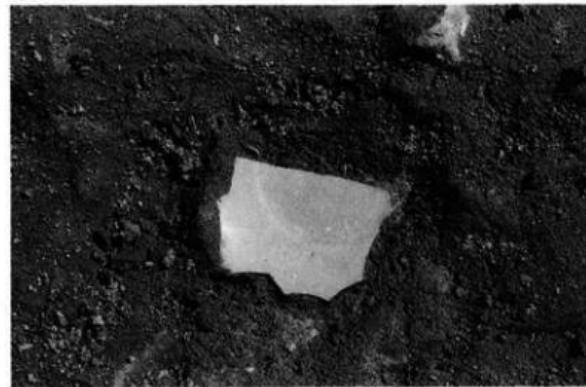
石積み検出状況(南より)



土器(16-6)出土狀況



土製分銅(10-8)出土狀況



青磁(10-11)出土狀況



調査区東側土器溝り遺物出土状況



SD-04(右), 05(左)検出状況



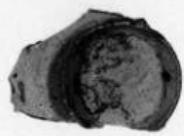
調査区東壁土層堆積状況



調査区東壁土層堆積状況



鹿伏山遺跡SK-01出土土器



半田浜西遺跡SD-01出土遺物

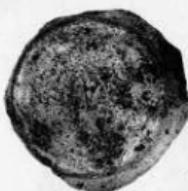




9-1



12-1



12-2



12-3



12-4



5



6



7

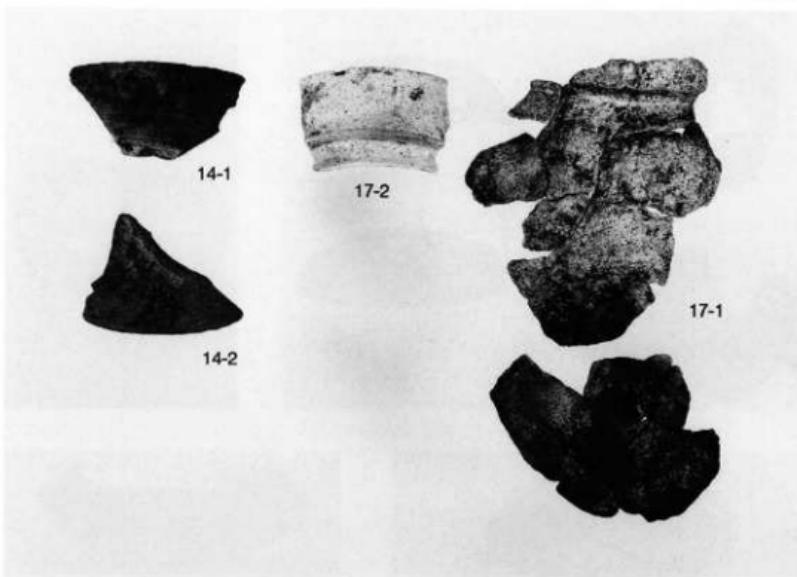


8

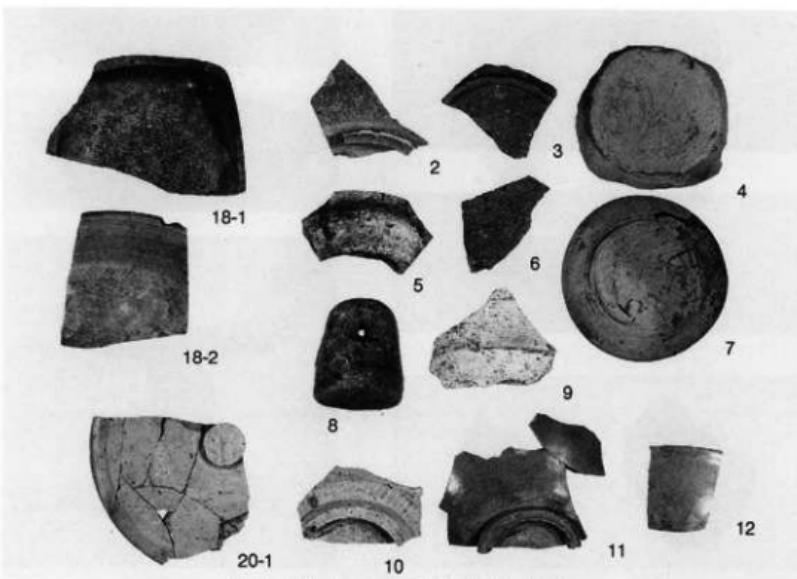


9

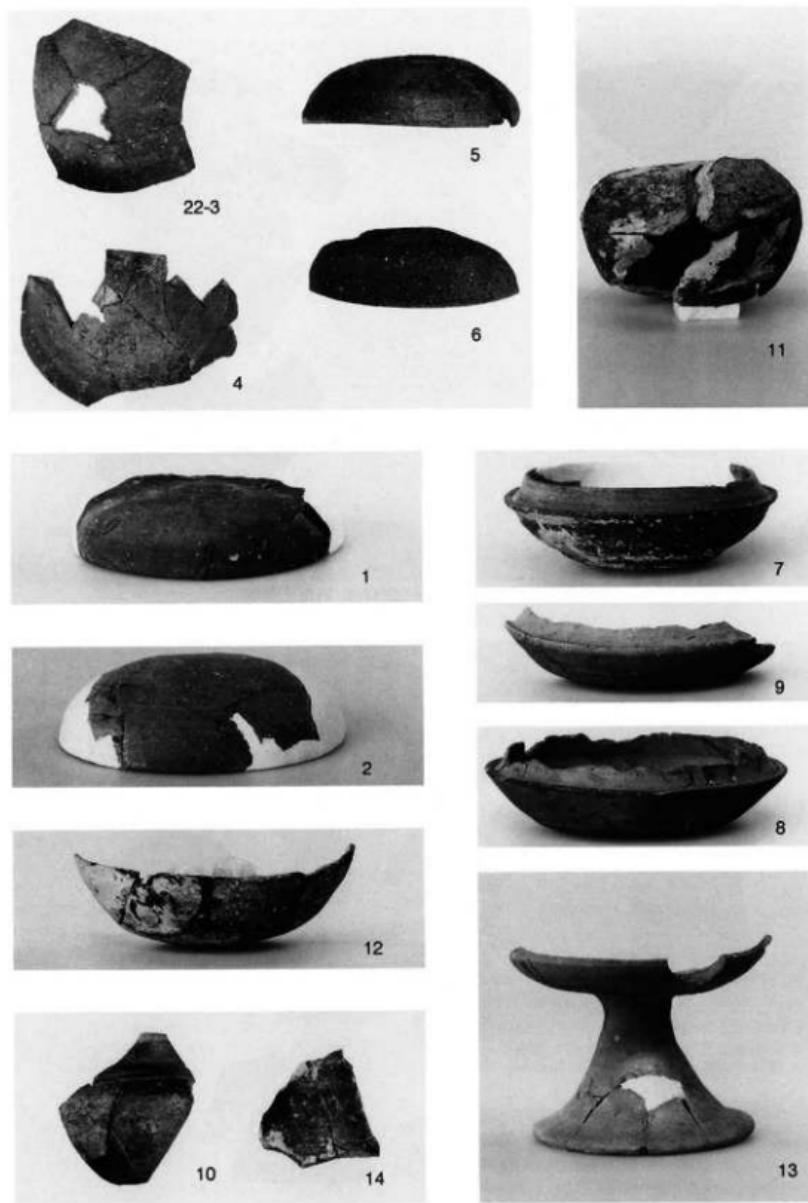
SD-03(9-1), SD-04(12-1~3), SD-04周辺(4~8), SD-05(9)出土遺物



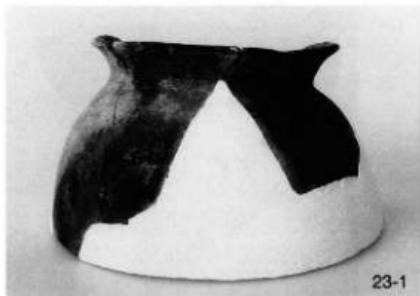
SB-01(14-1, 2), SB-02(17-1, 2)出土遺物



調査区東側(18-1, 2), 石積み(20)出土遺物



東側土器溜り出土須恵器



23-1



2



3



10



4



7



9

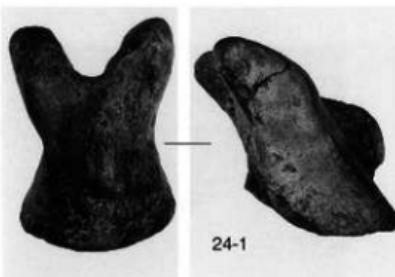
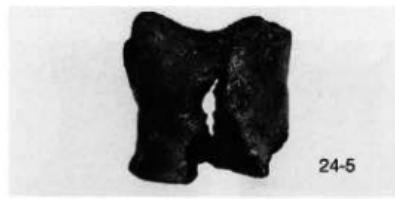
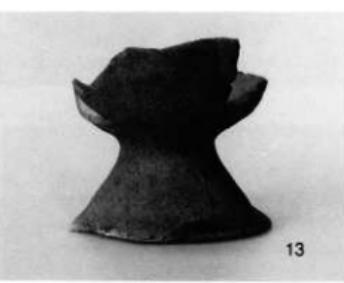
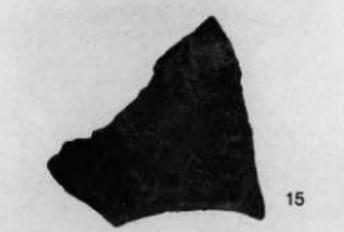


5



8

東側土器窯より出土土器



東側土器窓口, SD-06(24-3)出土遺物



26-4



5



6



7



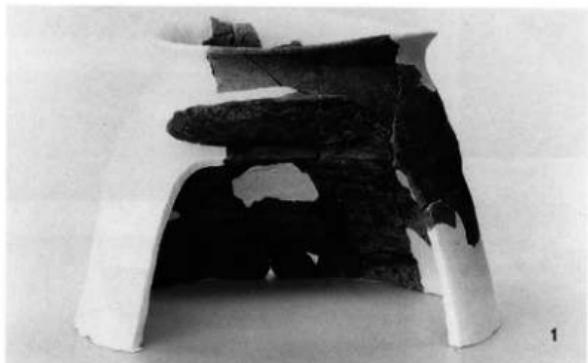
8



25-2

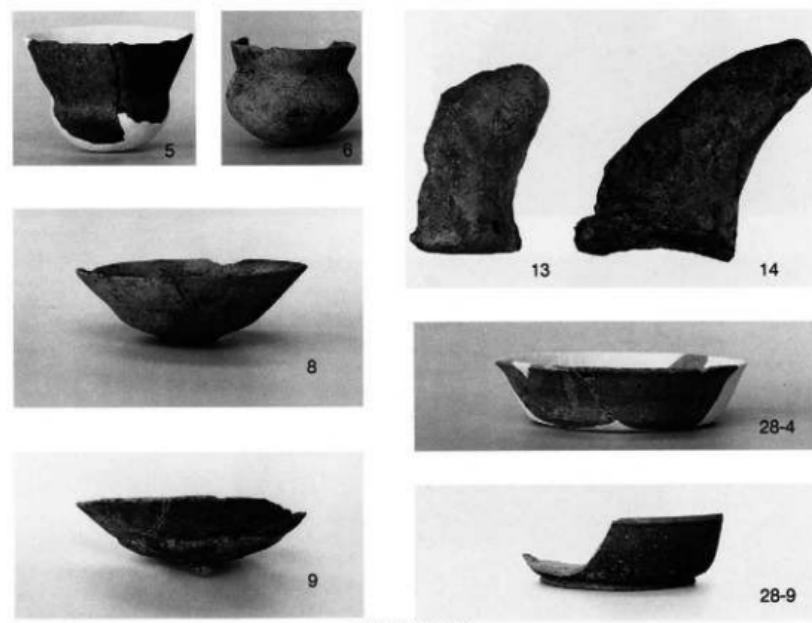
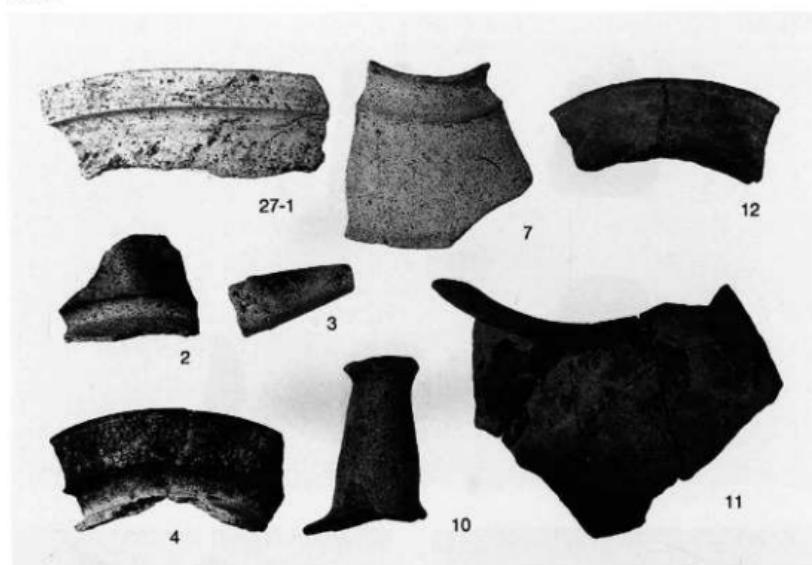


3

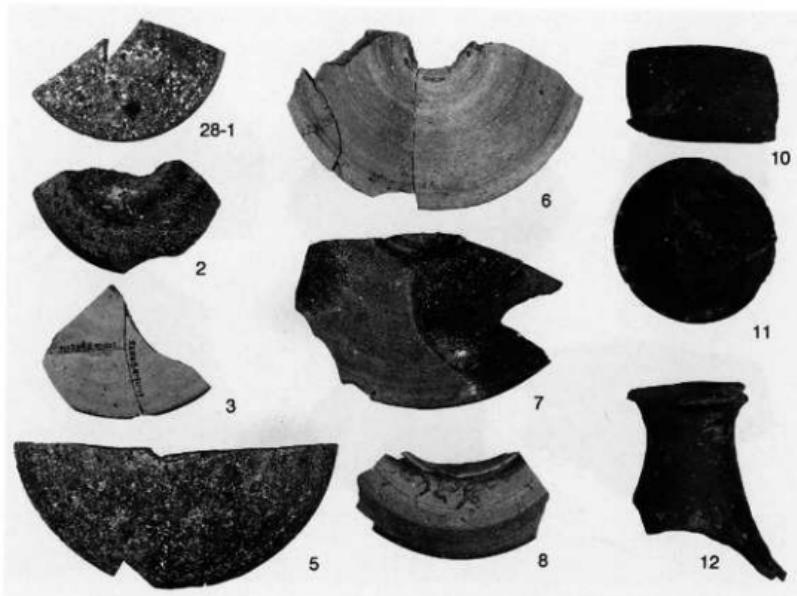


1

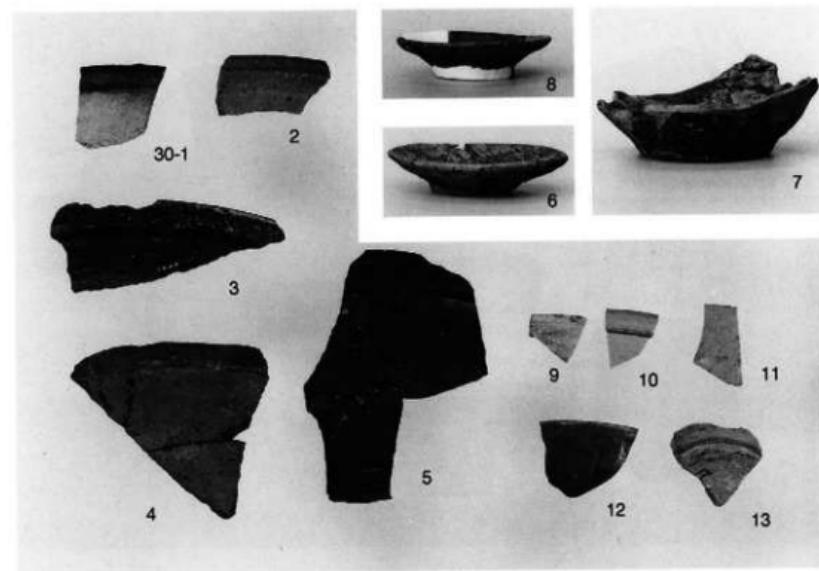
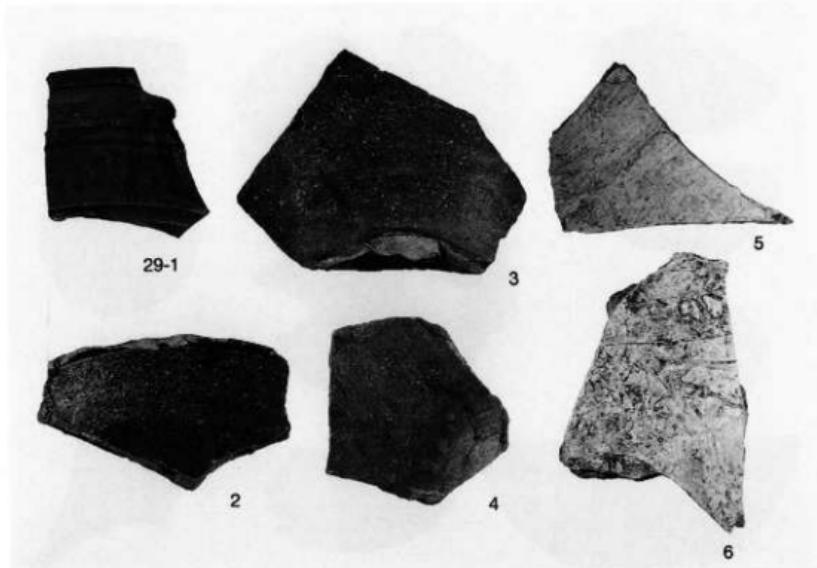
東側土器溜り(25-1~3), 遺構外(26-4~8)出土遺物



遺構外出土遺物



遗構外出土遺物



遺構外出土遺物



26-1



2



3



遺構外出土遺物



二宮C遺跡全景(東より)



SI-01全景(南より)



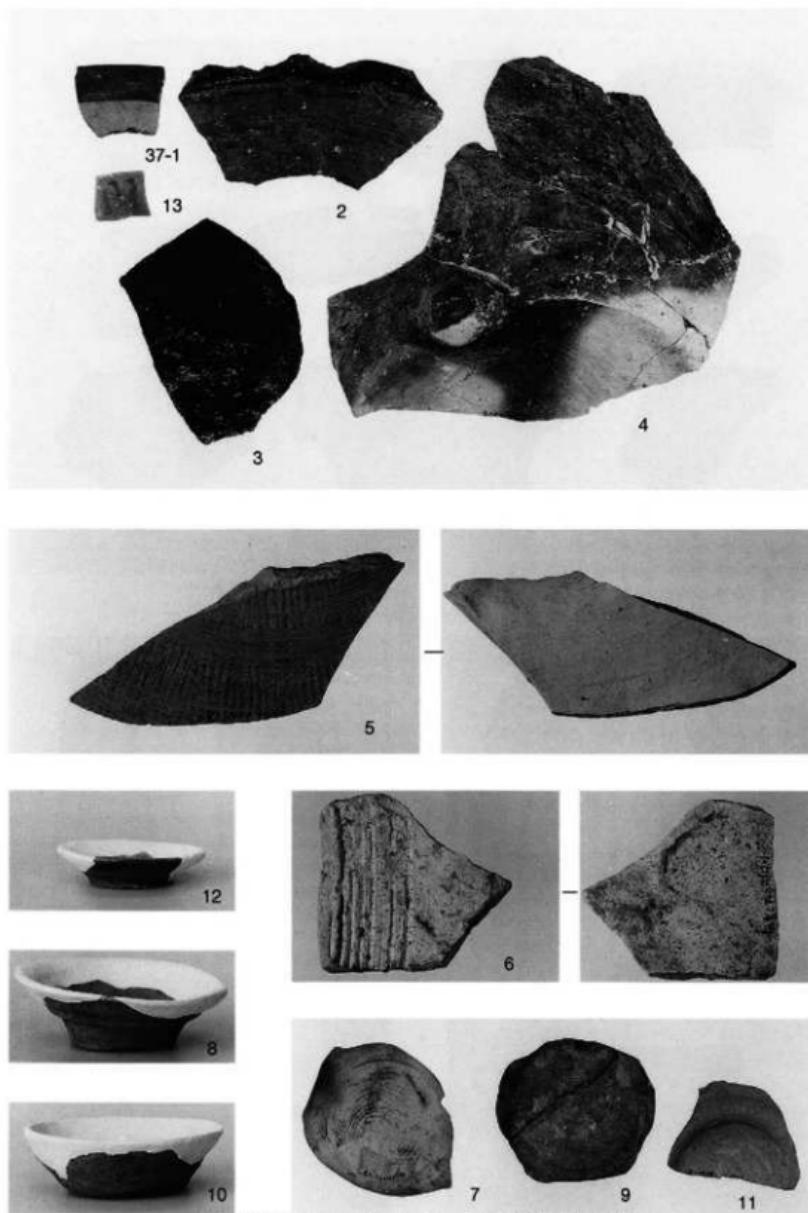
SB-01全景(西より)



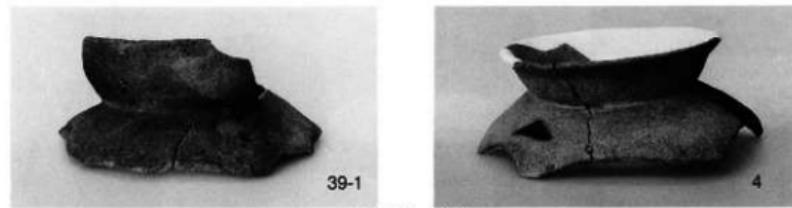
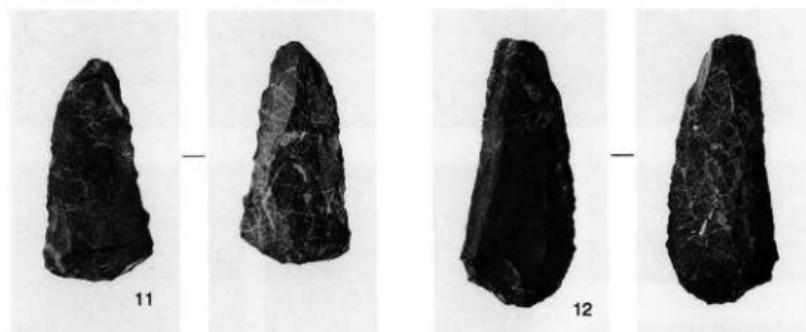
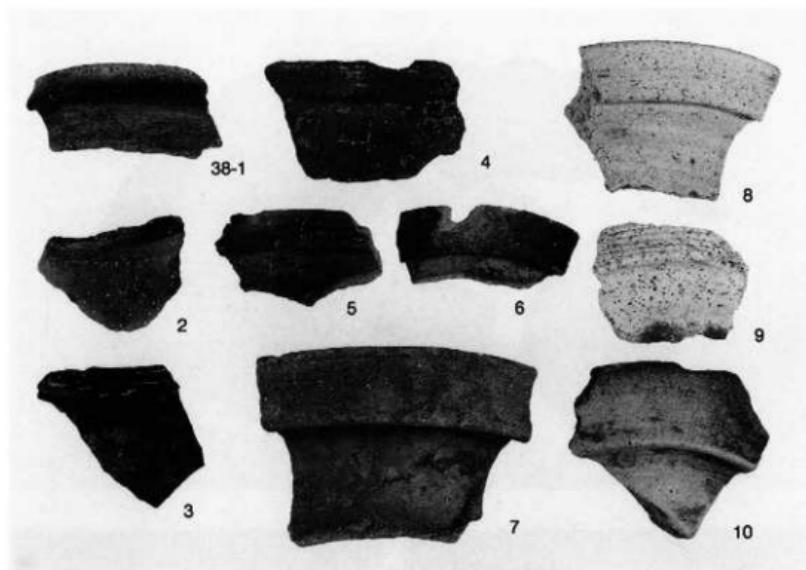
調査区南壁土層堆積状況



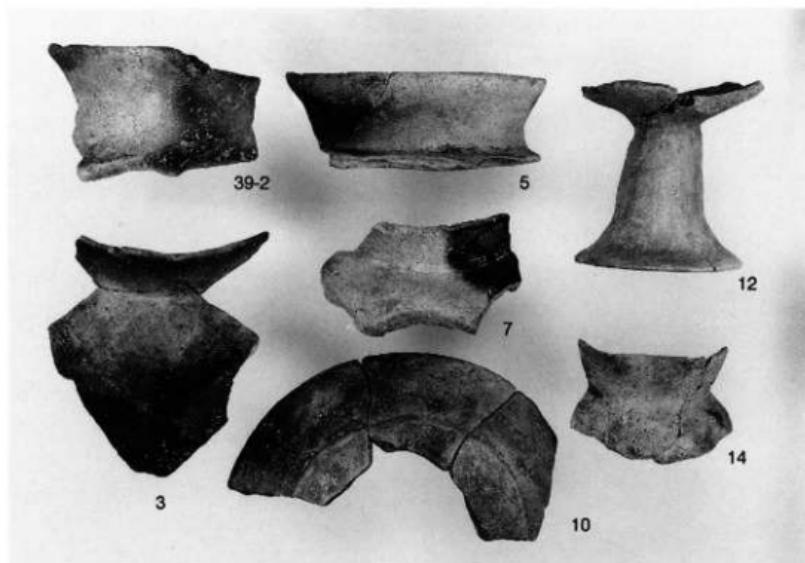
SI-01(1~5), SD-01(6, 7), Pit42(8)出土遺物



SB-01(6), SB-01周辺(1~4, 7~12), Pit42(5)出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物